

筑波大学エンパワーメント情報学プログラム 平成25年度～令和元年度 活動報告書

【公開版】

文部科学省博士課程教育リーディングプログラム
PROGRAM FOR LEADING GRADUATE SCHOOLS
SPONSORED BY THE MINISTRY OF EDUCATION, CULTURE,
SPORTS, SCIENCE AND TECHNOLOGY - JAPAN

筑波大学 グローバル教育院
エンパワーメント情報学プログラム

PH.D. PROGRAM IN EMPOWERMENT INFORMATICS

SCHOOL OF INTEGRATIVE AND GLOBAL MAJORS
UNIVERSITY OF TSUKUBA



筑波大学
University of Tsukuba

平成25年度～令和元年度 活動報告書
ACTIVITY REPORT (2013～2019)

平成25年度～令和元年度 活動報告書
ACTIVITY REPORT (2013～2019)

目 次

挨拶	1
エンパワーメント情報学プログラムの7年間の活動の概要	3
I. リーダーを養成する学位プログラムの確立	6
1. プログラムの整備	
2. カリキュラムの整備	
3. 研究指導の充実	
4. 切磋琢磨し合う取組の実施	
5. 学生の在籍する研究科・専攻との連携	
II. 産学官参画による修了者のグローバルリーダーとしての成長及び活躍の実現性	30
1. 汎用力の育成	
2. 外部機関の参画	
3. キャリアパスの見通し	
4. 学生への外部からの評価	
5. 修了者の社会での活躍状況を把握する手法の構築	
III. グローバルに活躍するリーダーを養成する指導体制の整備	44
1. 指導体制の構築	
2. 改革意識の共有	
3. グローバルな環境整備	
4. 国際ネットワークの形成	
5. 教育活動の状況	
IV. 優秀な学生の獲得	55
1. 優秀な学生の獲得	
2. 学生数等	
3. 経済的支援の実施	
4. 奨励金等の経済的支援の受給状況	
V. 世界に通用する確かな学位の質保証システム	65
1. 学位審査体制の構築	
2. 質保証システムの構築	
VI. 事業の定着・発展	69
1. マネジメント体制の構築	
2. PDCA サイクルの構築	
3. 定着・発展のための取組状況	
補遺	78

挨拶

稲垣 敏之

プログラム責任者
副学長



文部科学省博士課程教育リーディングプログラムとして平成 25 年度に採択された「エンパワーメント情報学プログラム」は、令和 2 年 3 月をもって事業期間が終了しました。

博士課程教育リーディングプログラムには、優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍できるリーダーへと導くこと、特に、アカデミア以外でも活躍できる人材を養成することが求められていました。

そのような目的のもとに開設されたエンパワーメント情報学プログラムを履修した学生への評価は高く、修了生のアカデミア以外への就職率は7割を超え、就職先も、アカデミアはもとより国内外の様々なセクターに及び、多様なキャリアパスが実現されています。事後評価においても、「計画を超えた取組が行われ、優れた成果が得られていることから、本事業の目的を十分に達成できたと評価できる」とのS評価が与えられました。

本プログラムがこのように優れた成果を得た背景には、プログラムの詳細設計のための2年余の議論、プログラム開設後の教育・研究指導・運営にご尽力いただいた学内教職員の皆様、外部評価、現地調査においてご助言下さった学外有識者の皆様、そして文部科学省、日本学術振興会、産業界の皆様方の深いご理解と温かいご支援の存在があります。この場をお借りして、皆様方に心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

筑波大学は、「柔軟な教育研究組織」と「新しい大学の仕組み」を率先して実現しようという基本理念の下でつねに改革に取り組んでいます。令和2年4月には、学生の個性と能力の伸長のために従来の組織の壁を越えて幅広い学問分野の教員が協働して教育にあたる「学位プログラム制」に移行します。

エンパワーメント情報学プログラムは、本学における学際的なプログラムを先導する役割を果たしてまいりました。そこで実現してきた分野横断型な教育・研究・運営のしくみが、今、まさに全学的に水平展開されようとしています。

そのなかで、エンパワーメント情報学プログラムは、支援期間終了後も永続的な学位プログラムとして存続し、さらなる高みを目指して歩を進めてまいります。

皆様より、引き続きのご助言、ご支援を心よりお願い申し上げます。

挨拶

岩田 洋夫

プログラムコーディネーター
システム情報系 教授



私は、平成 25 年度にエンパワーメント情報学プログラムを開始した時、グローバルリーダーに必要な資質は、技術の本質を適切に表現する「魅せ方力」、体験可能な展示を完成させる「現場力」、そして工学とは異質な評価体系を持つ芸術との「分野横断力」と考えました。これを、人をエンパワーするシステムのデザインという広い枠組みの中で、体系的な人材育成を目指して本プログラムを推進してまいりました。

本プログラムで履修した学生は、博士論文研究に加えて、エンパワーメント挑戦的教育研究活動経費の支給によって自主的なコンテスト参加を奨励し、その高い独創力と魅せ方力によって、国内外のコンテスト、学術賞において 69 件に上る多数の賞を受賞しています。また、修了生については、アカデミア以外への就職 7 割と、今までは少なかった産業界への就職や起業家への挑戦者が大幅に増加するだけでなく、産業界からは、これらの学生の「魅せ方力」「現場力」「分野横断力」が高く評価されています。

本プログラムにおいて、このように我々の人材育成目標を期待以上に達成できましたことは、文部科学省や産業界をはじめ学内外の関係者の皆様のご理解とご指導の賜物と考えます。ここに厚く御礼申し上げます。

さて、筑波大学では令和 2 年度より、全学的な大学院の改組を行い、すべての研究科・選考を廃し学位プログラムに移行します。エンパワーメントと情報学プログラムで構築してきた達成評価法は、各教育組織の特性を踏まえながら、全学的な大学院課程の質保証システムとして波及・展開しております。

このように、本プログラムは、本学における学位プログラムを先導する役割を果たしており、支援期間終了後は理工情報生命学術院システム情報工学研究群エンパワーメント情報学プログラムに移行し、永続的な学位プログラムとして定着します。

これらの取り組みが博士課程教育リーディングプログラム評価部会から高く評価され、中間評価に続き事後評価でも S 評価を得ることができました。補助金は令和元年度をもって終了しますが、引き続き本プログラムの推進のために、ご支援賜りますようお願い申し上げます。

エンパワーメント情報学プログラムの7年間の活動の概要

本報告書は、平成25年度に文部科学省博士課程教育リーディングプログラムに採択され、令和元年度に終了したエンパワーメント情報学プログラムの7年間に亘る活動状況についてまとめたものである。その概要は以下の通りである。

プログラムの整備・マネジメント体制

本プログラムは、「エンパワーメント情報学」分野における基礎的研究力に加えて、「分野横断力」「現場力」「魅せ方力」といった実践力を有する人材を育成した。総勢100名以上の担当教員には、本学に由来から在籍する教員だけでなく、本プログラムのために採用した専任教員や、国内外の大学の教員や企業の研究者が参画した。学内組織上は、教育担当副学長直属の本学グローバル教育院に置かれ、分野横断型の学位プログラムとして、既存の研究科の枠を超えて運営した。プログラム内に、教育会議、運営委員会のほか各委員会が設置し、申請時の計画を着実に実行した。

カリキュラムの整備

「エンパワーメント情報学」を構成する「補完」「協調」「拡張」の3つの柱、また「ユーザ」「システム」「コンテンツ」の3要素に基づき、カリキュラムを整備した。また、「エンパワーメント情報学プログラムにおける人材養成目的等に関する法人細則」及び「エンパワーメント情報学プログラム教育課程の編成について」を制定、周知して、カリキュラムポリシーを明確にした。

研究指導の充実・指導体制の構築

学生1名につき、指導教員1名、副指導教員2名、異分野もしくは産業界からのアドバイザー2名、計5名によるチーム指導を行った。また、各学年コーディネータと寮担当から構成される学生委員会が、学生と面談を行うことで、日常生活及び達成度評価に関する支援を行った。

切磋琢磨し合う取組の実施

本プログラムの特徴である「展示を通じてシステムを洗練する研究スタイル」を日常的に実践するため、エンパワースタジオを運用してきた。また、共同生活を通じてコラボレーションを刺激する場であるエンパワー寮を設置した。その他、ワークショップやセミナー等を本プログラムが主催し、学生と国内外の最先端の研究者との交流の機会を積極的に設けた。

汎用力の育成・外部からの評価

人材育成目標である「分野横断力」「魅せ方力」「現場力」の達成状況を定量的に評価するため、達成度の指標（5段階）を定め、学生に定期的な自己評価を行わせることとした。また、本プログラムでは、汎用力の育成のため、学生のコンテスト出展を促す指導を行っており、7年間で69件（国内外のコンテスト40件、学術賞29件）の受賞を獲得するなど、外部から高い評価を受けた。

外部機関の参画

本プログラムでは、産業界（機械、総合電機など）及び国立研究所の研究者が、担当教員として参画した。特に、産業界の担当教員は、必修科目「企業と技術者」「リサーチデザイン演習」に出講し

て学生の発表に対する評価を行うとともに、企業等においてインターンシップを行う必修科目「エンジニアリングレジデンス実習」にご協力いただいた。また、企業連携会議を設置し、プログラムの進め方などの意見交換を行い運営に反映させた。さらに、一般財団法人 TX アントレプレナーパートナーズと MOU を結んで、アントレプレナーシップ教育を強化した。これらの実施に加え、就職委員会を設置して学生の就職支援を行うことで、修了生 26 名のうち、アカデミア以外（起業含む）に就職した学生の割合は 73%（19 名）であった。

グローバルな環境整備・国際ネットワークの形成

「国際性の日常化」を浸透させるために、授業や事務手続きのバイリンガル化を実施するとともに海外入試の実施等の施策によって、留学生（4 大陸 15 か国）の増加を実現した。外国人留学生に対してはチューターを配置することで支援を行った。

国際ネットワーク形成のために、8 つの外国大学、2 つの外国企業を本プログラムの海外拠点とし、ワークショップやセミナー、展示会などの交流を実施した。また、各機関から合計 10 名の教員が本プログラムに参画し、テレビ電話システムを活用した日常的な研究指導、達成度審査への参加、本プログラム学生の受け入れなどを行った。

優秀な学生の獲得・経済的支援の実施

アドミッションポリシーを定義し、これをウェブや印刷物、入試説明会を通じて広報活動を行うことによって、優秀な学生の獲得に努めた。また、博士課程基礎力審査に合格することで、修士（人間情報学）を授与するというディプロマポリシーを平成 29 年度に策定した。その結果、7 年間で、合計 87 名（日本人 53 名、外国人留学生 34 名）を合格させた。

令和元年までに入学した学生には、筑波大学特別奨励学生として月額 18 万円の奨励金を支給した。また、一定の範囲内で TA の業務に従事することを認めたほか、国内外学会やインターンシップに参加するための旅費を支援した。また、学生の裁量によって旅費や物品等に使用できる「教育研究活動経費」や学生が自主的に立案したプロジェクトとして競争的資金を獲得できる「挑戦的教育活動経費」を支援した。

学位審査体制の構築・質保証システムの構築

本プログラムでは、人間情報学博士に関するディプロマポリシーを策定し、これに基づき、所定の単位を取得したうえで、博士論文研究基礎力審査及び 3 段階の達成度審査（第 1 段、第 2 段、最終）に合格した者が学位論文を提出し、学位審査に合格した場合に博士（人間情報学）の学位を授与することにした。平成 26 年度までに本プログラム独自に定めた実施時期、審査基準、合格要件等に基づき、学位審査委員会、学生委員会が中心となって各審査の実施を支援するとともに、平成 28 年度に本学グローバル教育院の基に博士（人間情報学）学位論文審査委員会が設置され、学位の質保証を行う枠組みを整えた。これらに基づいて達成度審査、学位審査を実施し、7 年間で 26 名の学位授与者を輩出した。

PDCA サイクルの構築

本プログラム運営委員会の下にプログラム点検・評価委員会を設置し、さらにその下に FD/SD 部会、外部評価部会を置くことにより、授業評価アンケートだけでなく、7 年間で 11 回の FD 研修会を実施

したほか、5回の外部評価委員会を開催し、外部有識者からのコメントを運営に活かした。またリーディングプログラム委員会のプログラムオフィサーによる1回/年の現地訪問によるフォローアップを受け、アントレプレナーシップ教育の強化や「人間情報学」の理解を深めるためのサイエンスカフェの開催などの施策へ結び付けた。

定着・発展のための取り組み

本学において令和2年度から実施される改組（すべての研究科・専攻の学位プログラム制への移行）対し、エンパワーメント情報学プログラムは、改組後には理工情報生命システム情報工学研究群に属し、募集人員8名の永続的な学位プログラム（学位プログラム名：エンパワーメント情報学プログラム）になる。また、現行のグローバル教育院体制を維持することにより、分野横断／融合型の教育研究の定着・発展を図るとともに、従来の人材育成目標と3ポリシー（アドミッション、カリキュラム、ディプロマ）は改組後も維持する。また、学生が学修研究に専任できるように、奨励金（7万円/人/月）の支給、授業料全額免除、教育研究活動費（20万円/人/年）の支給を行う。

令和2年3月

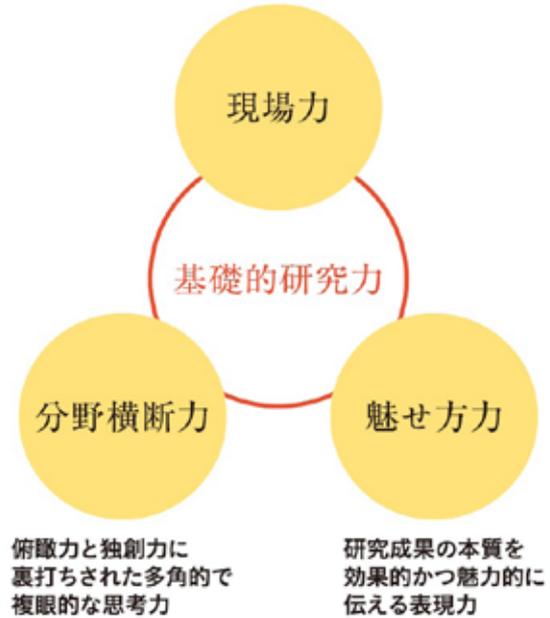
筑波大学グローバル教育院エンパワーメント情報学プログラム
プログラム責任者 稲垣 敏之
プログラムリーダー 岩田 洋夫

I. リーダーを養成する学位プログラムの確立

1. プログラムの整備

本プログラムは、多様な文化的背景を有する人々が集まる国際社会において、イニシアティブを発揮し、人をエンパワーするシステムをデザインできるグローバル人材を育成することを目的とした。「人の機能を補完し、人とともに協調し、人の機能を拡張する情報学」である「エンパワーメント情報学」分野における基礎的研究力に加えて、多角的で複眼的な思考ができる「分野横断力」、産学官にわたる実問題を解決する「現場力」、研究成果の本質を効果的かつ魅力的に伝える「魅せ方力」といった実践力を有する人材の育成をめざした。

産官学にわたる実問題の解決能力

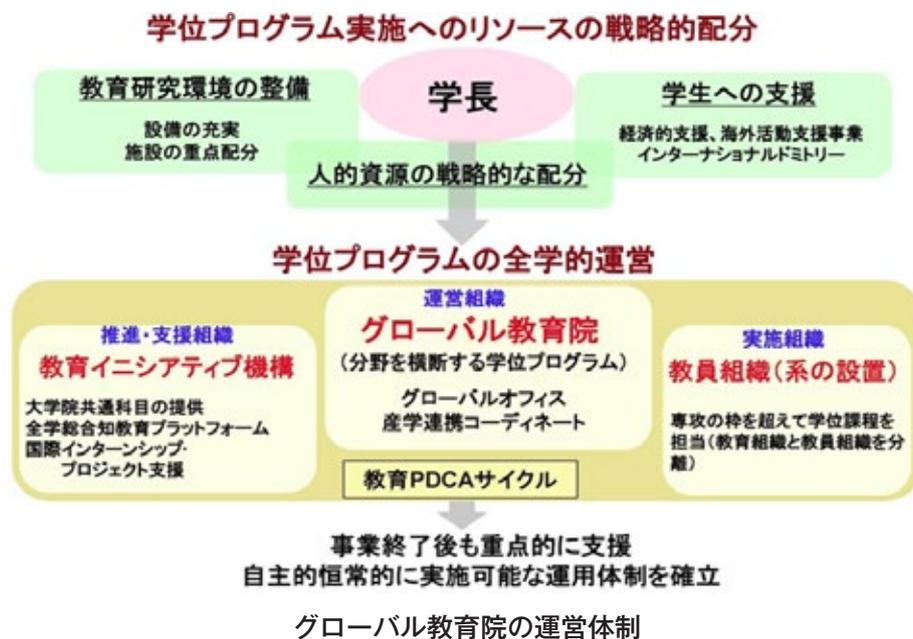


3つの人材育成目標

エンパワーメント情報学の3本柱

<p>人の機能の補完によるエンパワーメント</p>	<p>障がい者や高齢者などの身体や感覚の機能が低下した人に物理的・認知的機能を補助・補完・治療する</p> <p>ロボットスーツ HAL® (Hybrid Assistive Limb®) (補完領域サプリーダー 山海嘉之教授 研究成果)</p>	
<p>人の機能との協調によるエンパワーメント</p>	<p>人が日常的に接する工学システム（移動体等）を人と一体化するように支援する</p> <p>ドライビングシミュレータ (協調領域サプリーダー 稲垣敏之教授 研究成果)</p>	
<p>人の機能の拡張によるエンパワーメント</p>	<p>人が潜在的に有しているクリエイション機能を外在化し伸長させる</p> <p>Robot Tile (プログラムリーダー 岩田洋夫教授 研究成果)</p>	

本学では、大学院課程において分野を横断する学位プログラム等の実施・運営を行うことを目的として、平成 23 年 12 月、既存の研究科と同等の機能を持つ教育組織として「グローバル教育院」を設置した。本プログラムは、このグローバル教育院に置かれることで、全学的な支援を受け、研究科の枠組みを超えた取組を行うことが可能にした。



本プログラムは、平成 25 年度、文部科学省博士課程教育リーディングプログラムに採択された。初年度は、プログラム運営、学生受け入れ体制の整備を行った。平成 26 年度以来、学生を受け入れ、独自の教育を推進してきた。

総勢 100 名のプログラム担当教員には、本学内の教員だけでなく、国内外の大学の教員や企業の研究者が参画しており、産業界等外部の意見を、プログラム運営に活かせる体制となっている。また、これら学外の担当教員がアドバイザーとして、1 年次から学生の研究指導や達成度審査に加わることにより、専門的研究力を確保しつつ、多様な文化的背景を有する人々が集まる国際社会において、イニシアティブを発揮できるグローバル人材を育成する教育環境を整えた。

学外から参画しているプログラム担当教員（7 年間実績）

年度	H25 年度	H26 年度	H27 年度	H28 年度	H29 年度	H30 年度	R 元年度
国内大学、研究所	3 名	3 名	3 名	4 名	5 名	7 名	8 名
国内企業	4 名	4 名	6 名	6 名	6 名	6 名	5 名
海外大学	5 名	5 名	5 名	8 名	8 名	8 名	8 名
海外企業	2 名	2 名	2 名	2 名	2 名	2 名	2 名

エンパワーメント情報学プログラム

Ph.D. Program in Empowerment Informatics

人の機能を補完し、
人とともに協調し、
人の機能を拡張する情報学

科研費細目表における学術的位置付け
[系] 総合系 [分野] 情報学 [細目] 人間情報学

「人間情報学」を軸に、芸術、医学、ビジネス、
科学にまたがる総合領域
(つくば型の人間情報学)

グローバル教育院

- 全学教育機構による運用
分野毎の専攻でなく
学位主体の教育システムへ

グローバル人材養成

- 目に見える付加価値の提供
- 国際コンテスト等の
アウェイゲームを戦える強さ
- 12名の少数精鋭による競争環境

修了生のキャリアパス

「人の補完×協調×拡張」の融合業界

医療福祉介護産業、先進自動車産業、
スマート家電産業、クリエイティブインダストリ、等

人をエンパワーするシステムを
デザインできる人材の養成

学位取得 博士(人間情報学)



学位論文審査

4 5 D

3本柱の 交差と融合

研究力



エンパワ 寮制度

【切磋琢磨の日常化】
寮でのワークの単位化

学位の質を保証するための審査

A	博士論文研究 基礎力審査	博士論文研究に必要な 基礎力
B	第1段 達成度審査	深い専門性と学際性を有する 分野横断研究力
C	第2段 達成度審査	現場における実行力と 問題解決能力の審査
D	最終 達成度審査	「高い研究力」に加え グローバルリーダーとしての 「現場力」「分野横断力」「魅せ方力」

必修の専門科目(演習・実習)

①	エンパワーメント プロジェクト研究	チームワークを通じ、 プロジェクト型研究を実施
②	アドバンスド チュートリアル演習	学生主体によるディベート形式演習
③	リサーチデザイン演習	魅せ方力 異分野複合指導体制による研究計画 立案、プレゼンテーションの実践指導
④	エンジニアリング レジデンス実習	現場力 学生が国内外の企業等に滞在し、プロ ジェクトリーダーとして研究開発を行う
⑤	コラボラトリー実習	分野横断力 分野横断チームにより、研究内容の起 業化をめざしたビジネスモデルを作成

分野横断コースワーク

高度専門科目(ビジネス・芸術・医学)

コースワークと高度専門分野の連携
による分野横断的研究力の育成

現場力と魅せ方力、リーダーシップを
身につける実践的研究力の育成

高度な研究力を備えた
グローバルリーダー育成

1年次

2年次

3年次

4年次

5年次

エンパワーメント・グローバルアライアンス

- (UCLA, エジンバラ, デルフト等)
- ・海外合宿制入試
- ・エンジニアリングレジデンス実習、
コラボラトリー実習の海外実施
- ・グローバル企業への就職

異分野複合研究チーム指導体制

- ・「補完」「協調」「拡張」いずれか1つの領域から
の主任指導教員、その他の2つの領域からそれ
ぞれ副指導教員が1名ずつの計3名による指導
- ・芸術系、ビジネスサイエンス系、医学系、
産業界からの教員によるアドバイザーチーム

社会からの要請

- ・「人をエンパワーするシステム」を
創出できる人材の養成が必要不可欠
- ・第4期科学技術基本計画の重要課題

プログラムの実施体系

2. カリキュラムの整備

本プログラムでは、「人をエンパワーする」システムの創出に関して世界を牽引できるグローバルリーダーに必要な能力として、「分野横断力」「魅せ方力」「現場力」の3つを重視し、これらの涵養に資するカリキュラムを設計してきた。また、「エンパワーメント情報学」を構成する「補完」「協調」「拡張」の3つの柱を「ユーザ」「システム」「コンテンツ」の3要素に分類し、それぞれ8つの科目群と、5つの演習・実習科目及び学位論文研究科目を開設することを計画した。プログラムの始動後、平成25年度後半から、カリキュラム委員会が中心となってカリキュラムの整備に取り組んだ。まず「エンパワーメント情報学プログラムの人材養成目的等に関する法人細則」を定めて教育課程の編成方針を明らかにし、さらに「エンパワーメント情報学プログラムにおける教育課程の編成について」において、授業科目や単位数などの詳細を定めた。平成27年度からは「補完」「協調」「拡張」の各要素を教育する必修科目「人機能補完原論」・「人機能協調原論」・「人機能拡張原論」を開講し「エンパワーメント情報学」の素養と基礎を育んだ。

カリキュラムは基礎科目と専門科目の2グループで構成されており、専門科目はさらに、分野横断コースワーク（ユーザ要素科目群・システム要素科目群・コンテンツ要素科目群・共通科目群）、高度専門科目（医学系科目群・デザイン芸術系科目群・ビジネス系科目群）と、5つの演習・実習科目（「エンパワーメントプロジェクト研究」・「アドバンストチュートリアル演習」・「リサーチデザイン演習」・「エンジニアリングレジデンス実習」・「コラボラトリー実習」）、及び学位論文研究にあたる特別研究（「エンパワーメント情報学特別研究Ⅰ～Ⅴ」）から構成される。

分野横断コースワークは、ユーザ要素、システム要素、コンテンツ要素それぞれの科目群から成る。これらの科目の中には、学生が専門以外の分野についても基礎から学べるような「数値解法基礎演習」・「フィジカルコンピューティング」等の授業もある（平成27年度より）。平成28年度は、「ユーザ社会情報学」に替えて「エンパワーメント感性認知脳科学基礎論Ⅰ・Ⅱ」を開講して、ユーザ要素の講義を充実させた。また、「エンパワーメント挑戦的研究活動」、「宇宙芸術ワークショップ2016」を新規に開講することによって分野横断力や現場力の涵養を図った。

また、平成29年度は新規科目として、システム要素の基礎力強化を目的とした「機械学習基礎」と「システムダイナミクス基礎」、アントレプレナーシップ教育を目的とした「スタンダード起業家コース」と「アドバンスト起業家コース」、魅せ方力の涵養を目的とした「ビジネスコミュニケーション」を開講した。

7年間の授業科目一覧

区分		科目群	科目名	開講期間等	標準履修年次	単位数	必要単位数		
基礎科目	必修	—	エンパワーメント情報学特別演習 I	平成26年度～ (編入生履修不可)	1	4	18 (編入生20)		
			エンパワーメント情報学特別演習 I a	平成26年度～ (編入生のみ履修)	3	2			
			エンパワーメント情報学特別演習 I b	平成26年度～ (編入生のみ履修)	3	2			
			エンパワーメント情報学特別演習 II	平成26年度～ (編入生履修不可)	2	4			
			エンパワーメント情報学特別演習 II a	平成26年度～ (編入生のみ履修)	3	2			
			エンパワーメント情報学特別演習 II b	平成26年度～ (編入生のみ履修)	3	2			
			エンパワーメント情報学原論	平成27年度～ (平成27年度以降の履修生のみ履修)	1～3	3			
			人機能拡張原論	平成27年度～ (平成27年度以降の履修生のみ履修)	1～3	1			
			人機能協調原論	平成27年度～ (平成27年度以降の履修生のみ履修)	1～3	1			
			人機能補完原論	平成27年度～ (平成27年度以降の履修生のみ履修)	1～3	1			
			エンパワーメント情報学英語演習	編入生履修不可	1・2	2			
			エンパワーメント情報学英語特別演習	編入生のみ履修	3・4	4			
			企業と技術者	平成27年度～	1～3	2			
			専門科目	特別研究	必修	—		エンパワーメント情報学特別研究I	平成26年度～
エンパワーメント情報学特別研究II	平成26年度～	2					4		
エンパワーメント情報学特別研究III	平成26年度～	3					4		
エンパワーメント情報学特別研究IV	平成26年度～	4					4		
エンパワーメント情報学特別研究V	平成26年度～	5					4		
分野横断コースワーク	選択	—		運動学習論	平成26年度のみ開講	1・2	2	20 (編入生18)	
				ユーザ要素	メディカルサイバニクス	平成26年度～	1・2		2
				ユーザ心理学	平成26年度～	1・2	2		
				ユーザ情報学	平成26年度のみ開講	1・2	2		
				ユーザ社会情報学	平成27年度～平成28年度				
				神経運動制御	平成27年度～	1・2	2		
				ユーザ社会学	平成26年度～平成30年度	1・2	2		
				脳と運動学習	平成26年度～平成28年度	1・2	2		
				実験心理学方法論	平成27年度～	1・2	2		
				視覚計算特論	平成27年度～	1・2	1		
				触覚の計算論	平成27年度～	1・2	2		
				システム要素	エンパワーメント感性認知脳科学基礎論 I	平成28年度～	1～3		1
				エンパワーメント感性認知脳科学基礎論 II	平成28年度～	1～3	1		
				拡張生体学	平成26年度～	1・2	2		
				生体計測	平成26年度～	1・2	2		
五感インタフェース	平成26年度～平成29年度	1・2	2						
システムデザイン	平成26年度～平成28年度	1・2	2						
分散情報システム工学	平成26年度～	1・2	2						
スマート・ヒューマン・センシング	平成27年度～平成30年度	1・2	2						
災害情報学	平成27年度～	1・2	2						
フィジカルコンピューティング	平成27年度～	1・2	2						
電子通信方式	平成26年度～平成30年度	1・2	2						
機械学習基礎	平成29年度～	1・2	2						
システムダイナミクス基礎	平成29年度～平成30年度	1～3	2						
要素	コンテ	—	バーチャル空間モデリング	平成26年度～	1・2	2			
			実世界指向インタフェース	平成26年度～	1・2	2			
			インタラクション学	平成26年度～平成30年度	1・2	2			

区分		科目群	科目名	備考	標準 履修 年次	単 位 数	必要 単 位 数		
専門科目	分野横断 コースワーク	選択	共通科目	数値解法基礎演習	平成27年度～平成30年度	1・2	1	15 19	
				エンパワーメント挑戦的研究活動	平成28年度～	1～5	1		
				エンパワーメント情報学特別講義Ⅰ	平成26年度～平成29年度	1～5	1		
				エンパワーメント情報学特別講義Ⅱ	平成26年度～平成29年度	1・2	1		
				エンパワーメント情報学特別講義Ⅲ	平成26年度～平成29年度	1・2	1		
				エンパワーメント情報学特別講義Ⅳ	平成26年度～平成29年度	1・2	1		
				エンパワーメント情報学特別講義Ⅴ	平成30年度～	1～4	1		
	高度専門科目	選択	医学系	工学医学融合概論	平成27年度～	1～3	1	20 (編入生18)	
				感性情報デザイン	平成27年度～	1～3	1		
			芸術系	工学芸術融合概論	平成27年度～	1～3	1		
				サイエンスビジュアライゼーション	平成26年度～	1・2	1		
			ビジネス系	宇宙芸術ワークショップ	平成28年度～	1～3	2		1
				競争戦略とマーケティング	平成27年度～	1～3	1		5
				ビジネスコミュニケーション	平成27年度～	1～3	1		
				組織マネジメント	平成27年度～平成29年度	1・2	1		
				ビジネスと法Ⅰ	平成27年度～	1・2	1		
				ビジネスと法Ⅱ	平成27年度～	3・4	1		
				スタンダード起業家コース	平成29年度～平成30年度	1～4	2		
				アドバンスト起業家コース	平成29年度のみ開講	1～4	2		
				演習・実習 科目	必修	—	エンパワーメントプロジェクト研究		
アドバンストチュートリアル演習	平成26年度～	3	2						
リサーチデザイン演習	平成26年度～	4	2						
エンジニアリングレジデンス実習	平成27年度～	4	2						
コラボラトリー実習	平成28年度～	5	2						
大学院共通科目、 他研究科開設科目							0～4		
合計							70		

注) 次の授業科目を修得した単位は、その4単位までを課程修了に必要な修得単位に含めることができる。
ただし、履修に先立って指導教員の了承を得るものとする。
(1) 他研究科開設科目
(2) 大学院共通科目

以下、本プログラムのカリキュラムの特徴を示すものとして、基礎科目「エンパワーメント情報学原論」、演習・実習科目「アドバンストチュートリアル演習」、「エンパワーメントプロジェクト研究」、「宇宙芸術ワークショップ」、「エンパワーメント挑戦的研究活動」の実施状況について述べる。

(1) エンパワーメント情報学原論

「エンパワーメント情報学原論」は、1～3年次生必修の基礎科目である。本プログラムの全体像を把握し、幅広い領域に対する俯瞰力を養うことを目的とした。学生は、前半の講義で「人の機能を補完し、人とともに協調し、人の機能を拡張する情報学」である「エンパワーメント情報学」の体系をコンパクトに理解した。その後、ラボラトリーローテーションを実施し、学生が自ら選択した、大学の枠や自身の専門分野を超えた研究室の活動へ参加し（1研究室につき原則4回）、各研究室で学んだことを自分の研究計画にどのように反映するかに関する報告を行った。学生は専門分野以外（学外機関も含む）の人と交流することで、自主的に人的ネットワーク構築を行うことができた。代表事例として、令和元年度のラボローテーションの実施例を示す。

令和元年度 ラボラトリローテーション一覧

教員氏名	専門分野	参加学生氏名
岩田 洋夫 IWATA Hiroo	バーチャルリアリティ Virtual Reality	坂村 祐希 ZHANG Haihan
伊藤 誠 ITO H Makoto	認知システム安全工学 Cognitive Systems Engineering	YANG Chi-Lan
酒井 宏 SAKAI Ko	計算神経科学・認知神経科学 Computational Neuroscience, Cognitive Neuroscience	WU Yihao 秋元 優希
鈴木 健嗣 SUZUKI Kenji	人工知能 Artificial Intelligence	檜原 輝 YANG Chi-Lan
三谷 純 MITANI Ju	コンピュータグラフィックス Computer Graphics	KENNARD Maxwell West
井澤 淳 IZAWA Jun	身体性脳科学 Embodied-Brain Systems Science	市川 倭介
庄司 学 SHOJI Gaku	ライフライン地震津波防災工学 Structural Reliability Engineering	澤田 翔太
亀田 能成 KAMEDA Yoshinari	知能情報学・複合現実 Intelligence Technology and Mixed Reality	高山 周太郎
北川 博之 KITAGAWA Hiroyuki	データ工学 Data Engineering	高山 周太郎
山中 敏正 YAMANAKA Toshimasa	感性情報学・デザイン学 Kansei Science and Design	KENNARD Maxwell West 秋元 優希 WU Yihao
森嶋厚行 MORISHIMA Atsuyuki	クラウドソーシング・データ工学・データベースシステム Crowdsourcing, Data Engineering, Database Systems	澤田 翔太
井野 秀一 INO Shuichi	福祉工学 Quality of Life Technology	檜原 輝 市川 倭介
福井 和広 FUKUI Kazuhiro	画像認識・機械学習 Image Recognition, Machine Learning	坂村 祐希 ZHANG Haihan

(2) エンパワーメントプロジェクト研究による成果

「エンパワーメントプロジェクト研究」は、1・2年次必修の演習・実習科目である。プロジェクト提案から、実現、プレゼンテーションにいたる一連のプロセスを問題発見・解決型学習として実施し、所属研究や分野、学生の異なるメンバーと協同してプロジェクトを遂行することにより、チームワークにおけるリーダーシップやサポーターシップを学習した。また、多様な学術的背景を持つ学生同士の交流が促進されることで、同じ問題に対する取り組み方の違いなど分野横断的な知見の獲得ができた。代表事例として、令和元年度のエンパワーメントプロジェクト研究の実施例を示す。

令和元年度は、エンパワースタジオの設備である「Large Space」において、人の能力を「エンパワー」するようなインタラクティブシステムの開発をテーマに、3チーム10名のプログラム生が参加した。履修生は始めにグループ内でまとめたアイデアを中間発表として発表し、得られたフィードバックを基に約半年間でシステムの開発を行った。その後成果発表会をエンパワースタジオにて実施し、訪れた参加者に対し開発したシステムの説明とデモンストレーションを行なった。

令和元年度 プロジェクト研究 チーム一覧

作品名	概要	メンバー	学年
Dual-purpose robot fighting game	複数人間の協調運動データ収集のためのゲームシステムの開発	YANG Chi-Lan	3年
		高山 周太郎	1年
		WU Yihao	1年
		市川 倅太	1年
Soccer Support System for Spatial Awareness Development using Augmented Reality	サッカーにおける空間知覚を訓練するための拡張現実システム	坂村 祐希	3年
		椋原 輝	1年
		澤田 翔太	1年
Center of Attention	競技者の集中力向上を支援する VR 訓練システム	秋元 優希	1年
		KENNARD Maxwell West	1年
		ZHANG Haihan	1年



Dual-purpose robot fighting game



Soccer Support System for Spatial Awareness Development using Augmented Reality



Center of Attention

プロジェクト研究のデモンストレーションの様子

(3) アドバンスチュートリアル演習

「アドバンスチュートリアル演習」は、3年次生必修の演習・実習科目である。平成27年度までは現実社会に存在する複雑な課題を題材とした問題解決に取り組むため、数名の学生と複数分野の教員がグループを組んで、課題に関して議論を行い、ディベートを英語で行っていたが、平成28年度からは、学生主体による英語でのディベート形式を導入した。さらに平成29年度からは、ディベートの専門家である笈一彦先生を講師に招いて、競技ディベートの基礎を学びながら、社会とテクノロジーの接点に関するテーマに関して英語でディベートする演習を実施した。異なる文化的・学術的背景を持つ学生がリーダーシップを発揮し、ロジックの組み立てやスクリプトの作成をグループワークとして行った。ディベート能力の涵養に加えて、分野融合領域に関する共通理解が得られた。

令和元年度 アドバンスチュートリアル演習 実施項目

	授業題目
1日目	導入講義：ディベートについて -- 議論と批判的思考
2日目	立論の考え方
3日目	反駁の考え方
4日目	反対尋問の考え方
5日目	議論の運び方
6日目	議論でいかに説得力を持たせるか

(4) 宇宙芸術ワークショップ

「宇宙芸術ワークショップ」は、1～3年次生の選択科目であり、航空機による微小重力環境において初めて可能となる表現の探求を行う授業である。宇宙開発における成果は、地球外からの視点の獲得と、無重力環境による新たな世界観の創出である。本授業は、後者に貢献するもので、工学とアートという分野を横断し、人の機能と拡張について考察する現場力を伴う体験的な実験授業を目指した。学生は10回の演習で、0Gアートの先行事例から意義と方法論を学び、JAXA 研究員からの助言を受けて制作したモデルを使いフライト実験を行った。これらの成果をJSF (Japan Space Forum) などの外部の専門家を招いた報告会で発表した。



フライト実験の様子

令和元年度 宇宙芸術ワークショップ テーマ一覧

テーマ	概要	学生名
1) 無重力環境の燃焼の色彩と形状展開実験	異なる炎素材の組み合わせにより燃焼の広がりを造形化する。	澤田 翔太
2) 電場の刺激による電子音楽	空間に想定した電場への硬球の介入により音が歪む現象を取り込んだ音の制作実験。	檜原 輝
3) バイブレーションによる流体の造形	スピーカー、又はモータの振動により液体の球を変形させる流体彫刻の実験。	CHEN Yang
4) 無重力環境に於ける二重振り子の運動実験	二重振り子のカオス運動が無重力環境でシンプルな規則運動になるという数式の証明実験。	ZHANG Haihan

なお、令和元年度は、フライト実験のスケジュールを確保できなかったため、フライトの疑似実験（無重力落下実験）で代替した。

(5) エンパワーメント挑戦的教育研究活動

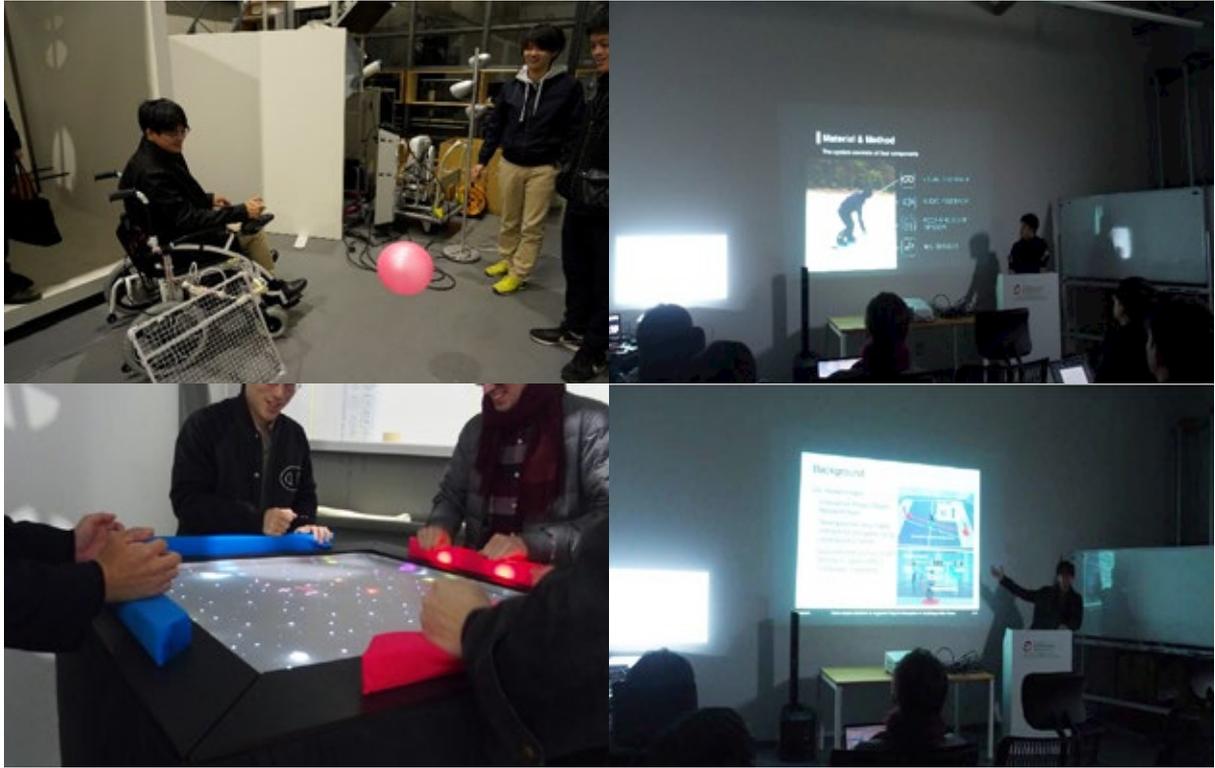
「エンパワーメント挑戦的教育研究活動」は、学生が特別奨励学生研究課題とは異なる挑戦的な研究活動を、個人またはグループで行う選択授業である。平成 28 年度より実施。この授業は、学生が自発的に企画して、必要に応じてグループの組織化、研究計画の作成、経費の見積を行って予算を立案し、説得力のあるプロポーザルとしてまとめ上げること、及び、予算を自ら管理しながら試行錯誤を繰り返しつつ研究を遂行する過程を体験することを目指した。プロポーザルは公募で募り、それらについては、数人の教員により厳正で公正な審査を受けて採否を決定した。一件当たり上限 60 万円（平成 29 年度より 50 万円）を支援した。さらに、平成 29 年度 10 月には、挑戦的教育研究開発活動の中で社会実装に特化したテーマを公募した。このテーマは、既に原理実証を終了した研究成果について、①プロトタイプを作成し、投資家、顧客等から評価を得るもの、あるいは、②社会的適用可能性、便益性等の実証実験を行うことを対象としたもので、審査は、TX アンブレプレナーパートナーズに所属する起業支援の専門家に依頼した。この活動は、一件当たり上限 100 万円を支援した。

以上の研究成果については、毎年 2 月中旬にエンパワースタジオ「ノマド型」実験室において開催する成果報告会にて発表した。

エンパワーメント挑戦的教育研究費の採択件数は、7 年間で 28 件（うち社会実装テーマは 1 件）であった。代表事例として令和元年度の採択案件を記載する。

令和元年度 エンパワーメント挑戦的教育研究活動経費 採択者一覧

	学生氏名	研究題目
1	西村 勇樹	電動車いすテニスのためのラケットとインターフェースの開発
2	桑原 隆志	人間の移動機能を拡張可能な「着るモビリティ」の実現
3	桑原 隆志	身体/環境情報フィードバックによるスノーボードの滑走アシストを可能とする装着型スマートトレーニングシステムの研究開発
4	DOLLACK Felix	El-Astrocade
5	佐野 祐士	Sports Support System の総括



エンパワーメント挑戦的研究活動成果発表会の様子（令和元年度）

3. 研究指導の充実

本プログラムでは、「補完」「協調」「拡張」のいずれかの領域で専門的知識と研究能力を深め、課程の後半ではこれらの3本柱が交差し、エンパワーメント情報学の全体像を俯瞰しつつ、3本柱が融合したシステムを構築できる人材の育成を実現する。このため、主指導教員のほか、副指導教員、さらに異分野複合研究指導チームメンバーとなるアドバイザー（企業担当者を含む）を学生が自ら選択することにより、深い専門性に加えて分野横断力の養成を図った。

本学は、情報・ロボット技術を駆使したリハビリテーションや機能回復、及び自立生活支援、自動車運転の安全性・快適性を向上させる人間機械系研究、デバイスアートによる工学者の表現力の高度化等、エンパワーメント情報学に関して世界をリードする実績を有するとともに、芸術及びビジネス科学の専門教育組織を有する稀有な総合大学である。本プログラムは、学内の5つの教員組織（システム情報系、人間系、ビジネスサイエンス系、芸術系、医学医療系、図書館情報メディア系）等から、最大81名をプログラム研究指導教員または授業担当教員として認定した。また、学外の研究者最大9名を、グローバル教育院の客員教員として任用した。プログラム担当教員ならびにプログラム協力教員を補遺（I.1. (3) プログラム担当教員、(4) プログラム協力教員）に掲載する。

7年間のプログラム担当教員

	担当区分	人数							所属
		平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	
プログラム教育会議構成員	研究指導教員	39名	38名	38名	39名	37名	38名	38名	筑波大学
	授業担当教員	9名	6名	9名	9名	9名	9名	8名	
プログラム教育会議オブザーバー	授業担当教員	32名	9名	19名	32名	35名	34名	34名	
客員教員	授業担当教員	7名	8名	7名	7名	9名	8名	8名	国内の大学または企業
海外拠点教員	研究指導教員	3名	0名	1名	3名	3名	4名	4名	外国の大学または企業
	担当認定なし	7名	7名	6名	7名	7名	6名	6名	

学生は、これらプログラム担当教員の中から、自らが主体となって異分野複合研究指導チームメンバーを選定した。このメンバーと密に連絡を取りながら、研究を実施することになる。アドバイザーは、主に学内の芸術系、ビジネスサイエンス系、医学医療系の教員、及び産業界の研究者から選任され、遠隔地にいる場合もあることから、プログラム履修生による日常生活、研究の場であるエンパワー寮及びエンパワースタジオ等に、テレビ会議システムを配置し、日常的な研究指導を可能にした。

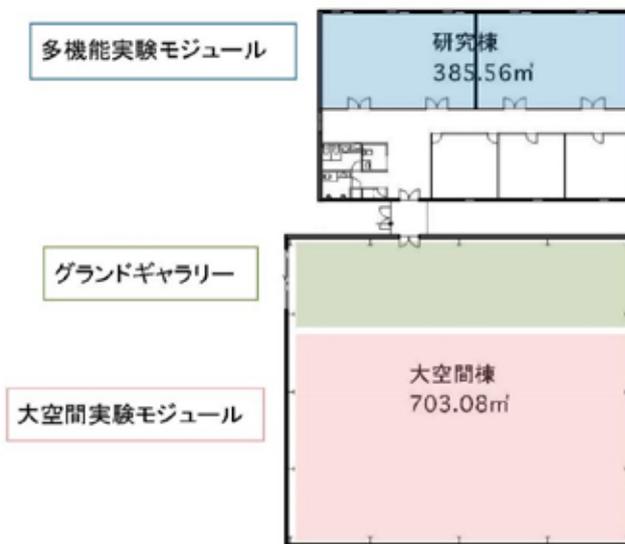
第1期生を受け入れて以来、学生1名につき主指導教員1名、副指導教員2名、アドバイザー2名の計5名の体制により指導を行った。平成26年度に、「エンパワーメント情報学プログラムにおける学生の研究指導に関する申合せ」を制定し、主指導教員、副指導教員、アドバイザーの選定方法や役割を明確化した。なお、主指導教員、副指導教員、アドバイザーは、原則として、学生の本プログラム入学から修了まで一貫して指導を行うが、所定の手続きにより変更することも可能である。

4. 切磋琢磨し合う取組の実施

学生が主体的に独創的な研究を計画・実践できる魅力的な学修研究環境の構築として、以下の取組を行った。

(1) エンパワースタジオ

本プログラムの特徴である「展示を通じてシステムを洗練する研究スタイル」を日常的に実践し、現場力、魅せ方力、分野横断力を養成するため、当初の計画通りエンパワースタジオを設置、平成26年度末から運用を開始した。



スタジオ平面図

エンパワースタジオは研究棟と大空間棟に分かれており、研究棟には、多機能実験モジュールとして、「ショールーム型」実験室と「ノマド型」実験室が設置されている。「ショールーム型」実験室に研究中のエンパワーメントシステムを常設展示し、装置を維持するために協力学生（プログラム履修生以外の学生）が入ることにより、学生間の活発な意見交換が導かれ、知的刺激の場として日常的な切磋琢磨を促した。

また、大空間棟のグランドギャラリーでは、プロトタイプを作成し、来訪者から評価を受けることで、展示制作を通じて魅せ方力・現場力を養成することをねらいとした。大空間実験モジュールである「Large Space」では、全周壁面・床面立体映像投影設備、大空間モーションベース、モーションキャプチャを完備しており、プレイフルリハビリテーションなどの開発を通じて、魅せ方力・現場力を養成することをねらいとした。



スタジオ外観



大空間棟の Large Space



ノマド型実験室



ラウンジスペースを利用する日蘭サマーワークショップの参加者

竣工以来、本スタジオは、重要施設として学内外からの見学が毎年相次いでいる。国内外の企業、大学、政府機関、研究機関からの見学、NHKなどのテレビや雑誌等の取材など7年間で、訪問件数266件、合計訪問人数：3922名を受け入れた。これらの見学者への対応には、担当教員だけでなく、学生が、自らの作品のデモを行う等、積極的に行ってきた。特に平成28年度以降5月に、学生が自主的に企画したOpen Studioを開催し、学生のデモンストレーションを一般公開した。

また、本プログラムとして積極的な対外発信として、平成27年11月13日に、本プログラムの主催にてオープンシンポジウムを開催した。文部科学省、国内外の著名な研究者・国内外連携大学および連携企業プログラム担当教員、プログラム履修生・一般参加者並びに本学教職員など100名が参加した。さらに、28年度は、本プログラム及びヒューマンバイオロジープログラムの2プログラム、平成29年度及び平成30年度及び令和元年度には、本プログラム、ヒューマンバイオロジープログラム、ライフイノベーションプログラムの3プログラムによる学位授与式が「Large Space」の映像を利用して盛大に実施した。

本プログラムで導入した大型備品は、エンパワースタジオ研究棟「ノマド型」実験室に置かれており、学生は、自主的に先進的なものづくりに従事した。

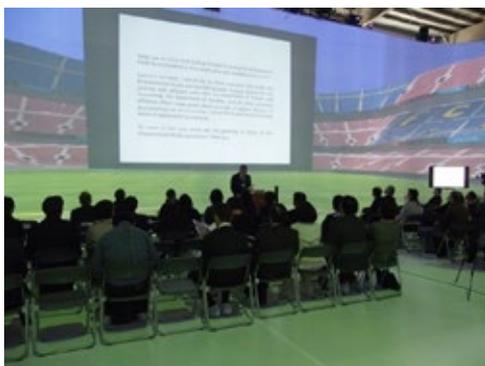
平成27年度より、専任教員がエンパワースタジオに居室を構えており、本スタジオは、教育・研究の公式な場であるばかりでなく、教員と学生との気軽なコミュニケーションの場ともなっている。平成29年度には、本スタジオにラウンジスペースを設け、学生同士の更なる交流の場を設けた。

導入設備備品名

3Dプリンタ
簡易3Dプリンタ
大判プリンタ
レーザーカッター
UV-LEDプリンタ
プリント基板加工機
バンドソー・ボール盤等工作機器
体育倉庫
助走路マット



Open Studio 2019



Large Space で開催されたシンポジウム



Large Space で開催された学位授与式

(2) エンパワー寮

エンパワー寮は、当初の計画どおり、共同生活を通して異文化・異分野の理解を深め、学生間の自発的な意見交換を導く知的刺激の場として、学生同士の日常的な切磋琢磨を促す施設である。本学追越宿舎の1棟全体をエンパワー寮とし、平成26年度から運用を開始した。



コモンルームでのセミナーの様子



懇親会の様子

1・2年次生は原則として全寮制としており、令和元年度末の時点で、1年次生8名、2年次生10名、3年次生2名、4年次生1名、5年次生3名の計24名が入寮している（内留学生9名）。

寮2階には、コモンルームを設けた。コモンルームは学生同士が気軽に交流できるラウンジであるばかりでなく、無線LAN、テレビ会議システム、スマートインフィルが備え付けられているため、プレゼンテーション練習、研究成果発表、遠隔指導、レクリエーションなど学生主体で多様な利用を可能にしている。

通常、大学院生は研究室毎に生活の場が分かれているが、本プログラムでは寮制度を導入することによって、プログラム履修生間の自主的なPBL（Problem based learning）の機会が発生し、研究室を超えたコラボレーションが生まれ、コンテストへの応募などの成果として表われた。

(3) EMP セミナーシリーズ等

エンパワーメント情報学における主要な学術領域の最先端の研究者を国外から招聘し、7年間で36件のセミナーを行った。各回のセミナーには、プログラム履修生だけでなく他専攻の学生や教員が参加し、国内外の最新のテーマについて活発な議論を行い、参加者間の交流を深めることができた。

7年間のEMPセミナー 開催実績

平成25-26年度

	実施日	講師	テーマ
第1回	10月16日	インペリアル・カレッジ・ロンドン Atsushi Takagi 氏	Human-human motor interaction through a compliant connection
第2回	10月28日	NTTコミュニケーション科学基礎研究所 浅井 智久 氏	運動が生み出す「自己」と「他者」
第3回	11月27日	マギル大学 David J. Ostry 氏	Motor learning and sensory plasticity
第4回	12月3日	京都工芸繊維大学 倉本 到 氏	日常をエンタテインメントに：エンタテインメントコンピューティング研究の一潮流

	実施日	講師	テーマ
第5回	1月9日	アイントホーフェン工科大学 Pierre Lévy 氏	Perceptive Qualities in Interaction – a Research-through-Design on perceptual crossing
第6回	2月9日	ボルドー工科大学 Stéphane Azzopardi 氏 ボルドーモンターニュ大学, MICA Stéphanie Cardoso 氏	フランスにおける大学院プログラ ムの概要とボルドー工科大学の取 り組み メディアアートにおける学生作品
第7回	3月4日	ノースウェスタン大学 Ferdinando Mussa-Ivaldi 氏	Body-Machine Interface

平成 27 年度

	実施日	講師	テーマ
第1回	5月23日	ジャン-バティスト (ダイソン シニア デザインエンジニア)	ダイソン レクチャー&ワーク ショップ
第2回	5月26日	Hideaki Ogawa Ph.D. (Ars Electronica Futurelab, Artist and Creative Catalyst)	Ars Electronica as Creative Catalysts
第3回	6月2日	Nicolas Schweighofer (University of Southern California, Department of Biokinesiology and Physical Therapy, Associate Professor)	Computational Neuro-Rehabilitation: Studying interactions between arm use and function post-stroke
第4回	6月12日	西條 直樹 (日本電信電話株式会社 研究企 画部門 プロデュース担当 主任研究員) 正木 信夫 (株式会社 ATR-Promotions 脳活動イメージングセンター長) 内田 史彦 (筑波大学教授国際産学連携本部 本部審議役)	基礎研究と事業化の谷を越える
第5回	7月13日	稲見 昌彦 (慶応義塾大学大学院メディアデザイン研究 科)	Augmented Human (拡張人間) を 実現するための自在化技術
第6回	7月27日	Horst Hörtner (Ars Electronica Futurelab, Senior Director)	Spaxels
第7回	10月30日	持丸 正明 (産業技術総合研究所 人間情報研究部門 部 門長)	デジタルヒューマン情報学
第8回	11月6日	本村 陽一 (産業技術総合研究所 人工知能研究セン ター 副研究センター長/確率モデリング研 究チーム長)	次世代人工知能技術における確 率モデリング～ AI for human life, service and society ～
第1回コロ キウムシ リーズ	11月30日	Cheng Cheng Yang (Associate Professor of the Graduate Institute of Educational Administration and Policy Development, National Chiayi University)	Benefits and Potential Challenges of Internationalizing Higher Education: Taiwan Experiences
第9回	12月18日	Erkki Hutamo (University of California Los Angeles, Department of Design Media Arts, and Film, Television, and Digital Media)	The Rise and Fall of Google Glass – Media Archaeological Perspectives
第10回	2月19日	Paul Luff (King's College London)	Collaboration and Interaction: Opportunities and Challenges of Interdisciplinary Research in Technological Design and Development
第2回コロ キウムシ リーズ	3月17日	Nicholas M. Patrikalakis	Field Robotics for Civil and Marine Engineering

	実施日	講師	テーマ
第11回	3月20日	長谷川 泰久 (名古屋大学大学院工学研究科) 今水 寛 (東京大学大学院人文社会系研究科/ATR 認知機構研究所 客員所長) 森岡 周 (畿央大学ニューロリハビリテーション研究センター センター長) 斎藤 環 (筑波大学医学医療系)	拡張する身体性とその脳内表現

平成 28 年度

	実施日	講師	テーマ
第3回 コロキウム シリーズ	6月3日	David Craig (Clinical Assistant Professor, University of Southern California)	COMMUNITAINMENT: Mapping the new screen ecology of social media entertainment
第1回	6月10日	Sethu Vijayakumar (Professor, University of Edinburgh)	Statistical Machine Learning and Motor Control
第4回 コロキウム シリーズ	10月18日	Reah Miyara (Product manager on the Watson Industry Applications team and a former software engineer on the Watson Life team)	Cognitive Computing and its Applications
第5回 コロキウム シリーズ	10月31日	Nicholas M. Patrikalakis (Kawasaki Professor of Engineering, The Massachusetts Institute of Technology, Department of Mechanical Engineering)	SHAPE MODELING AND INTERROGATION
第2回	11月21日	和田 隆広 (立命館大学 情報理工学部 知能情報学科 教授)	Mathematical Modeling of Comfort in Human Location and Its Application to Human Machine Systems
第3回	11月29日	川口 克己 (日本アイ・ビー・エム(株) ワトソン事業部 ヘルスケア事業開発部 部長)	学習するコンピューター IBM Watson、医療応用への挑戦
第6回 コロキウム シリーズ	11月30日	Brian Morishita (Zynga Inc., Senior Software Engineer)	Agile Mobile Game Development at Zynga
第4回	12月1日	大高 洋平 (慶應義塾大学医学部 リハビリテーション 医学教室)	活動とリハビリテーション
第7回 コロキウム シリーズ	12月20日	Erkki Huhtamo (Professor of Design Media Arts and Film, Television and Digital Media, UCLA)	Screenology: Media Archaeology of the Screen
第8回 コロキウム シリーズ	2月23日	土佐信道 (明和電機 代表取締役社長)	明和電機のナンセンスマシーン
第5回	3月14日	Barry Brown (Professor, University of Stockholm)	Mobile Life: A research overview

平成 29 年度

	実施日	講師	テーマ
第1回 セミナーシ リーズ	5月19日	Morten Fjeld (Professor, Chalmers University of Technology)	Multi-Device Analysis around Tabletops

	実施日	講師	テーマ
第2回 セミナーシ リーズ	7月5日	Larry J. Young (Professor of Department of Psychiatry and Behavioral Science, Director of Center for Translational Social Neuroscience, Chief of Division of Behavioral Neuroscience and Psychiatric Disorders, Emory University, Atlanta GA, USA.)	The Neurobiology of Social Bonding, Social Loss and Empathy
第3回 セミナーシ リーズ	8月4日	Takayuki Ito (Research Scientist, Gipsa-lab, CNRS, France)	Orofacial somatosensory system
第9回 コロキウム シリーズ	5月23日	Eddo Stern (Professor of Department of Design Media Arts, UCLA)	All about games and art
第10回 コロキウム シリーズ	7月10日	後藤 英 准教授, 東京芸術大学音楽学部音楽環境創造科	Virtual Musical Instrument - Its evolution with an application of Virtual Reality and Augmented Reality
第11回 コロキウム シリーズ	11月29日	Jake Fountain (Ph.D. Student, The University of Newcastle, Australia)	Accessible Ubiquitous Skeleton Tracking for Virtual Reality
スペシャル コロキウム シリーズ	7月19日	Christa Sommerer (Professor, Interface Cultures, University of Art and Design in Linz, Austria) Laurent Mignonneau (Professor, Interface Cultures, University of Art and Design in Linz, Austria)	Interactive Art- Between Participatory Strategies and Interaction Design

平成30年度

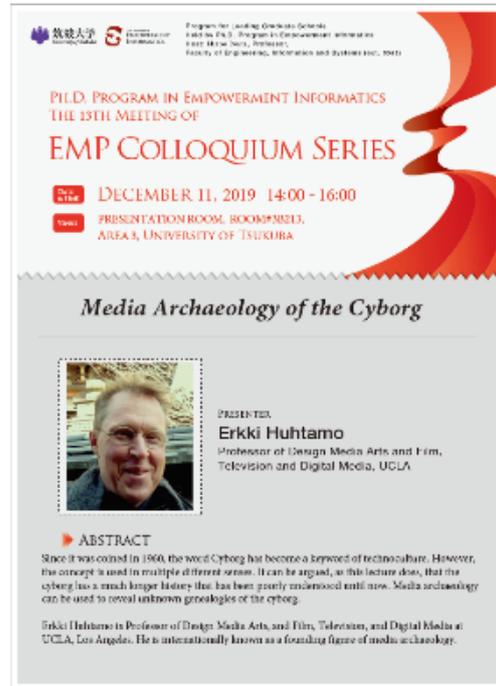
	実施日	講師	テーマ
第1回 セミナーシ リーズ	4月11日	Dr. J. Michael Herrmann (University of Edinburgh, School of Informatics and Edinburgh Centre for Robotics)	Critical Brains for Autonomous Robots
第2回 セミナーシ リーズ	12月14日	Prof. Burdet Etienne (Faculty of Engineering, Department of Bioengineering, Imperial College London)	Human-machine interaction and neurorehabilitation
第12回 コロキウム シリーズ	12月21日	Prof. Erkki Huhtamo (Design Media Arts and Film, Television and Digital Media, UCLA)	Media, Motion and Transportation: An Archaeological Investigation
第1回 スチューデント コロキウム シリーズ	9月20日	Mr. ISHAC Karlos (CEO/Founder, LifeChair)	Impactful Inventions: My Journey Building a Robotics Company and Transforming Research into a Global Product

令和元年度

	実施日	講師	テーマ
第13回 コロキウム シリーズ	12月11日	Prof. HUHTAMO Erkki (Design Media Arts and Film, Television and Digital Media, UCLA)	Media, Motion and Transportation: An Archaeological Investigation



セミナーの様子



第13回 EMP コロキウムシリーズ ポスター

(4) リーディングプログラム間の連携事業

本プログラムは、文部科学省博士課程教育リーディングプログラム間の連携を重視しており、種々の事業等に参画した。以下に主なものを掲載する。なお、学生の学年は、活動当時の年次を示す。

博士課程教育リーディングフォーラム

博士課程教育リーディングフォーラムは、博士課程教育リーディングプログラムに採択された全国30大学62プログラムの学生、教員、関係事務職員だけでなく、産業界、研究機関、行政機関、アカデミアから幅広く参集して、博士人材の育成について議論するとともに、学生だけでなくプログラム関係者の交流を深め、より質の高いプログラムの実現を目指すことを目的としたものである。

エンパワーメント情報学プログラムでは、平成27年度のフォーラムから、毎回5～7名の学生と3～5名の教職員が参加し、プログラムとネットワークを深化させることができた。

博士課程教育リーディングフォーラムの実施概要

日時	主催大学	会場	テーマ
平成27年 10月24日～ 25日	東京大学	ベルサール 新宿グランド	<ul style="list-style-type: none"> リーディングプログラムによる抜本的な博士課程への取り組みによって、変わりつつあるものを社会に発信。 プログラム関係者の交流を深め、より質の高いプログラム実現をめざす。
平成28年 11月11日～ 12日	慶応義塾大学	ヒルトン東京 お台場	<ul style="list-style-type: none"> 産業界にフォーカスし、日本経済団体連合会との共催の下で、産学共創による次代の博士人材の育成と活用。
平成29年 10月20日～ 21日	名古屋大学	名古屋マリオットアソシアホテル 16階タワーズボールルーム	<ul style="list-style-type: none"> リーディングプログラムのレガシーと修了生への期待。

日時	主催大学	会場	テーマ
平成 30 年 12 月 4 日	東京工業大学 一橋大学	一橋大学一橋講堂	・ 社会に新しい価値を実装。 ・ リーディングプログラム資産を将来に 生かすために。
令和元年 11 月 30 日	早稲田大学	早稲田大学国際会議場井深大記念 ホール	・ 私は世界をこう変える。

代表事例として、以下、令和元年に実施されたリーディングフォーラムの概要を示す。

令和元年 11 月 30 日、早稲田大学国際会議場井深大記念ホールにおいて、博士課程教育リーディングプログラムフォーラム 2019 が開催され、本プログラム履修生 3 名（3 年次生 YANG Chi-Lan、1 年次生 榎原輝、澤田翔太）が参加した。本フォーラムでは、地球規模の持続可能な共通課題である、SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS (SDGs) で掲げられた 17 の国際目標を中心とし、ファシリテータを含めた場において異なるリーディング大学院プログラムの修了生・履修生が議論した。

セッション B（日本語）では、1 年次生 榎原輝が目標 9. 「産業と技術革新の基盤をつくろう」、1 年次生 澤田翔太が目標 13. 「気候変動に具体的な対策を」について、セッション C（英語）で 3 年次生 YANG Chi-Lan が目標 4. 「質の高い教育をみんなに」のチームへそれぞれ参加した。

各セッションにおけるワークショップ内では、チームごとに国際目標達成のための解決策と、その結果としての 10 年後の世界を描くためにディスカッションを重ね、発表内容をまとめた。各チームの発表では、3 年次生 YANG Chi-Lan と 1 年次生 榎原輝がそれぞれチームを代表して未来に向けたメッセージを発信した。

短時間に関わらず、参加学生においては、自主的にチーム内の議論に参加するだけでなく、意見の取りまとめやブラッシュアップを行うことができた。学生間の交流や、未来を見通した解決策提案などについて、スキルアップを図る良い機会となった。

全国博士課程教育リーディングプログラム学生会議議

全国リーディング学生会議は、平成 25 年度から開催された会議であり、学生の自主的な運営委のもとリーディングプログラムの学生が全国から集結し、アイデア創出型ワークショップ等を通して、即戦力として求められる応用力や、問題解決力等を鍛えることを目的としている。本プログラムからは平成 26 年より参加した。特に、平成 28 年 7 月 8 日（金）～10 日（日）に幕張メッセ・国際会議場にて開催された、第 4 回全国博士課程教育リーディングプロ



ディスカッションの様子



未来に向けたメッセージの発信



EMP 参加学生による集合写真

グラム学生会議は、千葉大学免疫システム調節治療学推進リーダー養成プログラムと本学のヒューマンバイオロジー学位プログラム（HBP）、そしてエンパワーメント情報学プログラム（EMP）の共催で行われた。運営にはEMP学生16名が携わり、多くの人が関わるからこそ起こる問題やマネジメントについて学ぶ貴重な機会となった。

Interdisciplinary Workshop for Leading Students (IW4LS)

Interdisciplinary Workshop for Leading Students は分野横断型（情報）リーディングプログラムの連携強化、学生交流を目的としたもので、早稲田大学「実体情報学博士プログラム」、豊橋技術科学大学「超大规模脳情報を高度に技術するブレイン情報アーキテクトの育成」、筑波大学「エンパワーメント情報学プログラム」、名古屋大学「実世界データ循環学リーダー人材養成プログラム」の4リーディングが毎年輪番主催した。毎回、学生、教員、約100名が集まり、お互いのリーディングの紹介や、連携についてディスカッションをし、交流を深めた。

IW4LS の実施概要

No.	日時	主催プログラム	ワークショップのテーマ
1	平成 27 年 4 月 11 日	名古屋大学 実世界データ循環学 リーダー人材養成プログラム	Collaboration with the Graduate Program for Real-World Data Circulation Leaders, Nagoya University.
2	平成 28 年 4 月 9 日	早稲田大学 実態情報学博士プログラム	「学生と先生」「先輩と後輩」「異分野の学生間」の関係を向上させる向上案。
3	平成 29 年 4 月 8 日	豊橋技術科学大学 超大规模脳情報を高度に技術する ブレイン情報アーキテクトの育成	リーディングプログラム履修生の知見を組み合わせ、〇〇にXXをアピールするプロジェクトを提案せよ。
4	平成 30 年 4 月 6 日 ～7 日	筑波大学 エンパワーメント情報学 プログラム	20年後の未来に私達が実現化するであろう。未来のライフスタイル、デバイス、サービス、システムはなにか？

代表事例として、本プログラムが主催した時の、IW4LS の概要を以下に記載する。

平成 30 年 4 月 6 日～7 日、エンパワースタジオにおいて、本プログラムの主催で、Interdisciplinary Workshop for Leading Students 2018 (IW4LS2018) を開催した。今回の参加者は全体で 83 名（内学生 56 名、教員 20 名、事務 7 名）。筑波大学は総計 42 名（内学生 29 名、教員 9 名、事務 4 名）が参加した。なお、今回は本プログラムの 4 年次生が中心になって、ワークショップの運営にあたった。

ワークショップは 2 日にわたって開催され、1 日目は岩田プログラムリーダーの挨拶後、各大学の紹介、施設見学の後、7 チームに分かれてグループワークを実施した。今回のグループワークのテーマは、「20 年後の未来に私達が実現化するであろう、未来のライフスタイル、デバイス、サービス、システムはなにか？」であり、各チームはダンボール等を使ったプロトタイプを作成し、最終発表では未来の世界を劇形式で表現した。1 日目は夜遅くまでアイデアソンを実施し、2 日目の午前中に昨日考えたアイデアをモックアップ等で作製、午後から「Large Space」で一堂に会しグループワークの成果発



アイデアソン

表会を開いた。成果発表については、教員を含む参加者全員が4つの評価項目（視点／アイデアの質、フィージビリティ、社会的インパクト、プレゼンテーションのわかりやすさ）で評価した結果、“Salty Smart Barrier-Ful House”を発表したチームが Best Proposal Award を受賞した。このチームには本プログラムの新入生より1年次生 本間由樹子と CHEN Yang が参加していた。発表会後の情報交換会は、本学校内の Café MARHABAN にて開催、総勢 77 名の参加があり、発表会の表彰式が行われるとともに、4大学の懇親を深めることができ、ネットワークを広げるための絶好の機会であった。



成果発表会

Tsukuba-Waseda Leading Summer School

Tsukuba-Waseda Leading Summer School は、早稲田大学「実体情報学博士プログラム」と本プログラムの連携強化と学生間の交流を目的に、平成 27 年度より毎年開催した。

Tsukuba-Waseda Leading Summer School の実施概要

No.	日時	開催場所	参加学生数	ワークショップの内容
1	平成 27 年 8 月 1 日 ～ 2 日	早稲田大学 「工房」	13 名	・ 6 つのチームにわかれて 3 つのテーマについてディベートを実施。
2	平成 28 年 10 月 1 日 ～ 2 日	筑波大学 エンパワー スタジオ	13 名	・ エンパワースタジオにある世界最大級のバーチャルリアリティ (VR) 空間 Large Space を使用し VR コンテンツを提案・制作するハッカソン。
3	平成 29 年 9 月 30 日～ 10 月 1 日	早稲田大学 「工房」	30 名	・ 中国の精華大学も参加し、実体情報学プログラムで開発されたコンパニオンロボット「cbot」の動作プログラミングを使ったハッカソンを実施。
4	平成 30 年 10 月 20 日 ～ 21 日	早稲田大学 「工房」	13 名	・ 同グループのメンバーの研究について、他のメンバーが発表を行い、お互いの研究について理解を深め、自分のプレゼンテーションで足りないところなどを学ぶ。 ・ 各自の研究において重要な Research Question について、ディスカッションを実施。
5	令和元年 10 月 19 日	早稲田大学 「工房」	12 名	・ 「分野横断的とは?」「仮想と現実の境界は?」といったオープンクエスチョンについての哲学対話。 ・ 各自の研究テーマに関するポスター発表。

以下、代表事例として、令和元年に開催された Tsukuba-Waseda Leading Summer School 2019 の概要を記載する。

令和元年 10 月 19 日、早稲田大学実体情報学プログラム「工房」において、Tsukuba-Waseda Leading Summer School 2019 を実施した。本イベントは、エンパワーメント情報学プログラムと早稲田大学実体情報学プログラムが合同で毎年開催しているワークショップであり、今年は各大学から合計 12 名の学生が参加した。

本年度はまず前半に「深い議論をしよう」という名目で、「分野横断的とは?」「仮想と現実の境界は何か?」といったオープンクエスチョンについて「哲学対話」方式によりグループで議論を深めた。参加者はそれぞれ 2 グループに別れ、「何を話してもいい」「他人の意見を否定しない」といったルールの下で日頃の研究ディスカッションとは異なる、「考えること」を目的とした対話を行った。

後半は各自の研究テーマに関するポスター発表を実施し、他大学のリーディングプログラム生や、同じプログラムでも他学年といった普段接することの少ないメンバーの研究テーマについて十分な時間を使って発表と質疑を行うことができた。

短い間ではあったが、夜には懇親会も開催され、学生間、教員間の交流も深まる非常に良い機会となった。



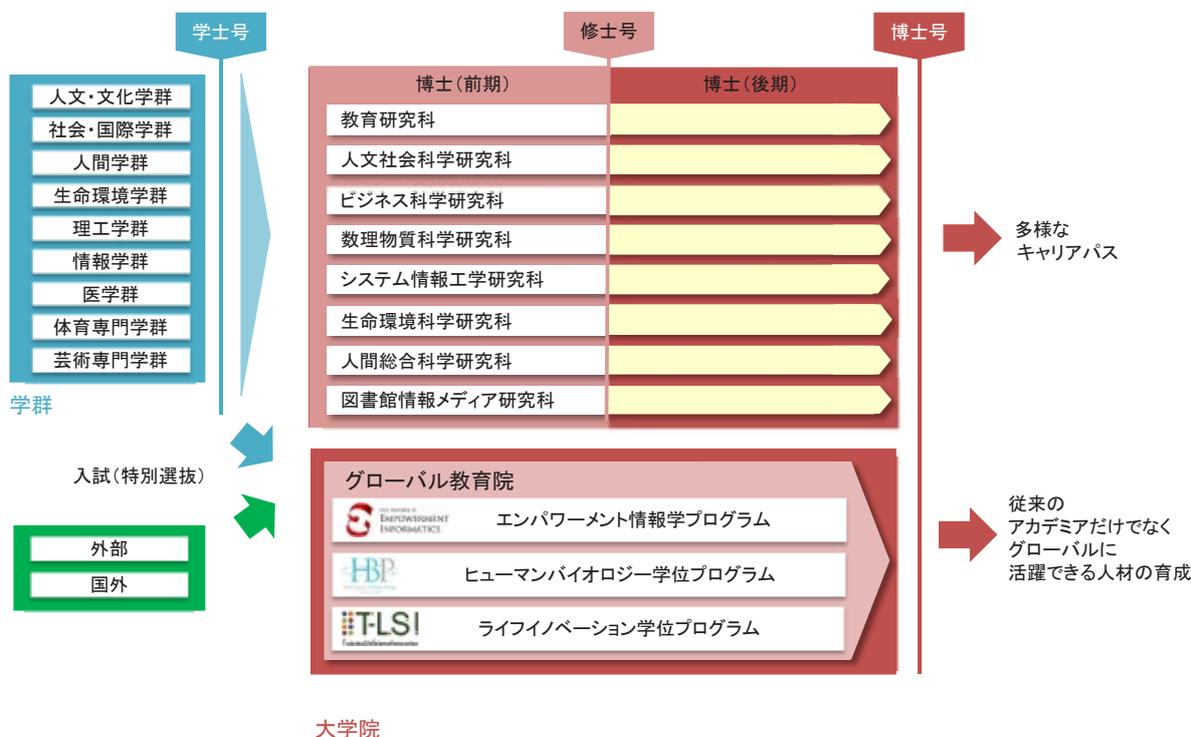
ワークショップの様子

5. 学生の在籍する研究科・専攻との連携

本学では、エンパワーメント情報学プログラムのような分野横断型の学位プログラムを運営するために、既存の研究科と同等の機能を持つ教育組織として、グローバル教育院を設置している。既存の専攻に相当するものとして、グローバル教育院の下に、エンパワーメント情報学プログラムが設置された。よって、本プログラム履修生は、研究科や専攻ではなく、グローバル教育院エンパワーメント情報学プログラムに所属し、学位プログラムのために構築された独自のカリキュラムによる教育を受け、課程修了時には博士（人間情報学）を授与される。グローバル教育院の基に博士（人間情報学）学位論文審査委員会が設置され、学位の質保証を行う枠組みを整えた。これは、全学的に統一した審査基準等による博士学位の質保証に寄与するものであり、本学の大学院教育の改革を先導している。

既存の研究科・専攻の中に特別な履修コースとして学位プログラムが設置されている場合には、既存の専攻の修了要件に加えて履修コースの修了要件を満たすことが要求され、ともすれば学生の負担が過大になる可能性もあるが、本学ではグローバル教育院に学位プログラムを置くことにより、このような懸念を解消した。

一方、本プログラムは、5年一貫の博士課程であり、グローバルリーダーを育成する目的上、通常の大学院専攻よりも取得すべき単位数や修了要件がきびしく設定されている。このため、本プログラムへの入学後に、万一、プログラムの履修継続が難しいと判断される学生が生じた場合、転研究科・転専攻の手続きを行うことで、既存の研究科で大学院生として学修を継続できるセーフティネットの仕組みを整えた。このことは、平成26年度に、「転研究科・転専攻の取扱いについて」を定め、明文化した。なお、本プログラムの研究指導教員は、基本的に既存研究科の研究指導教員でもあるので、本プログラムと既存研究科・専攻との連携は円滑に行われた。



大学院

グローバル教育院と各研究科

II. 産学官参画による修了者のグローバルリーダーとしての成長及び活躍の実現性

1. 汎用力の育成

本プログラムでは、人材育成目標である「分野横断力」「魅せ方力」「現場力」の達成状況を、分野横断コースワークだけではなく、アドバンスチュートリアル演習、エンジニアリングレジデンス実習といった各々の教育活動と対応させ、スチューデント・ポートフォリオに基づき定量的に評価した。学位審査委員会と学生委員会が中心となり、学生が自ら学修状況を把握するため行う評価と、学位論文審査の前段階として教員の参画のもと行う審査とを明確に区別することとし、後者を「達成度審査」と呼ぶこととした。達成度審査においては3段階の達成度審査（ASA1、ASA2、FASA）を整備した。平成28年度にASA1、ASA2、FASAを実施した。また、達成度審査に関連するものとして、博士論文研究基礎力審査（QE）と学位審査を実施した。学生による自己評価及び達成度審査、QEに共通の指標を定め、学生へフィードバックすることにより、学生が自らの成長を実感できる仕組みを平成27年度までに構築した。

達成度の指標

※自己評価、審査で共通

レベル1	入学時
レベル2	博士論文のための研究に必要な基礎力があると認められるレベル 通常、2年次に到達 博士論文研究基礎力審査（QE）に合格するために必要
レベル3	一般プログラムの修士を明確に上回るレベル 通常、2・3年次に到達 50単位の修得、分野横断力を中心に評価 第1段達成度審査（ASA1）に合格するために必要
レベル4	一般プログラムの博士に匹敵するレベル 通常、3・4年次に到達 高い研究力+企画力・魅せ方力を中心に評価 第2段達成度審査（ASA2）に合格するために必要
レベル5	本プログラムの人材育成目標に合致するレベル 通常、5年次に到達 最終達成度審査（FASA、学位論文予備審査に相当）に合格するために必要

学生の自己評価、教員による審査のいずれにおいても、達成度を測る指標が同じであるため、それぞれで使用する「達成度自己評価表」「達成度自己点検シート」「達成度審査評価表」等の様式は全て、本プログラムの人材育成目標である「分野横断力」「魅せ方力」「現場力」ごとに項目を設定し、それぞれの達成度が記入できるように定めた。

なお、学生による自己評価は、半期に一度行うが、もれなく行うことを促すため、本プログラム学生委員会が支援にあたり、各学年のコーディネータ教員による個人面談を行った。平成29年度以降は、春学期末と秋学期のASA実施前には、各学年コーディネータが、学生の記入した達成度自己評価表をもとに、科目の履修や研究に関する助言を行った。

2. 外部機関の参画

本プログラムには、グローバルに活躍する人材育成のため、筑波大学と産学連携等を通じて交流のある産業界（機械、総合電機など）及び筑波研究学園都市に立地する研究所等からの教員が参画した。

平成26年度から、本学との連携大学院制度等による研究者に加え、産業界（パナソニック株式会社、日産自動車株式会社、株式会社日立製作所、日本電気株式会社、株式会社資生堂）の研究者を本学グローバル教育院の客員教員として任用し、本プログラムと外部機関との連携を強化した。国内機関からのプログラム参加者は、補遺（I.1.（3）（b）学外研究指導教員、I.1.（4）（b）学外授業担当教員）に掲載する。

これらの客員教員には、平成27年度から開講されている必修の基礎科目「企業と技術者」や、演習・実習科目「リサーチデザイン演習」に積極的に参画していただいた。また、平成31年2月8日に産業界の参画者にご参集いただき、企業連携会議を開催した。この会議では、今まで本プログラムで実施された企業教育について総括し、補助金終了後の連携について意見交換を行った。その結果、今までで実施した本プログラムでの教育実施状況の全体像を把握いただき、優秀な学生が育っていることをご確認いただいた。また、今後、授業への参画、博士論文の指導、学生の進路相談などにご協力いただけることになった。

さらに、「企業の考える人間情報学及びそれらの取り組み状況」、「大学や学生への期待」について意見交換し、人間情報学について企業人との認識を共有するとともに、その周知を図ることができた。



企業連携会議の様子



企業連携委員（客員教員）

また、本プログラムではベンチャー企業・ベンチャーキャピタルとの理念共有を進めており、一般財団法人TXアントレプレナーパートナーズ（TEP）を中心としたベンチャー支援のプロフェッショナルにプログラムのアドバイザーとして参画していただいた。さらに、その関係を深める為に、平成29年4月21日に、エンパワースタジオにおいて、TEP 国土晋吾代表理事とEMP 岩田洋夫プログラムコーディネーターの間で起業家教育に関する覚書を調印した。この覚書は、TEPとEMPは協力してEMPの学生の起業家教育を推進するとともに、TEPは起業家を目指す学生の起業支援を行うことで、ベンチャー企業の創出を促進することを目的にした。TEPは日本を代表する研究開発型ベンチャーの起業支援機関であり、これによりEMPのアントレプレナーシップ教育を強化した。



TEPとEMPのMOU締結式

3. キャリアパスの見通し

以下の科目をカリキュラムに組み込み、グローバルに活躍する多様で具体的なキャリアパスの明確な理解を促進した。なお、平成 28 年度以降、本プログラム運営委員会の下に新たに就職委員会を設置し、学生の就職活動支援を行った。博士課程の場合は、学生の年齢や、それまでの就業経験などで最適な就職活動の進め方は異なるので、学生の就職希望を聞いた後、それぞれに応じて就職支援を実施した。特に就職委員会では、学生の希望に応じて、企業と学生とのマッチングの機会を増やすことを強く進めてきた。その結果、令和元年度までに 5 年一貫性のコースを修了した 26 名のうち、アカデミア以外に就職した割合（起業含む）は 73%（19 名）であった。なお令和元年度より、修士学位取得後に就職する学生が出始めたが、その全員（5 名）がアカデミア以外に就職した。博士学位授与者の進路については補遺（II.3. 博士（人間情報学）学位授与者）に記載。

(1) 企業と技術者

平成 27 年度より、技術者として企業で活躍してきた専任教員を世話人として、必修の基礎科目「企業と技術者」を開講した。この授業は、必須事業であり、講義とケーススタディを通して、企業における研究成果を事業化に結びつけるプロセスやマネジメント、アントレプレナーシップに関する座学をするだけでなく、企業訪問して現場の企業技術者との意見交換を行って企業技術者の理解を深めるとともに自分自身の今後のキャリアを考える機会を提供した。また、平成 30 年度には、本プログラムを修了し、企業に就職した村田耕一氏と、若生遼氏に来学いただき、在学生との懇談会を実施した。企業と技術者の代表的な実施例として令和元年度の実施概要を示す。



企業技術者との意見交換
(日本電気(株)中央研究所)



修了生の講演



修了生と在学生との意見交換

令和元年度 企業と技術者 実施概要

実施日	内容	外部講師等	
令和元年10月11日	【講義】 博士のキャリアについて	濱川 佳弘	世話人・本プログラム専任教員 元(株)日立製作所 研究開発グループ 技術総括センタオープンイノベーション推進部長
令和元年10月25日	【講義】 日産自動車(株)	高江 康彦	日産自動車(株) 電子技術開発本部 IT&ITS 開発部チームリーダー
令和元年11月1日 令和元年11月15日	【講義】 プロジェクトマネジメント	板越 昌彦	(株)ビジネスコーチ株式会社 クラウド担当顧問兼エグゼクティブコーチ
令和元年11月8日	【講義】 アントレプレナーシップ入門	高瀬 進	京都大学工学研究科 メカトロニクス研究室 研究員
令和元年11月22日	【企業訪問】 (株)資生堂 資生堂企業資料館	高野 ルリ子	(株)資生堂 ビューティークリエーション部 マネージャー
令和元年11月26日	【企業訪問】 (株)日立製作所 中央研究所	影広 達彦	(株)日立製作所 研究開発グループ テクノロ ジーイノベーション統括本部 システムイノベ ーションセンタメディア研究部長
令和元年12月6日	【企業訪問】 日本電気(株) 中央研究所	塚田 正人	日本電気(株) 情報・メディアプロセッシング研究所 主幹研究 員
令和元年12月13日	【企業訪問】 WHILL(株) 横浜市産学共同研 究センタ	平田 泰大	WHILL(株) ハードウェア開発本部 車両開発部 部長
令和元年12月19日	【講義】 イノベーションと 戦略形成プロセス	石橋 善一郎	(一社)日本CFO協会 主任研究委員

(2) リサーチデザイン演習

3・4年次に履修する演習・実習科目「リサーチデザイン演習」では、自身の研究テーマに関連する、分野の異なる研究者や実務家を聴衆として想定した研究プロジェクトの立案・設計を行った。アカデミック・ペーパーとは異なる、資金調達に向けた申請書の書き方及びプレゼンテーションを学習した。

まず、学生は研究計画書作成のガイダンスを受講し、科研費のフォーマットに合わせた内部の審査付き研究費獲得申請書の作成を行った。申請書は分野の異なる教員による査読を通じて研究計画のブラッシュアップが行われた。次に企業出身で国際産学連携本部の内田忠彦先生よりエレベーターピッチスタイルの研究提案方法を学んだ。エレベーターピッチスタイルのプレゼンテーションはビジネス場面における短時間での研究提案を想定した発表方法である。最後に授業内で作成した研究計画に基づき、企業の一線で活躍している実務家の前でエレベーターピッチスタイルのプレゼンテーション審査会を行った。セッション後はより深い議論のためにポスターセッションを設けた。学生は、表現方法の評価と共に、企業人や起業経験者などの有識者からアドバイスを得た。代表事例として、令和元年に実施したリサーチデザイン演習の実施概要を示す。



リサーチデザイン演習 最終発表会の様子

令和元年度 リサーチデザイン演習 実施概要

実施日	内容	担当教員、外部講師など	
令和元年4月9日	全体ガイダンス	松田 壮一郎	筑波大学人間系 助教
令和元年5月24日	計画書提出	松田 壮一郎	筑波大学人間系 助教
令和元年6月11日	特別講義（プレゼンテーション）	内田 史彦	筑波大学国際産学連携本部 審議役 教授
令和元年6月16日	計画書査読結果提出（教員）	濱川 佳弘 井澤 淳 圓崎 祐貴 廣川 暢一 松田 壮一郎	筑波大学グローバル教育院エンパワーメント情報学プログラム 学内授業担当教員
令和元年7月4日	修正計画書提出	松田 壮一郎	筑波大学人間系 助教
令和元年7月19日	最終発表会	濱川 佳弘 圓崎 祐貴 松田 壮一郎	筑波大学グローバル教育院エンパワーメント情報学プログラム 学内授業担当教員
		影広 達彦	(株) 日立製作所 東京社会イノベーション協創センター・リーダ主任 研究員
		坂本 堪亮	(株) ネクステッジテクノロジー 代表取締役

実施日	内容	担当教員、外部講師など	
令和元年7月19日	最終発表会	塚田 正人	日本電気(株) 情報・メディアプロセッシング研究所・主幹研究員
		高野 ルリ子	株式会社資生堂 社会価値創造本部アート&ヘリテージ室・マネージャー
令和元年7月19日	特別講義(プレゼンテーション)	鈴木 健嗣	筑波大学システム情報系 教授

(3) エンジニアリングレジデンス実習

「エンジニアリングレジデンス実習」は、4年次生必修の演習・実習科目である。学生が自ら国内外の企業に共同研究を企画・提案し、受入企業で実務研究経験を積む自己開拓型インターンシップを行った。プログラム期間を通して、36人の学生が国内外の多様な企業、公的機関(29機関)においてエンジニアリングレジデンスを実施した。

令和元年度 エンジニアリングレジデンス実習によるインターン受入一覧

分類		エンジニアリングレジデンスの受け入れ先 【件数：複数件数】	
国内	大企業	日本電気(株)	
		(株)日立製作所【3】	
		(株)富士通研究所【2】	
		(株)資生堂	
		本田技研(株)	
		パナソニック(株)	
		日本IBM(株)	
		NTTコミュニケーション科学基礎研究所	
		(株)ヤマハ	
		(株)竹中工務店	
		PHC(株)	
		(株)ソニー・インタラクティブエンタテインメント【2】	
		中小企業 ベンチャー企業	Cyberdyne Inc.【3】
			(株)国際電気通信基盤技術研究所
	(株)チームラボ【2】		
	(株)ネオス		
	(株)明和電機		
	(株)WHILL		
	(株)チノウ		
	(株)アルム		
	公的機関 (含む病院)	(国研)産業技術総合研究所【2】	
		山口情報芸術センター	
		筑波大学附属病院	
		市村歯科病院	

分類		エンジニアリングレジデンスの受け入れ先 【件数：複数件数】
海外	大企業	Microsoft Research Asia (中国)
	中小企業 ベンチャー等	Shenzhen Tecron Safety CO., Ltd. (中国)
		OMECHA (オーストラリア)
		JAVIS CO., LTD (ベトナム)
公的機関	Ars Electronica Linz GmbH (オーストリア)	

また、毎年2月中旬に、実習先の企業のメンターを招いて、エンパワースタジオ「ノマド型」実験室にて成果報告会を行い、実習で学んだこと、試行錯誤のプロセス、成果物などを報告した。本授業の評価は、企業からの滞在中の所見、成果報告会の報告内容により行った。企業からの学生の評価は概ね高く、学生にとっては現場力を磨く絶好の機会であった。



成果報告会の様子

(4) コラボラトリー実習

「コラボラトリー実習」は、5年次生必修の演習科目であり、ビジネスモデル設計の基本的な考え方を学び、研究開発の成果を使った製品・サービスの起業・新事業創成を想定したビジネスモデルを作成し発表する実習である。これによって、研究成果を社会に還元するうえで必要なビジネスマインド並びにアントレプレナーシップを涵養することを目的とした。授業はハバタク(株)に委託して、ワークショップ形式で行った。例年は、分野横断チームに分かれて、エンパワーメント情報学の知見を活用した技術を用いた製品・サービスの起業/新事業創成を想定したビジネスモデルを作成し、最後に、ビジネス系の教授、起業支援家などの講評者を迎え、ミニビジネスモデルコンテストを実施した。ビジネスモデルコンテスト終了後は、起業に関する問題の理解を深めるために、学生は、講評者との意見交換の機会を設けた。ビジネスモデルを作成するにあたっては、ビジネスモデルキャンバス、ペルソナ、共感マップによる顧客に対する理解の深堀、想定顧客へのインタビューによる仮説検証のプロセス、ビジネスピッチの効果的なやり方、プロトタイプの効果的な作成の仕方を体験した。これらによって、学生は、ビジネスモデルの作成を経験し、顧客起点のビジネスマインドセットを醸成することができた。

なお、令和元年は、特にフィールドワークを重視した。すなわち、6チームに分かれて、聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院のリハビリテーション部と Children Center Inc. を訪問し、それぞれの現場での課題(顧客のペイン)を探るフィールドワークを実施した。その後、議論によって顧客にとってペインになること、それに対する解決策の提案、プロトタイプ作成後、さらに顧客(それぞれの現場の担当者)のヒアリングを行ってピボットする作業を2回繰り返して、ビジネスモデルにまとめた。

フィールドワークでは、聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院 リハビリテーション部作業療法士 佐々木祥太郎氏、(株)チルドレンセンター代表取締役 松田幸都枝氏、(株)LITALICO チーフリサーチャー 榎本大貴氏にご協力いただいた。



作成したビジネスモデルを授業で発表する様子



講師からフィードバックを受ける学生



ビジネスモデルコンテストの様子

ビジネスモデルコンテストの講評者

氏名	所属／役職	参加期間（年度）
加藤 晴洋	(一財) TX アントレプレナーパートナーズ エンジェル会員	平成 29 年
Donald SOO		平成 30 年～令和元年
鈴木 規文	(株) ゼロワンブースター CEO	平成 27 年～平成 30 年
大野 忠士	筑波大学ビジネスサイエンス系教授	平成 27 年～平成 30 年
金井 絵里花	(株) empheal シニアマネジャー	令和元年
顧 俊堅	筑波大学ビジネスサイエンス系助教	令和元年
尾内 敏彦	筑波大学国際産学連携本部教授	令和元年

(5) その他の取組

EMP では、学生が企業と接触する機会を積極的にとらえて、企業を知ること及びネットワークを築くことを目的に、授業以外に講演会、意見交換会、海外企業訪問などのイベントを開催し、多くの学生が参加した。なお、これらのイベントは、基本的に EMP の学生が主体的となって企画、実施した。ここでは主なものを記載する。

企業人と学生との意見交換会

世界で活躍する企業人を招き、講演を拝聴するとともに意見交換を実施した。

(1) 平成 27 年 12 月 21 日、本学学生会館にて、本プログラムは国際産学連携本部と共催し、川村 隆氏（当時（株）日立製作所 相談役）の講演会及び、学生との意見交換会を開催した。「世界で戦える人材育成」と題して、グローバル化に向けた企業のあるべき姿やビジネスリーダー像について、川村氏の講演があり、約 100 名が聴講した。

その後、川村氏と本プログラム履修生 12 名との意見交換会を実施した。ビジネスリーダーとしての在り方や、企業が求める博士像、企業内での研究と開発の関係性、現在の社会問題についての意見など様々な質疑応答が英語で行われ、学生にとってビジネスリーダー像の理解を深める機会となった。

(2) また、平成 28 年 12 月 14 日、エンパワースタジオにおいて、EMP 履修生の企画により、岩佐琢磨氏（当時（株）Cerevo CEO）を招いて講演会を開催し、約 20 名が聴講した。岩佐氏は自らの経験を踏まえ、大企業をやめてから、ハードウェア・スタートアップを起業した後、現在までの道のりについて講演した。特に、（株）Cerevo が、高速な開発サイクルで多品種小ロット生産のハードを世界 55 カ国で売るまでに至った考え方や苦勞を中心に話題を提供していただき、意見交換を実施した。



日立 相談役（当時）川村氏との懇談会



（株）Cerevo CEO（当時）岩佐氏の講演風景

海外企業訪問（IBM）

平成 28 年 2 月 5 日から 2 月 10 日まで、ニューヨークにある IBM Thomas J. Watson Research Center に、EMP 教員 2 名と学生 7 名で訪問した。10 月に実施された EMP Colloquium Series における Reah Miyara 氏が、ワトソン研究所と EMP との懸け橋となり今回の研修が実現した。参加した学生 7 名は、ワトソン研究所の Vice President である Radha 氏の前で、自身の研究発表を行い、今後のインターンや就職についての話し合い、意見交換の場が設けられた。Radha 氏から本プログラムの学生に対して高い評価を得ることができ、海外企業との連携が強化され、海外での就職の可能性などキャリアの多様化を図った。



IBM ワトソン研究所における EMP の研究発表



IBM ワトソン研究所を訪問したメンバー

第 15 回情報科学技術フォーラム パネルセッション

平成 28 年 9 月 8 日 富山大学において開催された、情報処理学会、電気通信学会主催の第 15 回情報科学技術フォーラムにおいて実施された、パネルセッション「未来の ICT リーダ、学生対企業対談～決意・意欲と期待・激励～」に EMP 学生 5 名が参加。このセッションは、博士課程教育リーディングプログラム複合領域型（情報）を履修する博士課程の学生が集い、プログラムで得た資質、能力、未来への意欲や決意を発表し、学生対企業人との討論を行った。また、同時に、ポスターセッションを開き、EMP の紹介や、学生の研究テーマや EMP での活動を富士通、NTT ドコモ、日立などの企業人の方にアピールし、意見交換を行った。学生と企業人が接点をもつ貴重な機会となった。



パネルディスカッションの風景



ポスターセッション

4. 学生への外部からの評価

(1) 外部からの評価

EMP では、エンパワーメント挑戦的研究活動経費を創設し、学生の自主的活動を促進した。その結果、7年間で69件（国内外のコンテスト：40件、学術賞：29件）の受賞を獲得した。代表的な受賞実績を記載する。なお、学生の学年は受賞当時の年次である。7年間の受賞実績については、補遺（Ⅱ.2. (1) 国内外のコンテスト、Ⅱ.2. (2) 学術賞）に掲載する。

「CHILDHOOD」の受賞

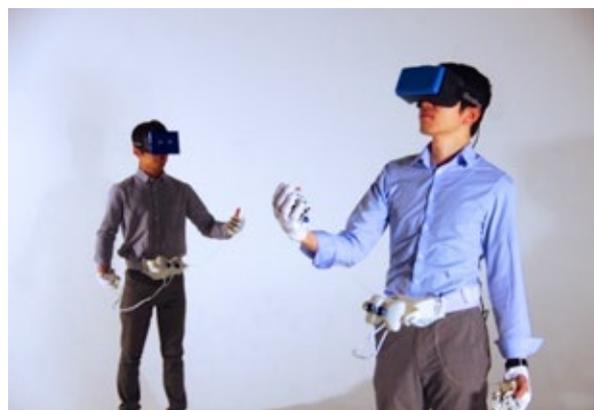
平成26年度に本プログラムに入学した西田惇、高鳥光、佐藤綱祐によるチーム（チーム名称：シャンプニオン）が、平成26年度プロジェクト研究により、子供の身体性を再現するフード型身体性変換デバイス「CHILDHOOD」を開発した。本研究は、多くの受賞実績を有しており、外部から高い評価を受けている代表例の一つである。

「CHILDHOOD」受賞等実績（平成27年度分）

時期	会議名等	賞の名称等
平成26年10月25日	IVRC2014	・総合優秀賞 ・国際VR展示会派遣賞 ・クリスティ・デジタル・システムズ賞
平成27年4月8日	Laval Virtual 2015	Leaning, Sciences & Humanities 賞
平成27年4月11日	Microsoft Imagine Cup 2015	ワールドシチズンシップ部門賞
平成27年8月3日	第9回 KIDS DESIGN AWARD	キッズデザイン賞、TEPIA 特別賞
平成27年10月6日	次世代センサ協議会	招待講演
平成27年10月15日～17日	Speculum Artium 2015	招待展示
平成27年11月13日～15日	セーフティグッズフェア2015 withサイエンスアゴラ	招待展示、ワークショップ
平成28年2月26日	SENSORS IGNITION 2016	招待展示



IVRC2014 の表彰式



発表したデバイス「CHILDHOOD」

「CarryOtto」の受賞

平成 27 年 7 月 25 日～ 26 日にかけて行われた、超人スポーツハッカソンにて、2 年次生の佐藤綱祐が、早稲田大学、慶応義塾大学、東京大学の博士課程および修士課程のメンバーとチームを組み、優秀賞を受賞した。

受賞した作品 CarryOtto は、古代ローマの戦車競走”Chariot Racing”をモチーフにした人機一体の超人スポーツで、バイク用のモータを手綱で操るデバイスのプロトタイプを製作した。

受賞作品は、平成 27 年 10 月 22 日～ 25 日にかけて日本科学未来館で開催された Digital Content EXPO 2015 へ出展された。

また、平成 28 年 3 月 5 日、東京工業大学博士課程教育リーディングプログラムの主催により実施された第 1 回ビジネス構想コンペティションー学生と企業人との協創ーにおいて、佐藤綱祐が「小型インホイールモータを用いた新スポーツの開発と一般社会への普及 ～超人スポーツ CarryOtto～」と題してプレゼンテーションを行い、独創性や事業化の可能性などが評価され、優秀賞を受賞した。



受賞作品 (CarryOtto)

「Bionic Scope」の受賞

平成 28 年 4 月 23 日 (土) に日本マイクロソフト本社で開催された Microsoft Imagine Cup 2016 日本大会に、EMP 5 年次 村田 耕一、江國 翔太、EMP 2 年次 朝倉 靖成、システム情報工学研究科博士前期課程 2 年次 上原 皓が、視覚拡張ウェアラブルデバイス”Bionic Scope”を出展し、イノベーション部門賞を受賞した。

Imagine Cup とはマイクロソフトの創設者、ビル・ゲイツの発案で 2003 年に始まった世界最大の学生向け IT コンテストである。応募作品の中から書類選考を通過した 9 作品 (各部門に 3 作品ずつ) が選出され、その後プレゼンテーションおよびデモンストレーションで審査され、各部門のトップの部門賞が決まる。Bionic Scope はイノベーション部門のトップに輝いた。さらに、平成 28 年 7 月 26 日～ 29 日に米国のシアトルで開催された 2016 Imagine Cup World に日本代表として参加した。



受賞式



Bionic Scope の発表

総務省「異能 vation」プログラム「破壊的な挑戦部門」採択

4年次 西田 惇が平成29年10月27日に総務省が実施する戦略的情報通信研究開発推進事業(SCOPE)の平成29年度 独創的な人向け特別枠「異能 vation」プログラム「破壊的な挑戦部門」に採択された。本事業は、ICT分野において破壊的な地球規模の価値創造を生み出すために、大いなる可能性がある奇想天外で野心的なICT技術開発課題に挑戦する人を支援する事業で、今年で4回目になる。本年度は昨年度の約7倍となる7949件の応募の中から、有識者による一次書類審査および最終選考会での面接審査を経て、本申請を含む13件が採択された。



坂井学 総務副大臣 兼 内閣府副大臣との集合写真（写真提供：株式会社角川アスキー総合研究所）

「Discovery Award」を受賞

佐々木海(4年次生)が、平成30年4月11日にMobility Unlimited Challengeにて、Discovery Awardを受賞した。Mobility Unlimited Challengeは、一般財団法人トヨタ・モビリティ基金とNPOの英国国立科学技術芸術基金が共同で実施しているもので、下肢麻痺者が日常生活で直面する困難を解決する理想的な補装具のアイデアを世界中から募集し、その実現を試みる、平成29年11月から開始した3年間の国際的な活動である。佐々木海が所属する本学人工知能研究室では、使用者単独での階段昇降を実現する移動機器、起立着座や排泄行為、ハンズフリーでの立位移動を可能とする移動機器の研究開発を進めてきている。これらの取り組みが認められ、日本で唯一Discovery Awardに選出された。さらに、これらの製品化を目指す最終候補として5チームの中に選ばれた。チームには、施策の開発費用として50万ドルが授与された。2020年(令和2年)の夏に、東京にて5チームの中から優勝チームが決定される。チームは優勝に向けて、さらに研究開発を進めている。



Top5 finalists として Induction camp に参加

(2) 筑波大学での評価

本学では、学修や課外活動の成果が顕著な学生に対し、学長や各教育組織の長から表彰を行っている。学生の多様な能力、適性を適切に評価し、学生の修学・研究心・探究心への意識昂揚を図り、各界における有能な人材と社会貢献に適う人材の育成を促進するため、平成27年度、本プログラムにおける学生表彰推薦基準を作成した。それ以来、これに基づいて、毎年本プログラムの履修生を推薦し、学生表彰(学長表彰)5名及び1チーム、グローバル教育委員長賞4名、茗溪会賞4名が表彰を受けている。補遺(II.2.(4)学生表彰(学長表彰)等受賞者)に詳細を掲載する。

5. 修了者の社会での活躍状況を把握する手法の構築

エンパワーメント情報学プログラムでは、平成 29 年 2 月に同窓会組織を設立した。この同窓会組織は、本プログラムの現役履修生、修了生の他、プログラム担当教員及びその他の関係者により構成されており、現役学生と卒業生を同じ同窓会組織のメンバーとして扱うことで、お互いの交流を促進しやすい環境を醸成してきた。修了生の状況把握のため、同窓会規約を作成し、修了式後に定期的に総会を開催することで、同窓会の周知に努めている。また、定期的に修了生のメールアドレスのメンテナンスを実施している。修了生はまだ数が少ないため、卒業生の



同窓会総会の様子

実績が社会的に認知されるには時間がかかる状態であるが、今後は社会で活躍する修了生を招いてのセミナーやワークショップ開催、就職に関する活動を同窓会から支援することを考えている。

Ⅲ. グローバルに活躍するリーダーを養成する指導体制の整備

1. 指導体制の構築

(1) 研究指導体制

研究指導（論文指導）に留まらず、自らのキャリアプランに応じた指導体制を学生自身が編成するという当初の計画どおり、平成26年4月に第1期生を受け入れて以来、主指導教員の他、副指導教員を2名、さらに異分野複合研究指導チームメンバーとなるアドバイザー教員2名（産業界の担当者を含む）を選択できる体制を整備し、学修活動全体について一貫性のある指導を行った。



平成27年度には、「エンパワメント情報学プログラムにおける学生の研究指導に関する申合せ」を改正して、アドバイザー候補者は、指導教員とは異なる専門分野から選出することを明記した。毎年、2～5年次生に3段階の達成度審査（ASA1、ASA2、FASA）及び博士論文研究基礎力審査（QE）を行い、そこでは異分野複合研究指導チーム構成員が一同に会し、学生の学修状況を共有した。平成28年度から博士号授与が本プログラムで行われ始めたことに伴い、「人間情報学」学位に対する多様な考え方とその集約が、学生の指導の場を通して行われるようになってきた。また、サイエンスカフェという、学位の位置づけや研究テーマそのものを教員と学生が共に見つめ直すフリーディスカッションの機会も平成30年度以降開催した。このことは、異分野を見通して学究を行うべきという価値観を学生に醸成するのに役立った。指導教員等の選出について、令和元年度の事例を記載する。



サイエンスカフェの様子

令和元年度 EMP 指導教員等一覧

※〇〇系はすべて筑波大学所属

1 年次担任：亀田 能成

	学生氏名	入学(編入)年度	指導教員	副指導教員	副指導教員	アドバイザー	アドバイザー
1	秋元 優希	平成 31 年度 入学	システム情報系 鈴木 健嗣	システム情報系 河本 浩明	システム情報系 井澤 淳	医学医療系 羽田 康司	システム情報系 望山 洋
2	市川 倅介	平成 31 年度 入学	システム情報系 鈴木 健嗣	計算科学研究セ ンター 北原 格	システム情報系 山口 友之	人間系 松田 壮一郎	システム情報系 廣川 暢一
3	榎原 輝	平成 31 年度 入学	システム情報系 鈴木 健嗣	システム情報系 山口 友之	システム情報系 井澤 淳	人間系 綾部 早穂	計算科学研究セ ンター 北原 格
4	澤田 翔太	平成 31 年度 入学	システム情報系 鈴木 健嗣	計算科学研究セ ンター 北原 格	システム情報系 山口 友之	人間系 松田 壮一郎	システム情報系 廣川 暢一
5	高山 周太郎	平成 31 年度 入学	計算科学研究セ ンター 亀田 能成	システム情報系 大澤 博隆	システム情報系 宇津呂 武仁	人間系 原田 悦子	システム情報系 橋本 悠希
6	KENNARD Maxwell West	平成 31 年度 入学	システム情報系 鈴木 健嗣	システム情報系 河本 浩明	システム情報系 井澤 淳	医学医療系 羽田 康司	システム情報系 望山 洋
7	WU Yihao	平成 31 年度 入学	システム情報系 井澤 淳	システム情報系 森田 昌彦	システム情報系 澁谷 長史	システム情報系 川崎 真弘	人間系 松田 壮一郎
8	ZHANG Haihan	平成 31 年度 入学	計算科学研究セ ンター 北原 格	計算科学研究セ ンター 亀田 能成	システム情報系 鈴木 健嗣	システム情報系 矢野 博明	システム情報系 伊藤 誠

2 年次担任：三谷 純

	学生氏名	入学(編入)年度	指導教員	副指導教員	副指導教員	アドバイザー	アドバイザー
1	今堀 仁誠	平成 30 年度 入学	システム情報系 山海 嘉之	システム情報系 河本 浩明	東京大学大学院 葛岡 英明	ビジネスサイエ ンス系 弥永 真生	医学医療系 鶴嶋 英夫
2	桑原 隆志	平成 30 年度 入学	システム情報系 山海 嘉之	システム情報系 河本 浩明	システム情報系 望山 洋	ビジネスサイエ ンス系 弥永 真生	芸術系 五十嵐 浩也
3	小岩 慎太郎	平成 30 年度 入学	システム情報系 岩田 洋夫	システム情報系 矢野 博明	システム情報系 圓崎 祐貴	芸術系 村上 史明	システム情報系 橋本 悠希
4	酒井 友裕	平成 30 年度 入学	東京大学大学院 葛岡 英明	システム情報系 鈴木 健嗣	システム情報系 井澤 淳	計算科学研究セ ンター 北原 格	人間系 原田 悦子
5	進藤 裕太	平成 30 年度 入学	システム情報系 鈴木 健嗣	システム情報系 河本 浩明	システム情報系 井澤 淳	医学医療系 羽田 康司	芸術系 村上 史明
6	西村 勇輝	平成 30 年度 入学	システム情報系 鈴木 健嗣	システム情報系 山口 友之	計算科学研究セ ンター 北原 格	システム情報系 庄司 学	芸術系 山中 敏正
7	平岩 匡	平成 30 年度 入学	システム情報系 岩田 洋夫	システム情報系 矢野 博明	システム情報系 圓崎 祐貴	芸術系 村上 史明	システム情報系 橋本 悠希
8	本間 由樹子	平成 30 年度 入学	システム情報系 鈴木 健嗣	東京大学大学院 葛岡 英明	システム情報系 井澤 淳	人間系 原田 悦子	資生堂 高野 ルリ子
9	CHEN Yang	平成 30 年度 入学	システム情報系 鈴木 健嗣	システム情報系 河本 浩明	システム情報系 井澤 淳	医学医療系 羽田 康司	芸術系 村上 史明
10	REBELO DAL'BELLO Lucas	平成 30 年度 入学	システム情報系 井澤 淳	システム情報系 森田 昌彦	システム情報系 廣川 暢一	医学医療系 羽田 康司	システム情報系 望山 洋

3年次担任：庄司 学

	学生氏名	入学(編入)年度	指導教員	副指導教員	副指導教員	アドバイザー	アドバイザー
1	杉本 実夏	平成 29 年度 入学	システム情報系 岩田 洋夫	芸術系 五十嵐 浩也	システム情報系 矢野 博明	芸術系 山中 敏正	システム情報系 橋本 悠希
2	杉山 太成	平成 29 年度 入学	システム情報系 井澤 淳	Univ. of Southern California Nicolas Schweighofer	システム情報系 鈴木 健嗣	医学医療系 松本 正幸	医学医療系 羽田 康司
3	坂村 祐希	平成 31 年度 3年次編入学	計算科学研究セ ンター 北原 格	計算科学研究セ ンター 亀田 能成	システム情報系 矢野 博明	人間系 原田 悦子	システム情報系 伊藤 誠
4	YANG Chi-Lan	平成 31 年度 3年次編入学	東京大学大学院 葛岡 英明	人間系 原田 悦子	システム情報系 鈴木 健嗣	システム情報系 矢野 博明	人間系 松田 壮一郎

4年次担任：伊藤 誠

	学生氏名	入学(編入)年度	指導教員	副指導教員	副指導教員	アドバイザー	アドバイザー
1	高嶋 倫太郎	平成 28 年度 入学	システム情報系 山海 嘉之	システム情報系 望山 洋	システム情報系 河本 浩明	医学医療系 鶴嶋 英夫	ビジネスサイエ ンス系 弥永 真生
2	石切山 順一	平成 30 年度 3年次編入学	システム情報系 鈴木 健嗣	東京大学大学院 葛岡 英明	計算科学研究セ ンター 北原 格	医学医療系 羽田 康司	資生堂 高野 ルリ子
3	ROJAS FERRER Cesar Daniel	平成 30 年度 3年次編入学	計算科学研究セ ンター 亀田 能成	計算科学研究セ ンター 北原 格	東京大学大学院 葛岡 英明	システム情報系 矢野 博明	人間系 松田 壮一郎
4	KIM SunKyoung	平成 30 年度 3年次編入学	システム情報系 鈴木 健嗣	東京大学大学院 葛岡 英明	システム情報系 廣川 暢一	人間系 原田 悦子	人間系 松田 壮一郎
5	REYES Vera Paola Edosur	平成 30 年度 3年次編入学	芸術系 山中 敏正	システム情報系 田中 文英	ビジネスサイエ ンス系 西尾 チヅル	システム情報系 井澤 淳	システム情報系 星野 准一
6	ZHONG Ying	平成 30 年度 3年次編入学	図書館情報メ ディア系 森嶋 厚行	計算科学研究セ ンター 北川 博之	計算科学研究セ ンター 北原 格	図書館情報メ ディア系 辻 泰明	筑波技術大学 平賀 瑠美

5年次担任：井澤 淳

	学生氏名	入学(編入)年度	指導教員	副指導教員	副指導教員	アドバイザー	アドバイザー
1	糸井川 椋	平成 27 年度 入学	システム情報系 水谷 孝一	システム情報系 前田 祐佳	システム情報系 若槻 尚斗	人間系 綾部 早穂	芸術系 山中 敏正
2	大岡 岳	平成 27 年度 入学	システム情報系 岩田 洋夫	芸術系 村上 史明	芸術系 田中 佐代子	システム情報系 橋本 悠希	システム情報系 矢野 博明
3	佐藤 晃矢	平成 27 年度 入学	システム情報系 加藤 和彦	システム情報系 阿部 洋丈	計算科学研究セ ンター 北川 博之	システム情報系 善甫 啓一	芸術系 山中 敏正
4	佐野 祐士	平成 27 年度 入学	システム情報系 水谷 孝一	システム情報系 若槻 尚斗	システム情報系 善甫 啓一	人間系 綾部 早穂	芸術系 山中 敏正
5	敷根 伸光	平成 27 年度 入学	芸術系 山中 敏正	システム情報系 田中 文英	システム情報系 星野 准一	システム情報系 望山 洋	芸術系 田中 佐代子
6	ISHAC Karlos	平成 27 年度 入学	システム情報系 鈴木 健嗣	システム情報系 山海 嘉之	システム情報系 井澤 淳	医学医療系 羽田 康司	システム情報系 矢野 博明
7	佐々木 海	平成 28 年度 2年次転籍	システム情報系 鈴木 健嗣	システム情報系 山海 嘉之	システム情報系 井澤 淳	医学医療系 羽田 康司	芸術系 山中 敏正

	学生氏名	入学(編入)年度	指導教員	副指導教員	副指導教員	アドバイザー	アドバイザー
8	小崎 湧太	平成 29 年度 3 年次編入	システム情報系 鈴木 健嗣	システム情報系 山海 嘉之	システム情報系 井澤 淳	医学医療系 羽田 康司	芸術系 山中 敏正
9	XIE Chun	平成 29 年度 3 年次編入	計算科学研究セ ンター 北原 格	システム情報系 鈴木 健嗣	計算科学研究セ ンター 亀田 能成	芸術系 村上 史明	日立製作所 影広 達彦
10	TAN Chun Kwang	平成 29 年度 3 年次編入	システム情報系 鈴木 健嗣	システム情報系 山海 嘉之	システム情報系 井澤 淳	医学医療系 羽田 康司	医学医療系 鶴嶋 英夫
11	DOLLACK Felix	平成 29 年度 3 年次編入	システム情報系 鈴木 健嗣	システム情報系 河本 浩明	システム情報系 井澤 淳	人間系 綾部 早穂	芸術系 田中 佐代子
12	丹野 智博	平成 27 年度 3 年次編入	システム情報系 森田 昌彦	システム情報系 田中 文英	システム情報系 井澤 淳	人間系 綾部 早穂	医学医療系 羽田 康司

(2) 生活支援体制

当初計画においては、サポート教員制度を定め、研究指導チームと学生の学修状況を第三者としてモニタリングするとともに、学生の日常生活全体のサポートを行うこととしていたが、平成 26 年度より、各学年のコーディネータ教員がその役割を担い、学生の生活及び修学に関する相談、指導を行い、学生との定期的な面談や、博士論文研究基礎力審査（QE）及び達成度審査に対する指導等、きめ細かい支援を行った。また、エンパワー寮における日常生活については、寮担当教員を相談の窓口とした。

また、各学年のコーディネータ教員と寮担当教員が委員となって、学生委員会を構成し、相互の緊密な連携のもとに学生のサポートを行った。以下には、代表事例として、令和元年度の学生委員会委員を示す。

令和元年度 学生委員会委員

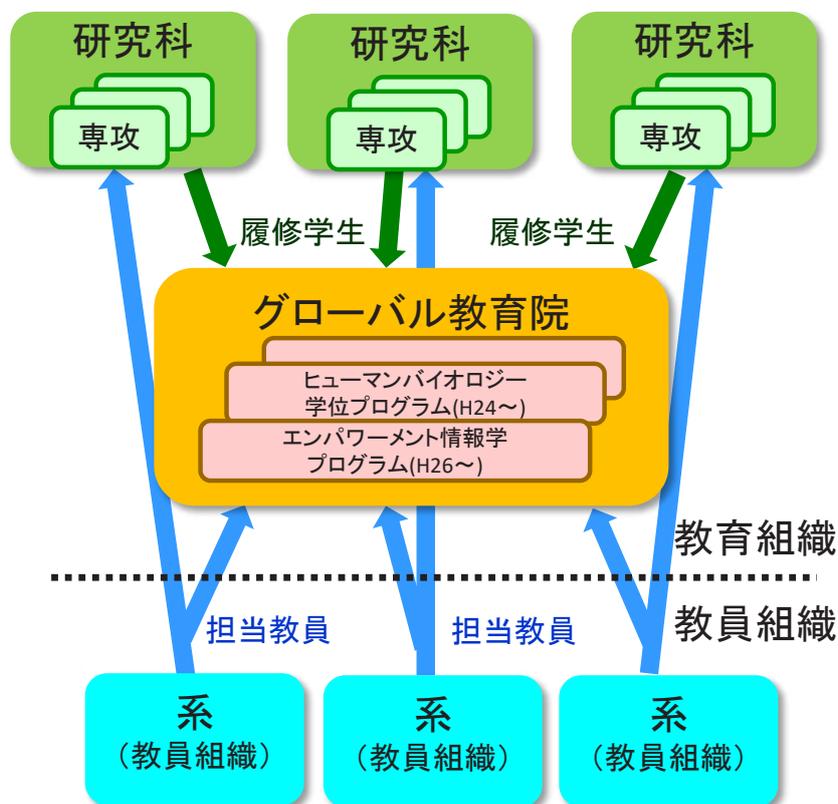
役職	氏名	所属・職名
委員長 1 年次コーディネータ	亀田 能成	計算科学研究センター・教授
2 年次コーディネータ	三谷 純	システム情報系（コンピュータサイエンス専攻）・教授
3 年次コーディネータ	庄司 学	システム情報系（構造エネルギー工学専攻）・教授
4 年次コーディネータ	伊藤 誠	システム情報系（リスク工学専攻）・教授
5 年次コーディネータ	井澤 淳	システム情報系（知能機能システム専攻）・准教授
エンパワー寮担当	廣川 暢一	システム情報系（知能機能システム専攻）・助教
学生支援	圓崎 祐貴	システム情報系（エンパワーメント情報学プログラム）・助教
学生支援	松田 壮一郎	人間系（エンパワーメント情報学プログラム）・助教

2. 改革意識の共有

本学は、新構想大学としてスタートし、国内外の大学や研究機関・産業界・地域に「開かれた大学」としての実績を積んできた。その実績を踏まえて、未来を切り拓く人材を育成する未来構想大学へと質的転換をはかり、組織改革を実施してきた。世界に先駆けて未来を切り拓く能力を養成するための教育の質保証の仕組みとして、平成22年度に学長、教育担当副学長をそれぞれ機構長、副機構長とする「教育イニシアティブ機構」、及び平成23年度に教育担当副学長を教育院長とする「筑波大学グローバル教育院」を設置して、研究科の枠を超えた分野横断的な複合領域学位プログラムの運営体制を構築した。

また、このような取組みを有効に機能させるために、平成23年10月からは、これまで研究科に配置されていた人事枠を新たな教員組織「系」（教員の個人、グループ研究を支援するとともに評価する組織）に配置し直し、教員は教員組織に所属して、必要とされる教育組織及び学位プログラムを担当することができる“新たな教育研究システム”へと組織改革を行った。

本学では、人材育成目的に合致した担当教員の集合体によって教育課程を進めることができる「学位プログラム」への全学的な移行を順次行っている。本プログラムは、平成30年度末現在、3名の副学長（総務・人事担当、国際担当、企画評価・学術情報担当）と、システム情報工学研究科長、人間総合科学研究科副研究科長等をプログラム担当教員としており、全学的な支援と、既存の教育組織等からの協力が得られやすい体制になっている。本プログラムは、同じく博士課程教育リーディングプログラムに採択されているヒューマンバイオロジー学位プログラムと共に、教育改革の先陣を切る役割を担った。



グローバル教育院と新たな教育研究システム

3. グローバルな環境整備

本プログラムが受け入れた外国人留学生は、平成26年度入学の第1期生では1名であったが、平成27年度入学の第2期生では5名、平成28年度入学の3期生では3名、平成29年度入学の4期生では3名、平成30年度入学の5期生では6名、令和元年度入学の6期生では3名が入学した。就学生の出身地は4大陸15か国に上りエンパワー寮において国際的な交流を日常的におこなっている。



留学生出身地と海外拠点

日本人学生の英語能力のさらなる向上を図る取組をカリキュラム内外で行うとともに、日本語でのコミュニケーションに不安がある留学生を支援する体制を整えた。本プログラムでは、日本人学生と外国人留学生との交流が密に行われており、お互いの切磋琢磨によりグローバルなリーダーを育成する環境を整えた。

(1) 英語教育の充実

英語によるプレゼンテーションスキルを向上させるため、必修の基礎科目として外国人教員による授業科目（「エンパワーメント情報学英語演習」及び「エンパワーメント情報学英語特別演習」）を開設し、英語のテクニカルライティング、プレゼンテーション、ネゴシエーションのスキルを身に付けることのできる指導を行った。また、演習は全て英語で実施しており、例えば「アドバンスチュートリアル演習」におけるディベートは全員英語で実施し、問題発見・解決法の提案・議論・説得等すべて英語で実施することで、現場で使える実践的な英語運用能力を身に付けているようにした。「エンパワーメント情報学英語特別演習」においては、国際会議プロシーディングスの査読結果と応答に関するレポートの提出を課し、国際的な表現力を涵養した。

(2) 外国人留学生支援体制の拡充

日本人学生と同じカリキュラムで授業を受けることができるよう、平成27年度から、授業のバイリンガル化を実施した。

また、日本語を解さない留学生に対しては、各学年のコーディネータ教員（学生委員）によるサポートのほかに、入学直後から1対1で支援するEMPチューターを配置した。

その他、外国人留学生の各種事務手続きがスムーズに進むよう、平成26年度末までに、各種書類の英語化を行い、留学生本人による、英語のみでの各種手続きを可能にした。併せて、入学前に、本学グローバルコミュニケーション教育センターで開講している留学生対象の日本語補講コースを案内し、日本語でのコミュニケーションが難しい留学生の不安を取り除くとともに、日本語学習への意欲向上に努めた。

4. 国際ネットワークの形成

本プログラムでは、米カリフォルニア大学ロサンゼルス校、英エディンバラ大学、仏ヴァレンシエンヌ大学、蘭デルフト工科大学、蘭アイントホーヘン工科大学、米南カリフォルニア大学、米マサチューセッツ工科大学をはじめ、米 Entropy Control, Inc.、奥 Ars Electronica Linz GmbH を、「エンパワメント・グローバルアライアンス」の拠点としている。各機関から合計 10 名の教員が本プログラムに参画し、テレビ電話システムを活用した日常的な研究指導、達成度審査への参加、本プログラム学生の受入れを担当している。海外教員の詳細は、海外教員の詳細は、補遺（I.1. (4). (c) 海外拠点教員）に記載する。



国際ネットワーク

以下には、代表としてオランダ アイントホーヘン工科大学、オーストリア Ars Electronica、アメリカ カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) の交流事例を紹介する。なお、学生の学年は活動当時の年次を示す。

(1) オランダ アイントホーヘン工科大学

平成 27 年 4 月より、アイントホーヘン工科大学の出身者 1 名を、本プログラム学生として受け入れた。また、平成 28 年 10 月に海外入試を実施し、鈴木健嗣教授（システム情報系）が現地に行くとともに、筑波大学と遠隔会議システムを用いてドイツから 2 名の受験生に対する口述試験を行った。

また、平成 29 年度から、筑波大学、アイントホーヘン工科大学、フォンティス大学（平成 29 年度のみ参加）、ユトレヒト大学の合同サマーワークショップを開始した。平成 29 年度と令和元年度は筑波大学で、平成 30 年度はアイントホーヘン工科大学で開催し、学生・教員間で活発な交流や研究に関する意見交換が行われた。

例えば、令和元年度は、7 月 15 日（月）から 23 日（火）、筑波大学において、筑波大学、アイントホーヘン工科大学、ユトレヒト大学の 3 大学合同サマーワークショップを開催した。筑波大学が

らは EMP 履修生 9 名に加え芸術専攻及び感性認知脳科学専攻から 5 名が参加し、TU/e 及び Utrecht University の参加者 12 名と共に「自然災害後の復興と活力ある社会」のテーマの下、約 8 日間に渡り、講義、サイトビジット、グループワークやソーシャルイベント等からなる活動に取り組んだ。



グループワークの様子



剣道体験



最終発表の様子



懇親会の様子

3 大学合同サマーワークショップの様子

(2) オーストリア Ars Electronica

本プログラムと Ars Electronica Linz GmbH（オーストリア）とは、緊密な連携を続けている。平成 26 年 8 月～9 月、最先端の Art, Technology and Society にフォーカスした世界的な芸術祭、Ars Electronica Festival 2014 の一環として、本プログラム主催により「デバイスアート国際展」を開催した。

その後、平成 27 年度初めより、Ars Electronica の一部門であり、R&D としての役割を持つ Futurelab に委託して、チームプロジェクト型演習である LabX を行った。LabX は、必修の演習・実習科目「エンパワーメントプロジェクト研究」の一環として行った。LabX の枠組みを利用して、アーティストを本学に招聘してのセミナーや、2 週に 1 度の遠隔会合の実施など、学生に対する直接的な技術指導を行った。3 ヶ月の活動の後、平成 27 年 9 月に開催された Ars Electronica Festival 2015 にて、学生グループ（1 年次生大図岳、3 年次生 CHACIN Aisen Carolina、JAZBEC Masa、ERICH Floris Marc Arden）が作品発表を行った。



Ars Electronica Festival 2015



Ars Electronica 作品展示

それ以来毎年、LabX の枠組みを使って、Ars Electronica Festival に学生を派遣した。彼らの展示した作品への評価は高く、フェスティバルへの参加は、メディアアートに関する多様な活動の成果を、テクノロジー、アート、デザインを横断する観点で整理して、世界に向けて発表する機会となった。

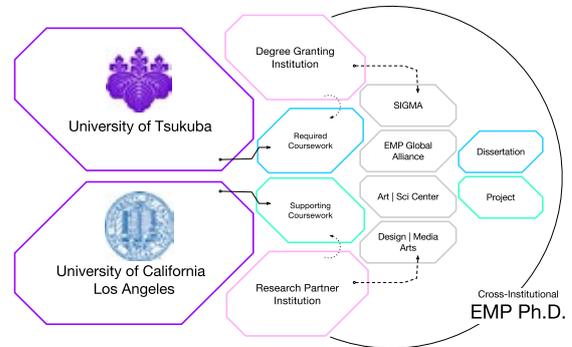
(3) アメリカ カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA)

Art|Sci Center と本プログラムとで、共同で学生を教育するプログラムである Cross-Institutional Program (学位は EMP が授与) を平成 27 年より実施し、同拠点の Victoria Vesna 教授を筑波大学グローバル教育院の客員教授として任用した。また、この枠組みより、同拠点から平成 27 年度 1 名、さらに平成 28 年度に 1 名の留学生を受け入れた。

Victoria Vesna 教授は、平成 27 年 11 月～平成 28 年 1 月、平成 28 年 12 月～平成 29 年 1 月、平成 31 年 1 月から 2 月にかけて本学に滞在し、学生の博士論文の指導及び審査を行った。

また、Vesna 教授の尽力により、平成 28 年 1 月 24 日、エンパワースタジオにおいて、「BIRD SONG DIAMOND Japan 2016 ～鳥の歌のきらめき～」を開催した。BIRD SONG DIAMOND プロジェクトの立案者である、米カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) の進化生物学者 Charles Taylor 教授の要請を受けて、東京大学の物理学者池上高志教授の支援を受け、Vesna 教授が、氏の研究である鳥類の音響ネットワークを可視化する芸術作品を考案した。

BIRD SOND DIAMOND Japan では、EMP 履修生 4 名 (3 年次 CHACIN Aisen Carolina, JAZBEC Masa、2 年次 高鳥 光、1 年次 大図 岳) に、他専攻の学生を加え、学際的な協力者でグループを結成した。バーチャルや芸術といった分野を横断したグループのメンバーで協力し合うことにより、聴覚と視覚を融合したインスタレーション作品を完成させ、発表が行われた。当日は約 50 名が参加し、インターネットを通じてイベントがストリーミング配信され、世界中から多数のアクセスを記録した。また、この作品を、本プログラムの海外拠点の一つである Ars Electornica Center の Deep Space という大型映像施設に移植し ARS ELECTRONICA FESTIVAL 2017 において公開デモンストレーションを行った。



Cross-Institutional Program 概念図



発表会ポストカード



Large Space を活用した作品発表

5. 教育活動の状況

区分	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	説明
(1) 他研究科開設の授業等の履修(1人当たり平均)	2.4 科目	2.3 科目	0.9 科目	0.6 科目	0.3 科目	0.1 科目	令和元年度 1 科目履修者:6 人 2 科目履修者:1 人 3 科目履修者:1 人
(2) PBL など課題解決型学習を取り入れた授業科目数	2 科目	5 科目	4 科目	4 科目	4 科目	4 科目	演習・実習科目「エンパワメントプロジェクト研究」(必修)、「リサーチデザイン演習」(必修)、「エンジニアリングレジデンス実習」(必修)、専門科目「宇宙芸術ワークショップ2019」にて実施
(3) ①研究室ローテーション(参加した学生の数)	9 人	15 人	6 人	6 人	15 人	15 人	基礎科目「エンパワメント情報学原論」(必修)にて実施
②研究室	2 研究室	2 研究室	2 研究室	2 研究室	2 研究室	2 研究室	
(4) 企業へのインターンシップ派遣者数(国内)	0 人	4 人	4 人	6 人	9 人	6 人	演習・実習科目「エンジニアリングレジデンス実習」(必修)にて実施
(5) 企業へのインターンシップ派遣者数(海外)	2 人	4 人	8 人	2 人	2 人	0 人	
(6) 官公庁等へのインターンシップ派遣者数	0 人	0 人	1 人	1 人	1 人	1 人	
(7) NPO 等へのインターンシップ派遣者数	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	
(8) 国際機関等へのインターンシップ派遣者数	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	
(9) 海外大学等への派遣者数	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	0 人	
(10) 学生の学会発表数	24 件 (4 件)	38 件 (12 件)	41 件 (19 件)	41 件 (23 件)	63 件 (26 件)	50 件 (19 件)	() は国外かつ外国語で行われた発表の内数
(11) プログラムに参画する企業数	7 件	7 件	7 件	9 件	9 件	9 件	パナソニック(株)、日産自動車(株)、(株)日立製作所、日本電気(株)、(株)資生堂、(一社)TXアントレプレナーパートナーズ、筑波記念病院、米 Entropy Control, Inc., 奥 Ars Electronica Linz GmbH
(12) プログラムに参画する官公庁等数	1 件	1 件	1 件	1 件	1 件	1 件	国立研究開発法人産業技術総合研究所
(13) プログラムに参画するNPO等数	0 件	0 件	0 件	0 件	0 件	0 件	
(14) プログラムに参画する国際機関数	0 件	0 件	0 件	0 件	0 件	0 件	
(15) 共同研究の実施件数(企業数)	0 件	0 件	0 件	0 件	0 件	1 件	株式会社資生堂 Children's Hospital of Philadelphia

Ⅲ. グローバルに活躍するリーダーを養成する指導体制の整備

区分	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	説明
(16) 共同研究の実施件数（国際機関等）	0件	0件	0件	0件	0件	0件	
(17) 共同研究の実施件数（大学・研究機関）	0件	0件	0件	0件	0件	1件	国立研究開発法人産業技術総合研究所
(18) 学生の論文発表数	4件	23件	34件	17件	12件	3件	補遺Ⅱ .1. 学生の学会発表に記載
(19) 上記（18）のうち、レフェリー付き論文発表数	4件	23件	33件	16件	12件	3件	補遺Ⅱ .1. 学生の学会発表に記載
(20) 上記（18）のうち、外国語で作成した論文の発表数	4件	23件	26件	14件	10件	2件	補遺Ⅱ .1. 学生の学会発表に記載
(21) 企業等からの経済的支援の受入件数	0件	0件	0件	0件	0件	0件	

IV. 優秀な学生の獲得

1. 優秀な学生の獲得

(1) 広報活動

毎年、優秀な学生を獲得するため、ウェブ要項・出願システムの活用や、ウェブの整備、入試説明会の開催や、印刷物の作成配布を行った。以下、代表として令和元年の広報活動を紹介する。

ウェブ要項・ 出願システム	平成 31 年 4 月 7 月期推薦、および 8 月期一般入試募集要項を全学募集要項サイトで公開 ・EMP サイト、全学サイト入試ページからリンク
	令和元年 11 月 2 月期一般入試募集要項を全学募集要項サイトで公開 ・EMP サイト、全学サイト入試ページからリンク
ウェブ	・変更があった情報を随時更新
イベント& 入試説明会等	平成 31 年 4 月 20 日（土）EMP Open Studio
印刷物	平成 31 年 4 月 20 日（土）プログラム説明会 ・全学サイト、EMP サイトに情報を掲載
	リーフレット（日英併記 8 頁）改訂 200 部
	第 9 号ニューズレター（日本語 12 頁）400 部



Web サイト（左から：日・英、スマートフォン用（日））



第9号 EMP Newsletter



Open Studio 2019 ポスター



入試説明会の様子



入試説明会のポスター

(2) 入試

平成 26 年度入試【平成 25 年度実施】

プログラムで最初の入試実施となる平成 25 年度は、すでに筑波大学大学院に合格している学生を対象とする履修者特別選抜により優秀な学生を確保することを主体とし、新入生、3 年次編入生を合わせて 10 名の学生の入学を認めた。うち 1 名は、心理学を専攻する学生であった。

種類	募集人員	願書受付期間	試験日	合格発表日	合格者数
履修者特別選抜 (12 月期) 出願形式：紙媒体	6+ 若干名 (1 年次) 3+ 若干名 (3 年次)	12 月 2 日 (月)	12 月 16 日 (月)	12 月 25 日 (水)	5 名 (1 年次) 2 名 (3 年次)
		12 月 3 日 (火)			
履修者特別選抜 (2 月期) 出願形式：紙媒体	若干名 (1 年次) 若干名 (3 年次)	1 月 23 日 (木)	2 月 3 日 (月)	2 月 12 日 (水)	1 名 (1 年次) 2 名 (3 年次)
		1 月 24 日 (金)			

種類	募集人員	願書受付期間	試験日	合格発表日	合格者数
海外特別選抜 (2月期) 出願形式：WEB	若干名(1年次)	1月4日(土) 1月7日(火)	2月3日(月)	2月13日(木)	0名(1年次)

入試の実施方法としては、履修者特別選抜、海外特別選抜ともに、産業界におけるリーダーを目指すキャリア志向の学生を選抜するため、学生に「キャリアプラン」を提出させた上、口述試験において、基礎学力に加え、そのキャリア志向と本プログラム内容との適合性及び表現力を審査した。これは次年度以降も同様である。なお、海外特別選抜では、筑波大学の学位プログラムとして初めて、英文WEBシステムでの出願受付を行い、同じく初めて、Skypeによる口述試験を行った。

平成27年度入試【平成26年度実施】

平成26年6月に明文化したアドミッションポリシー及び入学者選抜に係る基本的事項等に沿い、10月及び2月に一般入試、12月及び2月に履修者特別選抜を実施した。入試の実施方法も昨年度と同様である。

一般入試は、前年度は海外特別選抜という名称で実施したが、海外だけでなく日本国内の優秀な学生の出願をも促すため、「一般入試」への改称を行った。グローバルリーダーを育成するプログラムであるため、一般入試の募集要項は英文のみとしたが、WEBシステムでの出願は日英両言語での入力を可能にした。一般入試の口述試験は、筑波大学に限らず、海外拠点であるアイントホーヘン工科大学(オランダ)、カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)(アメリカ)においても実施した。オランダにおける現地入試については、海外拠点にいる志願者及び試験委員と本学の試験委員をテレビ会議システムで接続して実施した。10月及び2月の一般入試実施の結果、日本人学生2名に加え、多様な国籍の留学生5名(アメリカ、オーストラリア、オランダ、スロベニア、メキシコ)を合格させた。なお、海外での入試実施の機会を活用してUCLAとの連携を強め、共同で学生を教育するプログラムであるCross-Institutional Programの整備を図った。

履修者特別選抜では、既に本学大学院に合格している学生を対象に、12月及び2月に実施し、9名の入学を認めた。

以上の一般入試及び履修者特別選抜により、芸術及び看護科学等、前年度以上に多様な研究分野を持つ学生を獲得した。

種類	募集人員	願書受付期間	試験日	合格発表日	合格者数
一般入試 (10月期) 出願形式：WEB	6名(1年次) 若干名(3年次)	9月22日(月) 9月29日(月)	10月31日(金) 及び 11月7日(金)	11月17日(月)	1名(1年次) 3名(3年次)
履修者特別選抜 (12月期) 出願形式：紙媒体	6名(1年次) 6名(3年次)	11月17日(月) 11月19日(水)	12月8日(月)	12月19日(金)	5名(1年次) 3名(3年次)
一般入試 (2月期) 出願形式：WEB	3+若干名(1年次) 若干名(3年次)	1月6日(火) 1月9日(金)	2月2日(月)	2月18日(水)	2名(1年次) 1名(3年次)
履修者特別選抜 (2月期) 出願形式：紙媒体	3+若干名(1年次)	1月22日(木) 1月23日(金)	2月2日(月)	2月18日(水)	1名(1年次)

平成 28 年度入試【平成 27 年度実施】

平成 28 年入試は、平成 26 年 6 月に定めたアドミッションポリシー、及び毎年度定めている入学者選抜に係る基本的事項等に沿い、10 月及び 2 月に一般入試、12 月及び 2 月に履修者特別選抜を実施した。平成 27 年度に、以下の通り入試を実施した。

一般入試の口述試験は、筑波大学に限らず、海外拠点であるカリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) (アメリカ) においても実施し、海外拠点にいる志願者及び試験委員と本学の試験委員をテレビ会議システムで接続して実施した。10 月の一般入試実施の結果、多様な国籍の留学生 3 名 (アメリカ、イタリア、ポルトガル) を合格させた。履修者特別選抜では、既に本学大学院に合格している学生を対象に、12 月に実施し、2 名の入学を認めた。

種類	募集人員	願書受付期間	試験日	合格発表日	合格者数
一般入試 (10 月期) 出願形式：WEB	6 名 (1 年次) 若干名 (3 年次)	9 月 14 日 (月) 9 月 21 日 (月)	10 月 27 日 (火) 及び 11 月 5 日 (木)	11 月 16 日 (月)	3 名 (3 年次)
履修者特別選抜 (12 月期) 出願形式：紙媒体	6 名 (1 年次) 3 名 (3 年次)	11 月 16 日 (月) 11 月 18 日 (水)	12 月 7 日 (月)	12 月 18 日 (金)	1 名 (1 年次) 1 名 (3 年次)
一般入試 (2 月期) 出願形式：WEB	若干名 (1 年次) 若干名 (3 年次)	1 月 5 日 (火) 1 月 8 日 (金)	志願者なしのため実施せず		
履修者特別選抜 (2 月期) 出願形式：紙媒体	若干名 (1 年次) 若干名 (3 年次)	1 月 21 日 (木) 1 月 22 日 (金)			

平成 29 年度入試【平成 28 年度実施】

平成 29 年度入試は、平成 26 年 6 月に定めたアドミッションポリシー、及び毎年度定めている入学者選抜に係る基本的事項等に沿い、10 月及び 2 月に一般入試、12 月及び 2 月に履修者特別選抜を実施した。平成 28 年度に、以下の通り入試を実施した。

一般入試の口述試験は、筑波大学に限らず、海外拠点であるアイントホーヘン工科大学 (オランダ) においても実施し、海外拠点にいる志願者及び試験委員と本学の試験委員をテレビ会議システムで接続して実施した。10 月の一般入試実施の結果、多様な国籍の留学生 2 名 (シンガポール、ドイツ) を合格させた。

履修者特別選抜では、既に本学大学院に合格している学生を対象に、12 月に実施し、2 名の入学を認めた。

なお、平成 29 年度入試 (平成 28 年度実施) から、海外からの優秀な人材獲得に向けて、英語評価として、TOEFL・TOEIC に加えて、IELTS Academic も採用した。

種類	募集人員	願書受付期間	試験日	合格発表日	合格者数
一般入試 (10 月期) 出願形式：WEB	6 名 (1 年次) 若干名 (3 年次)	9 月 19 日 (火) 9 月 25 日 (月)	11 月 10 日 (金)	11 月 20 日 (月)	1 名 (1 年次) 3 名 (3 年次)
履修者特別選抜 (12 月期) 出願形式：紙媒体	6 名 (1 年次) 3 名 (3 年次)	11 月 20 日 (月) 11 月 22 日 (水)	12 月 5 日 (火)	12 月 15 日 (金)	7 名 (1 年次) 1 名 (3 年次)

種類	募集人員	願書受付期間	試験日	合格発表日	合格者数
一般入試 (2月期) 出願形式：WEB	若干名 (1年次) 若干名 (3年次)	12月4日 (月) 1月9日 (火)	2月1日 (木)	2月16日 (金)	1名 (1年次) 1名 (3年次)
履修者特別選抜 (2月期) 出願形式：紙媒体	若干名 (1年次) 若干名 (3年次)	1月18日 (木) 1月19日 (金)	2月1日 (木)	2月16日 (金)	1名 (1年次)

平成30年度入試【平成29年度実施】

平成30年度入試は、平成26年6月に定めたアドミッションポリシー、及び毎年度定めている入学者選抜に係る基本的事項等に沿い、10月及び2月に一般入試、12月及び2月に履修者特別選抜を実施した。

平成29年度に、履修生の柔軟なキャリアパスを支援することを目的として、平成30年度以降入学の履修生が、博士論文研究基礎力審査(QE)に合格することで、修士(人間情報学)を授与するというディプロマポリシーの改革を行なった。これより、より多様な学生を獲得することに寄与し、平成30年度入試より履修者特別選抜において1年次の募集が飛躍的に増加した。一般入試にも引き続き海外からの受験者が応募してきており、多様な国籍の留学生6名(中国、韓国、ブラジル、フィリピン、ベネズエラ)が合格した。

種類	募集人員	願書受付期間	試験日	合格発表日	合格者数
一般入試 (10月期) 出願形式：WEB	6名 (1年次) 若干名 (3年次)	9月3日 (月) 9月25日 (火)	10月31日 (水)	11月19日 (月)	3名 (1年次) 1名 (3年次)
履修者特別選抜 (12月期) 出願形式：紙媒体	6名 (1年次) 3名 (3年次)	11月12日 (月) 11月16日 (金)	12月3日 (月)	12月14日 (金)	4名 (1年次) 1名 (3年次)
一般入試 (2月期) 出願形式：WEB	若干名 (1年次) 若干名 (3年次)	12月3日 (月) 12月26日 (水)	1月31日 (木)	2月15日 (金)	2名 (1年次) 0名 (3年次)
履修者特別選抜 (2月期) 出願形式：紙媒体	若干名 (1年次) 若干名 (3年次)	1月15日 (火) 1月18日 (金)	志願者なしのため実施せず		

令和元年度入試【平成30年度実施】

令和元年度入試は、10月及び2月に一般入試、12月及び2月に履修者特別選抜を実施し、一般入試により5名(日本1名、中国2名、アメリカ1名、台湾1名)、履修者特別選抜(すでに筑波大学大学院に合格している学生を対象)により5名(全員日本人)が合格している。

種類	募集人員	願書受付期間	試験日	合格発表日	合格者数
一般入試 (10月期) 出願形式：WEB	6名 (1年次) 若干名 (3年次)	9月20日 (火) 9月26日 (月)	10月28日 (金)	11月21日 (月)	1名 (1年次) 3名 (3年次)
履修者特別選抜 (12月期) 出願形式：紙媒体	6名 (1年次) 3名 (3年次)	11月14日 (月) 11月16日 (水)	12月5日 (月)	12月16日 (金)	1名 (3年次)

種類	募集人員	願書受付期間	試験日	合格発表日	合格者数
一般入試 (2月期) 出願形式：WEB	若干名(1年次) 若干名(3年次)	12月5日(月) 1月10日(火)	2月2日(木)	2月17日(金)	1名(1年次)
履修者特別選抜 (2月期) 出願形式：紙媒体	若干名(1年次) 若干名(3年次)	1月24日(火) 1月25日(水)	2月2日(木)	2月17日(金)	1名(1年次)

令和2年度入試【令和元年度実施】

令和2年度入試では、優秀な学生の応募をより確実にするため、従来の12月期、2月期の履修者特別選別を7月期推薦入試に変更した。一般入試により、6名(日本3名、中国3名)、推薦入試により3名(全員日本人)が合格した。

種類	募集人員	願書受付期間	試験日	合格発表日	合格者数
7月期 (推薦入試)	4名(1年次)	5月31日(金) 6月7日(金)	7月5日(金)	7月16日(火)	3名(1年次)
8月期 (一般入試)	4名(1年次) 若干名(3年次)	7月1日(月) 7月23日(火)	8月21日(水)	9月10日(火)	1名(1年次) 2名(3年次)
2月期 (一般入試)	4+若干名(1年次) 若干名(3年次)	12月2日(月) 12月20日(金)	1月30日(木)	2月17日(月)	2名(1年次) 1名(3年次)

(3) 転研究科

平成26年度に、「転研究科・転専攻の取扱いについて」を制定し、一般入試や履修者特別選抜で対象としない年次の学生が本プログラムの履修を希望する場合、所定の手続きにより本プログラムへ移籍することを可能にし、優秀な学生の獲得方法の幅を広げた。

平成27年度にはさらに、「エンパワーメント情報学プログラムにおける転研究科に関する選考方法についての申合せ」を制定し、他研究科等から本プログラムに移籍を希望する学生に対し実施する選考の方法を定めた。この制度により、平成28年度から本プログラムの履修を開始する学生1名の2年次への移籍を認めている。

2. 学生数等

		平成25年度実施 (平成26年度入学)	平成26年度実施 (平成27年度入学)	平成27年度実施 (平成28年度入学)	平成28年度実施 (平成29年度入学)	平成29年度実施 (平成30年度入学)	平成30年度実施 (平成31年度入学)	令和元年度実施 (令和2年度入学)
プログラム募集人員数 (実数)		9人	18人	15人	12人	12人	12人	8人
① 応募学生数	応募学生数	11人	17人	9人	9人	17人	13人	9人
	うち留学生数	2人	5人	4人	6人	7人	7人	4人
	うち自大学出身者数	9人(1人)	8人(0人)	3人(0人)	4人(3人)	10人(2人)	6人(2人)	4人(0人)
	うち他大学出身者数	2人(1人)	9人(5人)	6人(4人)	5人(3人)	7人(5人)	7人(5人)	5人(4人)
	うち社会人学生数	0人(0人)	1人(1人)	2人(2人)	2人(2人)	3人(3人)	1人(1人)	0人(0人)
	うち女性数	0人(0人)	5人(3人)	1人(1人)	1人(0人)	5人(4人)	1人(1人)	3人(3人)
② 合格者数	合格者数	10人	16人	6人	7人	15人	11人	9人
	うち留学生数	1人	5人	3人	4人	6人	5人	4人
	うち自大学出身者数	9人(1人)	8人(0人)	3人(0人)	2人(1人)	9人(1人)	5人(1人)	4人(0人)
	うち他大学出身者数	1人(0人)	8人(5人)	3人(3人)	5人(3人)	6人(5人)	6人(4人)	5人(4人)
	うち社会人学生数	0人(0人)	1人(1人)	1人(1人)	2人(2人)	3人(3人)	1人(1人)	0人(0人)
	うち女性数	0人(0人)	5人(3人)	1人(1人)	1人(0人)	4人(3人)	1人(1人)	3人(3人)
③ ②のうち 受講学生数	受講学生数	10人	14人	6人	6人	15人	10人	8人
	うち留学生数	1人	5人	3人	3人	6人	4人	4人
	うち自大学出身者数	9人(1人)	8人(0人)	3人(0人)	2人(1人)	9人(1人)	5人(1人)	3人(0人)
	うち他大学出身者数	1人(0人)	6人(5人)	3人(3人)	4人(3人)	6人(5人)	5人(3人)	5人(4人)
	うち社会人学生数	0人(0人)	1人(1人)	1人(1人)	2人(2人)	3人(3人)	1人(1人)	0人(0人)
	うち女性数	0人(0人)	4人(3人)	1人(1人)	1人(9人)	4人(3人)	1人(1人)	3人(3人)
プログラム合格倍率 (①応募学生数/②合格者数) (小数点第二位を四捨五入)		1.10倍	1.06倍	1.50倍	1.29倍	1.13倍	1.18倍	1.00倍

() は留学生の内数を示す。

は令和2年度入学の受講学生数は予定。

3. 経済的支援の実施

本プログラムでは、経済的な理由で学修が妨げられることなく、優秀な学生が学修研究に専念できるよう、当初の計画どおり、以下の支援を行った。

(1) 奨励金

本学が定める「国立大学法人筑波大学特別奨励学生実施要項」に基づき、所属する学生に対し奨励金（180千円／月）を支給した。

筑波大学特別奨励学生制度は、本学が定める学位プログラムに選抜された学生が主体的に独創的な研究を計画・実践し、グローバルに活躍するリーダーに育つことを支援する目的で実施する制度である。学生は、特別奨励学生研究計画書により申請し、提出された研究計画の内容等を審査の上、奨励学生に採用されたものが奨励金を受給できる。

平成27年度には、「エンパワーメント情報学プログラム所属の特別奨励学生に係る報酬を伴う活動に関する申合せ」を定め、TA・RA以外で報酬を伴う活動に従事する際のルールを定めた。

(2) 授業料減免措置

本学の「筑波大学授業料の免除及び徴収猶予規程」及び「グローバル教育院に在学する学生に係る授業料免除実施要領」に基づき、1・2年次生に1年間に納付すべき授業料の半額、3～5年次生については全額を免除した。なお、授業料の減免決定までは、徴収猶予を認める措置をとり、学生に負担が生じないよう配慮した。

年次	授業料免除	納付額
1・2年次生	半額免除	第1期分 133,950円 第2期分 133,950円
3～5年次生	全額免除	なし

(3) 住宅支援

本プログラム履修生が入居するエンパワー寮を、本学筑波キャンパス内に設置している。

当初の計画では、履修生全員をエンパワー寮に入寮させ、共同生活を通じて異文化、異分野の理解を深めることを予定していたが、平成26年4月より、1・2年次生のみ全寮制ということで運用を開始した。

エンパワー寮には、バス・キッチン・エアコン・洗濯機・乾燥機が備え付けられており、光熱水費基本料金を含め、毎月約3万円の自己負担で居住が可能である。寮の提供は、学生への大きな経済的支援となった。(I.4.(2) エンパワー寮を参照)

(4) TA・RA

本プログラムでは、本学独自の制度であるTA（Teaching Assistant）・TF（Teaching Fellow）制度、RA（Research Assistant）・RF（Research Fellow）制度を導入し、教授法の指導に活かした。

平成26年度に、「エンパワーメント情報学プログラム所属学生のTA・RA活動に関する申合せ」を制定し、本プログラムにおける人材養成目的に資するプログラム活動の一環としてTA・RAの業務が

不可欠と認めた場合に限り、週当たり総時間数5時間を限度とし、TA・RA活動による報酬の受給を認めた。

学生はTAを担当する事を通じて、相手にわかりやすく伝える能力としての魅せ方力を修得できる。また、企業における研究リーダーとして複数の研究者を束ね研究プロジェクトを推進する際に必要な研究マネジメントの素養を身につけることができる。

なお、TA業務に従事した学生のうち、特に優秀の評価を得た者を、TF (Teaching Fellow) として雇用することを可能にするため、平成27年度、「エンパワーメント情報学プログラムにおけるティーチング・フェロー (TF) に関する取扱い」及び「エンパワーメント情報学プログラムにおけるTFの選考について」を制定し、詳細を定めた。

(5) 旅費支援

平成26年度に、「エンパワーメント情報学プログラム所属学生への旅費等の支給に関する申合せ」を制定し、本プログラムの人材養成目的に合致する場合には、申請により出張旅費の受給を可能にした。平成27年度には、同申合せを改訂して出張の目的により区分を設けることとし、より戦略的な配分が行えるようにした。

7年間で、海外インターンシップ、国際会議発表、国際展示会出展等、国内外の出張にかかる経費に対し、967件、総額5070万円の支援を行った。

	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度
出張件数	40件	130件	178件	214件	245件	160件
出張費	280万円	1100万円	1040万円	1100万円	850万円	700万円

(10万円以下四捨五入)

(6) 教育研究活動経費支援

令和元年度は、「教育研究活動経費」として、一人あたり20万円を上限に、学生の裁量により国内外での学会発表の旅費等に補助金を使用できる仕組みを整えた。これにより、自身で研究費を管理しながら研究を進める意識を向上させている。

4. 奨励金等の経済的支援の受給状況

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
奨励金受給学生数	10 人	24 人	27 人	27 人	34 人	33 人
TA として採用している 学生数	8 人	10 人	11 人	10 人	13 人	13 人
RA として採用している 学生数	0 人	0 人	0 人	1 人	0 人	0 人

V. 世界に通用する確かな学位の質保証システム

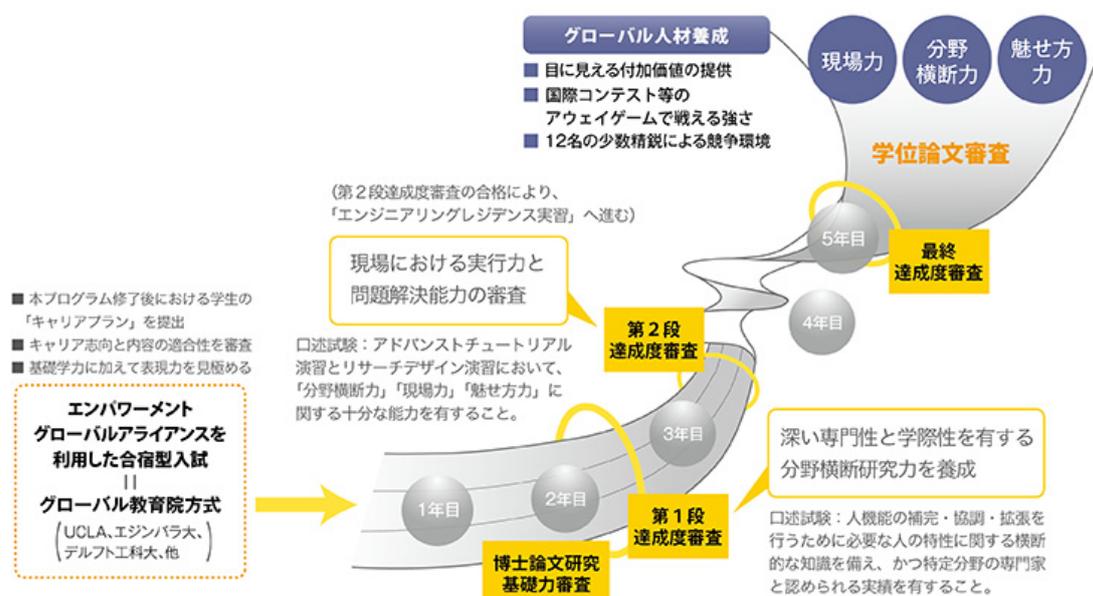
1. 学位審査体制の構築

本プログラムの学位授与の方針は、専門分野における高い研究力とともに、多様な文化的背景を有する人々が集まる国際社会においてイニシアティブを発揮できるグローバル人材に必要な「分野横断力」「魅せ方力」「現場力」を備えていることである。具体的には、所定の単位を取得した上で、各達成度審査等に合格した者が学位論文を提出し、学位審査に合格した場合に博士（人間情報学）（Doctor of Human Informatics）の学位を授与する。

当初の計画では、学位審査の前に段階的に行う達成度審査を、Qualifying Examination 1（QE1）及び Qualifying Examination 2（QE2）として実施を予定していたが、評価精度の向上を狙い3段階の達成度審査（ASA1、ASA2、FASA）及び博士論文研究基礎力審査（QE）へ移行した。本プログラムでのQEは、大学院設置基準等の一部を改正する省令（平成24年文部科学省令第6号、平成24年3月14日公布）に合わせ、修士の学位に相応しい水準を確保するために明確化したものである。5年一貫制博士課程の中間評価として重要なQEを、その他達成度審査とは独立した審査とすることで、QE合格後に、起業・就職や、本プログラム以外の大学院課程への移行を可能にするなど、柔軟でより多様なキャリア形成を支援することに寄与した。また、学生が自ら行う達成度評価と確かな学位の質保証システムを連携させるため、学位論文予備審査に相当する最終達成度審査を第3段階として位置付け、実施することとした。

平成26年度に、「エンパワーメント情報学プログラムの人材養成目的等に関する法人細則」を制定し、課程修了、学位取得に至るプロセスの概要を明文化した。本プログラムの修了要件として、基礎科目、専門科目、演習・実習科目から50（編入生は52）単位を必修とし、さらに専門科目から計20（編入生は18）単位以上を履修し、合計して計70単位以上の取得が必要である。

また、単位の取得のほか、博士論文研究基礎力審査（QE）、第1段達成度審査（ASA1）、第2段達成度審査（ASA2）、最終達成度審査（FASA）、博士論文の審査及び最終試験に合格することが修了要



エンパワーメント情報学プログラムの学位審査体制

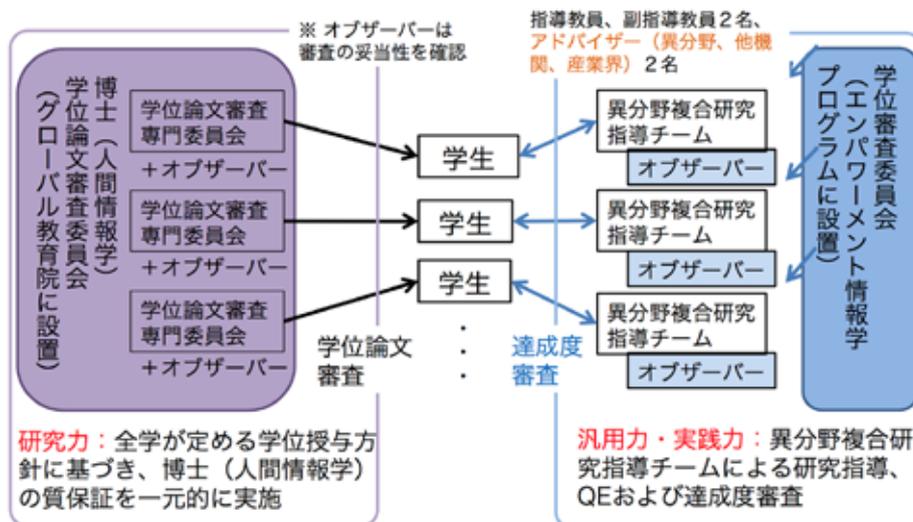
件であると定めた。次いで「エンパワーメント情報学プログラムにおける達成度審査について」及び「エンパワーメント情報学プログラムにおける博士論文研究基礎力審査について」を制定し、達成度審査と博士論文研究基礎力審査の詳細を定めた。

平成 27 年度には、「エンパワーメント情報学プログラムにおける課程修了に関する規則」、また「エンパワーメント情報学プログラム学位論文審査実施要項」及び同「審査手順」を定め、学位審査が円滑に行われるよう体制の整備を行った。

本学では、全学的に学位の審査体制を明確化し、学位の質保証を推進している。本プログラムは、運営委員会の下に、常設の学位審査委員会を置き、博士論文研究基礎力審査・達成度審査・学位審査の実施ごとに設置される各審査委員会とは独立してチェック機能を果たす体制をとり、学位の質保証を担保している。毎回の達成度審査を実施時には、学位審査委員会が中心となって、「オブザーバー」を達成度審査委員会に派遣し監督することにより、ピアレビューと第三者評価の融合を図った。学位審査委員会は、各審査の審査基準を策定するだけでなく、審査マニュアルを作成して異分野複合研究指導チームに周知する等、共通認識の醸成に努めた。また、本プログラム等、学位プログラムの学位論文審査は、研究科ではなく、教育研究評議会がグローバル教育院の下に設置する全学学位論文審査委員会（博士（人間情報学）学位論文審査委員会）で行う体制とした。また、国際的に通用する学位に関する詳細説明（ディプロマサプリメント）を学位記と同時に授与する仕組みを整備した。これより、平成 28 年度の修了者から授与した。このように、全学が定める学位授与方針に基づき、博士（人間情報学）の質保証を一元的に実施することが可能になった。令和元年度末までの博士（人間情報学）学位授与者は 26 名で、詳細は補遺（Ⅱ.3. 博士（人間情報学）学位授与者）に掲載する。

各審査委員会の構成

博士論文研究基礎力審査委員会	主査 1 名、副査 2～4 名	いずれにも、学位審査委員会から「オブザーバー」を派遣、監督
第 1 段／第 2 段／最終達成度審査委員会	主査 1 名、副査 4 名	
学位論文審査委員会	主査 1 名、副査 4 名	



分野横断型の学位審査体制と全学学位論文審査委員会

2. 質保証システムの構築

本プログラムの人材育成目標である「分野横断力」「魅せ方力」「現場力」の達成状況を定期的に確認、共有し、学位の質を保証するため、平成26年度までに、学生本人による自己評価、及び教員による3段階の達成度審査（第1段、第2段、最終）及び博士論文研究基礎力審査（QE）のシステムを整備し、毎年、それぞれの審査を滞りなく実施した。

各審査の実施に当たっては、事前に学生から、申請書、履修成績一覧とともに、達成度自己点検シートとそのエビデンスを提出させた。学生は、学会発表論文、履修した授業の評価票、英語力試験のスコア等の証拠書類に基づいて、審査を受ける前に自己評価を行い、その内容を自己点検シートに記載する。審査する教員は、面接審査の前に、シートの記載内容がエビデンスに照らして適正であるかのチェックを行い、疑義がある場合には、面接審査において確認した。エビデンスは、学生による自己評価、教員による審査のいずれにおいても根拠となるため、本プログラム事務室で学生ごとにファイルを作成・保管するとともに、電子化したデータをグループウェアに掲載して閲覧の便宜を図った。このように、第三者による妥当性の検証がいつでも可能な形で審査を行っている点に大きな特徴がある。

平成27年度、本プログラムでは、成功したことだけでなくチャレンジして失敗したことも高く評価する旨を学生に周知し、第2段以降の達成度審査において、失敗の経験をまとめた「チャレンジリスト」の提出を義務付けることとした。

なお、本プログラムでは、主査・副査から構成される審査委員会を、学位審査委員会及び学生委員会がサポートする体制をとった。学位審査委員会より、事前の審査マニュアルの配付のほか、面接審査にオブザーバーを派遣して、助言を行うとともに、基準に従って適正に審査が行われていることを確認した。また、審査の運営を学生委員会が担当し、なるべく複数人の面接審査を同日に行う形での公开发表をセッティングした。

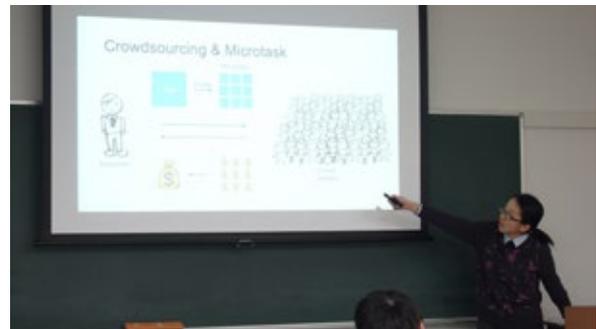
各段階の達成度審査等

通称	名称	実施時期	概要
QE	博士論文研究基礎力審査	2年次秋学期末	<ul style="list-style-type: none"> 一般プログラムの修士論文審査に相当し、修士に相当する知識と研究実績を有し、博士論文の作成に必要な研究を実施できるだけの基礎力を備えているかを審査する。審査に先立ち、「特定課題研究論文」（修士論文と同等もしくはそれ以上のレベルを求める）の提出を必須とする。
ASA1	第1段達成度審査	2年次秋学期末 (編入生は3年次秋学期末)	<ul style="list-style-type: none"> 人機能の「補完」「協調」「拡張」を行うために必要なユーザ要素、システム要素、コンテンツ要素に関する横断的な知識を備え、かつ特定分野の専門家と認められる実績を有するかを審査する。 50単位、国際会議での発表、リサーチデザイン演習の単位取得が必須。
ASA2	第2段達成度審査	4年次春学期末	<ul style="list-style-type: none"> 58単位、査読付き論文2編（うち1編は学術雑誌論文）が必須。 高い研究力＋企画力、魅せ方力を評価。 エンジニアリングレジデンス実習及びコラボラトリー実習の単位取得に必要。

通称	名称	実施時期	概要
FASA	最終達成度審査	5年次11月頃	<ul style="list-style-type: none"> ・FASAは、本プログラムにおける学位審査の予備審査に相当し、これに合格すると学位論文を提出できる。 ・エンパワーメント情報学における高い研究力に加え、産学官にわたるグローバルリーダーとして活躍するための「分野横断力」「魅せ方力」「現場力」を備えているかを審査する。 ・平成27年度から指導教員とは異なる専門分野を持つアドバイザー等からの指導が効果をあげているかを特にFASAで確認することを決め、「アドバイザー等指導記録」を、FASA申請の際に提出することを義務づけた。



令和元年度博士論文研究基礎力審査 (QE)



令和元年度第1段達成度審査 (ASA1)

令和元年度第1段達成度審査 (ASA2)

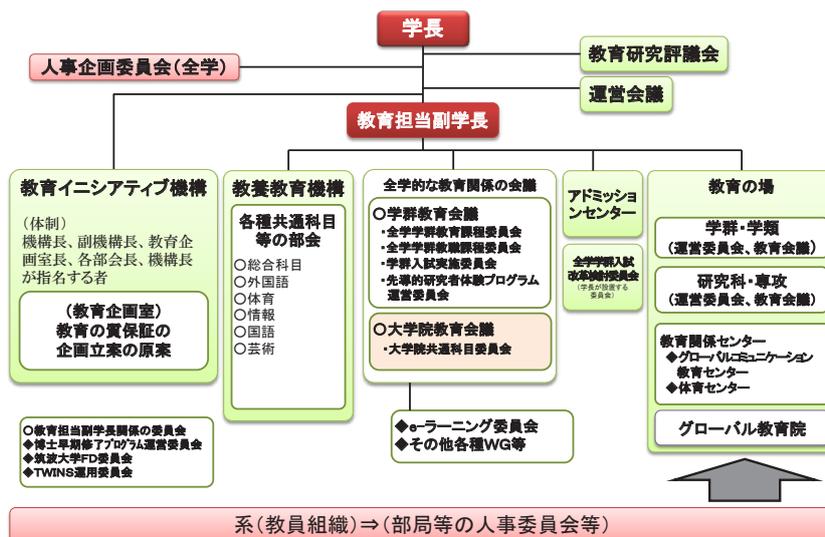


令和元年度最終達成度審査 (FASA)

VI. 事業の定着・発展

1. マネジメント体制の構築

本プログラムでは、学長を中心とした責任あるマネジメント体制を構築した。本学では、学長を機構長とする教育イニシアティブ機構が設置されており、その支援を受けて、グローバル教育院が、本プログラムを含む分野横断型学位プログラムの統括を行った。



本学の教育体制図

(1) グローバル教育院の運営体制

グローバル教育院（School of Integrative and Global Majors）は、教育担当副学長を教育院長とし、博士課程教育リーディングプログラムに採択された学位プログラムや、その他の分野横断型学位プログラムの受け皿として機能している。

令和元年度 グローバル教育院会議（大学院課程） 構成員

氏名	役職
議長 清水 諭	グローバル教育院長 副学長（教育担当）
澁谷 彰	ヒューマンバイオロジー学位プログラム プログラムリーダー
岩田 洋夫	エンパワーメント情報学プログラム プログラムリーダー
礪田 博子	ライフイノベーション学位プログラム プログラムリーダー
柳沢 正史	ヒューマニクス学位プログラム プログラムリーダー
坪内 孝司	教育企画室長

令和元年度末現在、グローバル教育院に属する学位プログラムには、本プログラムのほかにヒューマンバイオロジー学位プログラム、ライフイノベーション学位プログラム、及びヒューマニクス学位プログラムの計4つがあり、グローバル教育院としての意思決定や、共通の問題を議論するため、毎

月グローバル教育院会議を開催している。学位プログラム間で共通の案件に関しては、グローバル教育院が調整を行い、グローバル教育院としての規則の制定や、全学の規則の改訂への提議を行った。

(2) 本プログラムの運営体制

本プログラムは、プログラム責任者、プログラムリーダー（プログラムコーディネータ）のリーダーシップの下、プログラム教育会議、プログラム運営委員会が運営を行っている。平成25年度後半から現在にかけて、運営委員会が主体となって各種規則を制定し、学際的な学位プログラムを推進する体制を整備してきた。

本プログラムでは、教育会議、運営委員会、人事委員会のほか、様々な提言等を行える企画室を置くことにより、プログラムの円滑な運営に務めている。併せて、運営委員会の下に、分野ごとにカリキュラム委員会、学位審査委員会、学生委員会、広報委員会などの各種委員会を設置し、活動を行った。

また、プログラムの運営体制を強化するため、平成26年度から、本プログラムの専任教員を採用し、各委員会の委員に任命して、本プログラムの運営体制を強化した。専任教員一覧は、補遺（I.1. (3) (d) 専任教員）に記載する。

運営委員会委員

氏名	本プログラム内での役割
委員長 岩田 洋夫	プログラムリーダー
大田 友一	プログラム責任者（平成28年度まで） 入試委員長（平成27年度末まで）
稲垣 敏之	プログラム責任者（平成29年度から） 組織・人事担当 入試委員長（平成26年度末まで）
加藤 和彦	プログラム点検・評価委員長（平成29年度末まで）
北川 博之	システム情報工学研究科とのリエゾン担当（平成29年度末まで）
大澤 義明	システム情報工学研究科とのリエゾン担当 （平成30年度から）
葛岡 英明	カリキュラム委員長（平成30年度末まで）
森田 昌彦	学位審査委員長
伊藤 誠	国際連携委員長
濱川 佳弘	プログラム点検・評価委員長（平成30年度から） 企業連携委員長（平成29年度まで） 企業連携・リエゾン委員長（平成30年度から） スタジオ安全委員長 就職委員長
亀田 能成	学生委員長 カリキュラム委員長（令和元年度から）
鈴木 健嗣	運営事務局長 入試委員長（平成28年度から） 広報委員長
石濱 悟	システム情報エリア支援室長

なお、平成 25 年度後半から、本プログラムを支援するために契約職員を採用し、エンパワーメント情報学プログラム事務室（EMP 事務室）を設置した。

EMP 事務室は、本部教育機構支援課やシステム情報エリア支援室等、全学の関連部局の職員、また本プログラムために採用された契約職員、事務職員と連携しつつ、学生やプログラム担当教員の対応窓口や、プログラムの運営事務を担った。



EMP 事務室外観

2. PDCA サイクルの構築

本プログラムは、平成 25 年度に博士課程教育リーディングプログラムに採択されて以来、以下の成果目標を設定して進めてきた。

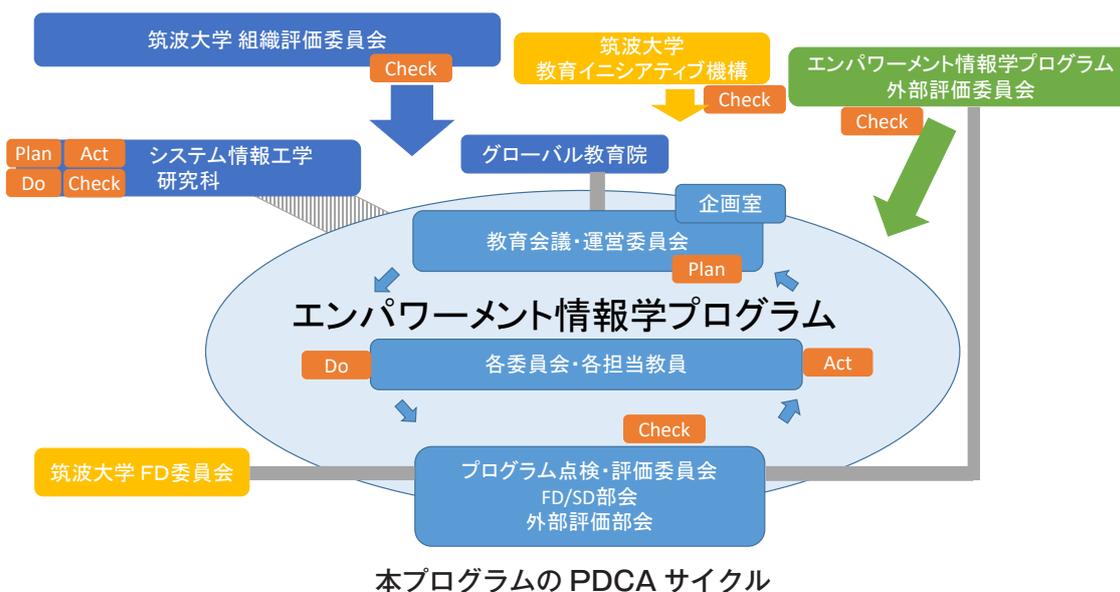
少数精鋭のリーダー養成の実施	毎年、平均 12 名の優れた学生を入学させ人材養成を行う。
産業界・異分野との連携による実践性を備えた研究訓練の確立	企業等へ派遣するエンジニアリングレジデンス実習、異分野に派遣するコラボラトリー実習について、それぞれ毎年平均 10 以上の派遣先に対して実施する。
異分野複合研究指導チームによる一貫指導の実施	学位プログラム内の教員だけではなく、異分野・国内外・産学官の多様なセクターから結集した「チーム」による研究指導体制による一貫指導を、各チーム平均 5 名以上の体制で実施する。

これらの数値目標や、プログラムの進捗状況を確認するため、プログラム内外から評価を受け、PDCA サイクル（Plan（計画）・Do（実行）・Check（評価）・Act（改善））の活用によって、業務改善に活かす取組を行った。また、リーディングプログラム委員会からのフォローアップが定期的であり、これらにも対応しプログラムの改良に取り組んだ。それらの結果、申請時に設定した数値目標は、以下のように達成している。

1. 募集人数 12 名：当初は Top of tops 指向の少人数体制であったが、近年では門戸を広げ、学年あたりの在籍者数は 12 名に達している。
2. 指導教員 5 名以上：5 名のプログラム担当者から成る異分野複合研究指導体制を徹底している。
3. インターン先 10 社以上：エンジニアリングレジデンス実習の派遣先が 29 機関に達している。

また、計画を超えて以下の定量指標に基づき PDCA を行い、今後の KPI を定める予定である。

- (1) 就職率：令和 2 年 3 月までに修了した学生 26 名はほぼ全員進路が決まっており、就職率 95% 以上を維持している。特にアカデミア以外の就職は、海外を含む 73% の実績を残しており、リーダーとしてグローバルに活躍するキャリアパスの形成に寄与している。
- (2) 学位授与率：本プログラムでは、平成 28 ～ 30 年度の学位授与率が 66.7% - 81.8% である。これは従来の研究科（例：システム情報工学研究科 48.5% - 61.8%）と比べて高い値であり、厳密な学位の質保証を行ってもなお高い学位授与率を維持している。



(1) 全学的なPDCA サイクルの整備

本学では、教育イニシアティブ機構が、各学位プログラムの推進を支援し、運営状況について提言を行う体制になっている。

また、本プログラムと多くのリソースを共有する教育組織であるシステム情報工学研究科が、平成26年度から、年次の重点施策の1つに「エンパワーメント情報学プログラムの推進」を掲げ、実績報告書で進捗状況を報告しており、本プログラムの進捗状況は、本学組織評価委員会（学長・副学長及び理事構成）が行う組織評価に組み込まれている。

FD活動については、本学FD委員会と各教育組織の関係委員会が推進し、全学研修会や学生へのアンケートの実施等の活動を行った。

(2) 本プログラムのPDCA サイクルの整備

本プログラムは、教育会議及び運営委員会とは別に、企画室を置いている。企画室は、プログラム責任者を中心としており、プログラムの運営に対して、随時、必要な提言を行う。

また、運営委員会の下にプログラム点検・評価委員会を設置し、その下に、FD（Faculty Development）及びSD（Staff Development）活動を推進するFD/SD部会を設置している。FD/SD部会が主体となって、本プログラム独自のFD研修会や授業評価アンケートを実施し、情報共有を行い、指導体制の強化を図った。

FD研修会

FD研修会は年2回を目標に実施した。そのうち、1回は、外部評価委員会、あるいは企業連携委員会の講評時に、関係教員が出席し、プログラムのさらなる改善に向けて、教員と外部の委員との共通認識を深める機会とした。（第VI章, 2, (3), 外部評価参照）各年度の実施概要を下表に示す。



FD研修会の会場風景

FD 研修会の実施概要

No.	年度	実施日	参加人数	実施内容
1	平成 26 年度	12 月 5 日	30 人	本学福学長 2 名を講師に迎え、EMP に参加する教職員の EMP に関する認識を深めた。
2	平成 27 年度	7 月 5 日	7 人	新任研修会を兼ね EMP に関する理解を深めた。
3		11 月 25 日	25 人	第 1 回外部評価委員会の講評と意見交換。
4	平成 28 年度	8 月 5 日	19 人	第 2 回外部評価委員会の講評と意見交換。
5		12 月 19 日	18 人	「人間情報学」学位論文審査委員会、学位審査並びに達成度審査の概要に関する説明会。
6	平成 29 年度	7 月 25 日	18 人	第 3 回外部評価委員会の講評と意見交換。
7		12 月 23 日	25 人	修了生と企業連携教員からの本プログラムの教育・運営に関する評価・意見の共有。
8	平成 30 年度	7 月 25 日	19 人	第 4 回外部評価委員会講評と意見交換。
9		12 月 8 日	10 人	企業連携会議での企業における人間情報学に意見交換。
10	令和元年度	5 月 20 日	10 人	第 5 回外部評価委員会の講評と意見交換。
11		9 月 30 日	25 人	サイエンスカフェと兼ね人間情報学に関する意見交換。

授業アンケート

本プログラムでは、全科目で授業アンケートを行った。FD/SD 部会が中心となって、授業評価アンケートを集計し、本プログラム運営委員会において報告し、アンケート結果を共有した。また、アンケートの自由記述にあったコメントを各教員にフィードバックして、次年度に向けての改善などの取り組みに役立ててもらうことにした。

(3) 外部評価

外部評価委員会

平成 27 年 5 月に、「エンパワーメント情報学プログラム外部評価実施要項」を制定した。これに基づき、プログラム点検・評価委員会のもとに外部評価部会を設置し、産業界・大学等の有識者を委員として委嘱し、平成 27 年度以降、年一回の外部評価を実施する体制を整え、第 5 回まで実施した。

令和元年度 エンパワーメント情報学プログラム 外部評価委員名簿

	氏名	役職
委員長	原島 博	東京大学 名誉教授
	岩野 和生	株式会社三菱ケミカルホールディングス チーフ・デジタル・オフィサー
	鈴木 教洋	株式会社日立製作所 研究開発グループ 執行役常務 CTO 兼 研究開発グループ長
	土井 美和子	国立研究開発法人情報通信研究機構 監事
	萩田 紀博	株式会社国際電気通信基礎技術研究所 ATR 知能ロボティクス研究所長

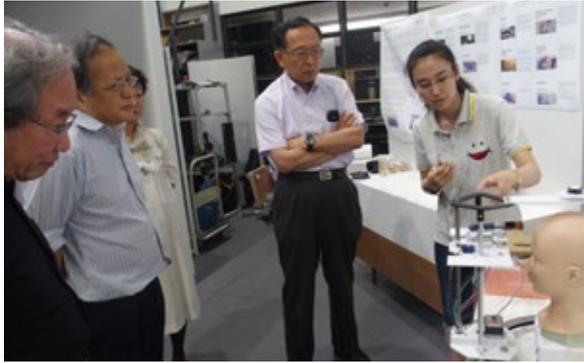
委員会では、プログラムリーダーから本プログラムの進捗状況の説明をした後、本プログラム履修生によるデモの見学、委員と履修生との意見交換を行った。最後に、外部評価委員から講評をいただき、本プログラム側担当者と意見交換を行った。この委員会は、本プログラムのFD研修会と同時に実施し、参加した本プログラム側担当者にとって、外部の有識者と直接話し合うことのできる有意義な機会となった。

年度ごとに、外部評価委員会より講評をまとめた報告書が提出され、その概要を本プログラムウェブサイトで公開するとともに、指摘箇所については運営・教育に生かした。

以下に、各年度開催された外部評価委員会の主な指摘事項を示す。

外部評価委員からの指摘事項

	開催日	主な指摘事項
第1回	平成27年 11月25日	<ul style="list-style-type: none"> ・いかなる哲学のもとに次世代リーダーを養成し、さらにはなぜそのような次世代リーダーを養成しようとしているのか明らかにすべきである。 ・「人間情報学」の切り口を理論的に掘り下げるとともに、新しい分野におけるどのようなグローバルリーダー像を養成しようとしているのか、議論が必要である。 ・研究成果を社会実装において、多様性を最重点にし、R&DよりもInnovationを重視すべきである。 ・優れたリーダーを養成するためには、学会だけでなく実社会に役立つ場を経験させるべきである。社会実証実験・社会導入実験をグローバルの視点で経験させる試みがあると良い。 ・達成度評価や自己審査が、学生の成長の多様性を狭めていないかどうか、学生の自由闊達な研究を阻害することがないか、十分に留意する必要がある。
第2回	平成28年 8月5日	<ul style="list-style-type: none"> ・いかなる哲学のもとに次世代リーダーを養成し、さらにはなぜそのような次世代リーダーを養成しようとしているのか明らかにすべきである。 ・「人間情報学」の切り口を理論的に掘り下げるとともに、新しい分野におけるどのようなグローバルリーダー像を養成しようとしているのか、議論が必要である。 ・達成度評価や自己審査が、学生の成長の多様性を狭めていないかどうか、学生の自由闊達な研究を阻害することがないか、十分に留意する必要がある。
第3回	平成29年 7月25日 7月27日	<ul style="list-style-type: none"> ・エンパワーメント情報学の本質を掘り下げ、人間情報学という新しい学問分野を確立して欲しい。 ・学生の自主的な活動が活発化しているが、さらに学生が、I am eager to doで推進し、Scale-Upや質の向上が生まれるように教員側がマネジメントすることが大事。 ・学生が提案しているテーマは、思いついたレベルで、社会的インパクトに乏しい。現場力を強化して、Uniqueなプロダクトと同様に、喫緊性が高く社会が求めているものを早く実現し、社会導入をできるようなエコシステムの構築の検討が必要。
第4回	平成30年 7月25日	<ul style="list-style-type: none"> ・エンパワーメント情報学の本質を掘り下げ、人間情報学という新しい学問分野を確立して欲しい。 ・学生の自主的な活動が活発化しているが、さらに学生が、I am eager to doで推進し、Scale-Upや質の向上が生まれるように教員側がマネジメントすることが大事。 ・学生が提案しているテーマは、思いついたレベルで、社会的インパクトに乏しい。現場力を強化して、Uniqueなプロダクトと同様に、喫緊性が高く社会が求めているものを早く実現し、社会導入をできるようなエコシステムの構築の検討が必要。
第5回	令和元年 5月20日	<ul style="list-style-type: none"> ・全てにわたって当初の計画を上回っている。 ・新しい学問分野である「人間情報学」について、単に、補完・協調・拡張という次元に留まらず、人間の尊厳を前提に、より多面的な人間学として発展することを期待したい。



外部評価委員会のデモ見学

(4) リーディングプログラム委員会によるフォローアップ

PO 現地訪問

博士課程リーディングプログラムでは、毎年、プログラムオフィサー（PO）が、現地訪問して本プログラムのフォローアップを実施していた。POは、平成25年度年から平成28年度までは斎藤ウィリアム浩幸先生、平成29年度から令和元年までは、熊田孝恒先生が担当された。

斎藤POからは、特に、アントレプレナーシップ教育の充実が必要であることを指摘され、その強化を図った。すなわち、アントレプレナー講師を外部委託し、ビジネスモデルを創出するための必須科目「コラボラトリー実習」を創設し、学生には、外部のビジネスモデルコンテストへの応募を積極的に推奨した。また、日本を代表する研究開発ベンチャーの起業支援機関 TX アントレプレナーパートナーズ（TEP）とMOUを締結し、アントレプレナーシップ教育の助言を得るとともに、起業志望の学生を対象にアドバンス起業家コースという授業を設置した。その結果、学生はビジネスモデルコンテストの上位入賞や、起業する学生が生まれている。

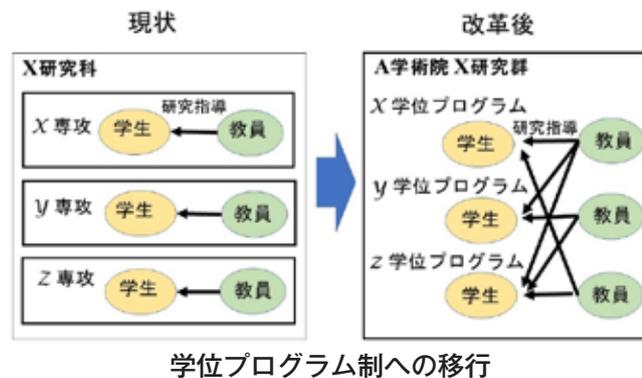
熊田POからは、特に「人間情報学への理解」を深めることが重要であることの指摘をうけ、教員とサイエンスカフェなどの開催による「人間学としての情報学の展開に向けた、教員間での意思統一、学生への周知に向けた取り組み」の強化を行った。また、や企業連携委員会等を通して、企業に側と「人間情報学」について意見交換し、その重要性、有用性の認識を共有した。これらについては、来年度以降も続けて「人間情報学への理解」をさらに深めていく。

3. 定着・発展のための取組状況

(1) プログラムの定着・発展の形態

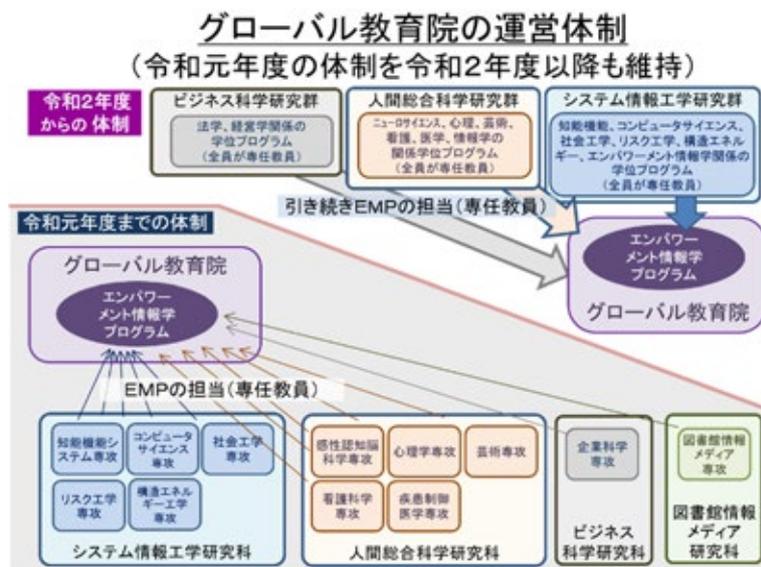
本学では、本プログラムの支援期間終了の翌年度にあたる令和2年度に全学的な大学院の改組を行い、すべての研究科・専攻を廃し、学校教育法100条ただし書の組織を設置した上で、学位プログラム制に移行する。

当初は大学院課程全体を一つの研究科(相当の組織)に再編し、全ての学位プログラムを並列に配置する構想であったが、法定上「教育組織は適正規模にする必要がある」ことから、構想の見直しを行った。その結果、分野の特性に応じた規模で複数の学位プログラムを束ねる組織として「研究群」を設置し、さらに研究群を束ねる「大学院」(研究科相当)を3つ設けることと



した。研究群は専攻相当であるため、同一研究群内の学位プログラムに対して全教員が専任教員となる。また、学位プログラム間の隣接性を考慮して研究群を編成しているため、各教員が研究指導(主指導)として複数の学位プログラムに参画できることになる。このことにより、研究・学問分野を横断/融合する教育の拡張・強化を実現することができる。

エンパワーメント情報学プログラムは、改組後には理工情報生命システム情報工学研究群に属し、募集人員8名の永続的な学位プログラム(学位プログラム名:エンパワーメント情報学プログラム)になる。本プログラムにおいては、現行のグローバル教育院体制を維持することにより、心理や芸術などの異なる研究群の専任教員であっても研究指導担当として本プログラムに参画できる体制を継続・持続させ、分野横断/融合型の教育研究の定着・発展を図る。また、申請時に設定した人材育成目標と3ポリシー(アドミッションポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシー)は、改組後も維持する。



大学院改組後のグローバル教育院の体制

(2) 財政面

改組後の令和2年度より、エンパワーメント情報学プログラムでは、学内措置により、学生が学修研究に専念できる以下の経済的支援を実施する。

1. 月額7万円の奨励金の支給
2. 授業料を全額免除
3. 教育研究活動費として、一人当たり年間20万円を支給

補遺

I. メンバー

1. 教員、委員等	79
(1) プログラム責任者	
(2) プログラムリーダー	
(3) プログラム担当教員	
(a) 学内研究指導教員	
(b) 学外研究指導教員	
(c) 学内授業担当教員	
(d) 専任教員	
(4) プログラム協力教員	
(a) 学内授業担当教員	
(b) 学外授業担当教員	
(c) 海外拠点教員	
(5) 外部評価委員	

2. 履修生	85
--------------	----

II. プログラムの成果

1. 学生の学会発表	87
(1) 口頭発表	
(2) ポスター・デモ発表	
(3) 論文発表	
2. 学生の外部からの評価	113
(1) 国内外のコンテスト	
(2) 学術賞	
(3) 招待展示・招待講演・その他	
(4) 学長表彰等受賞者	
3. 博士（人間情報学）学位授与者	122

I. メンバー

1. 教員、委員等

(1) プログラム責任者

氏名	所属	専門分野	期間
大田 友一	筑波大学副学長(企画評価・情報担当) [平成27年3月まで] 筑波大学特命教授 [平成27年4月から]	情報工学	平成28年3月まで
稲垣 敏之	筑波大学副学長(総務・人事担当) [平成27年4月から] システム情報系・教授 [平成29年3月まで]	人間機械共生系	平成28年4月から

(2) プログラムリーダー

氏名	所属	専門分野	期間
岩田 洋夫	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	バーチャルリアリティ	

(3) プログラム担当教員

(a) 学内研究指導教員

氏名	所属	専門分野	期間
大田 友一	筑波大学副学長(企画評価・情報担当) [平成27年3月まで] 筑波大学特命教授 [平成27年4月から]	情報工学	平成28年3月まで
稲垣 敏之	筑波大学副学長(総務・人事担当) [平成27年4月から] システム情報系・教授 [平成29年3月まで]	人間機械共生系	
岩田 洋夫	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	バーチャルリアリティ	
山海 嘉之	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	サイバニクス	
加藤 和彦	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・コンピュータサイエンス専攻	分散システム工学	
阿部 豊	筑波大学副学長(企画評価・学術情報担当) システム情報系・教授 システム情報工学研究科・構造エネルギー工学専攻	エネルギーシステム工学	
伊藤 誠	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・リスク工学専攻	認知システム安全工学	
大澤 義明	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・社会工学専攻	社会工学	
鬼沢 武久	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	ソフトコンピューティング・感性工学	平成29年3月まで
葛岡 英明	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	協調作業支援	平成31年3月まで
酒井 宏	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・コンピュータサイエンス専攻	計算神経科学・認知神経科学	
庄司 学	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・構造エネルギー工学専攻	ライフライン地震津波防災工学	
鈴木 健嗣	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	人工知能	
福井 和広	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・コンピュータサイエンス専攻	画像認識・機械学習	
水谷 孝一	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	医用電子工学・福祉機器・計測工学・超音波エレクトロニクス	
三谷 純	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・コンピュータサイエンス専攻	コンピュータグラフィックス	

氏名	所属	専門分野	期間
森田 昌彦	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	神経情報処理	
矢野 博明	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	バーチャルリアリティ	平成31年4月から
井澤 淳	システム情報系・准教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	身体性脳科学	
河本 浩明	システム情報系・准教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	生体制御システム	平成27年4月から
田中 文英	システム情報系・准教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	ソーシャルロボティクス・ヒューマンロボットインタラクション	
亀田 能成	計算科学研究センター・教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	知能情報学・複合現実	
北川 博之	計算科学研究センター・教授 システム情報工学研究科・コンピュータサイエンス専攻	データ工学	平成27年4月から
北原 格	計算科学研究センター・教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	コンピュータビジョン	平成29年4月から
猿渡 康文	ビジネスサイエンス系・教授 ビジネス科学研究科・経営システム科学専攻、企業科学専攻	オペレーションズ・リサーチ	
西尾 チヅル	ビジネスサイエンス系・教授 ビジネス科学研究科・経営システム科学専攻、企業科学専攻	マーケティングマネジメント	
弥永 真生	ビジネスサイエンス系・教授 ビジネス科学研究科・企業法学専攻、企業科学専攻	法律学	
吉武 博通	ビジネスサイエンス系・教授 ビジネス科学研究科・経営システム科学専攻	経営管理	平成29年3月まで
綾部 早穂	人間系・教授 人間総合科学研究科・心理専攻、心理学専攻	感覚知覚心理学	
小川 園子	人間系・教授 人間総合科学研究科・感性認知脳科学専攻	行動神経科学	
原田 悦子	人間系・教授 人間総合科学研究科・心理専攻、心理学専攻	認知心理学・認知工学・認知科学	
山中 敏正	芸術系・教授 人間総合科学研究科・感性認知脳科学専攻	感性情報学・デザイン学	
田中 佐代子	芸術系・教授 人間総合科学研究科・芸術専攻	サイエンスビジュアルゼーション学	
大河内 信弘	医学医療系・客員教授	消化器外科学	
日高 紀久江	医学医療系・教授 人間総合科学研究科・看護科学専攻	リハビリテーション看護学	
江口 清	医学医療系・准教授 人間総合科学研究科・疾患制御医学専攻	リハビリテーション医学	平成27年3月まで
山崎 正志	医学医療系・教授 人間総合科学研究科・フロンティア医科学、疾患制御医学専攻	整形外科	
森嶋 厚行	図書館情報メディア系・教授 図書館情報メディア研究科・図書館情報メディア専攻	クラウドソーシング・データ工学・データベースシステム	平成27年4月から
赤松 幹之	筑波大学・教授（連携大学院） 国立研究開発法人産業技術総合研究所・首席研究員	人間行動計測	平成28年3月まで
清水 一彦	筑波大学副学長（学生担当）	教育制度学	平成27年3月まで
松村 明	筑波大学副学長（医療担当）[平成30年3月まで] 医学医療系・教授	脳神経外科学	

(b) 学外研究指導教員

氏名	所属	専門分野	期間
大田 友一	筑波大学名誉教授	情報工学	平成 28 年 4 月から
清水 一彦	筑波大学名誉教授	教育制度学	平成 27 年 4 月から
井野 秀一	筑波大学・教授（連携大学院） 国立研究開発法人産業技術総合研究所・副研究部門長	福祉工学	
赤松 幹之	筑波大学・教授（グローバル教育院） 国立研究開発法人産業技術総合研究所自動車ヒューマンファクター研究センター・特命上席研究員	人間行動計測	平成 28 年 4 月から
葛岡 英明	システム情報系・客員教授 東京大学大学院 情報理工学系研究科知能機械情報学専攻・教授	協調作業支援	平成 31 年 4 月から

(c) 学内授業担当教員

氏名	所属	専門分野	期間
BENTON Caroline Fern	筑波大学副学長（国際担当） ビジネスサイエンス系・教授	グローバルリーダーシップ	
逢坂 卓郎	筑波大学特命教授（元芸術系）	宇宙芸術	
村上 史明	芸術系・助教 人間総合科学研究科・芸術専攻	メディア芸術	
濱川 佳弘	グローバル教育院・教授	産学連携・キャリア教育	平成 27 年 4 月から
圓崎 祐貴	システム情報系・助教 グローバル教育院エンパワーメント情報学プログラム	バーチャルリアリティ	平成 27 年 4 月から
大槻 麻衣	システム情報系・助教 グローバル教育院エンパワーメント情報学プログラム	複合現実感・3DUI	平成 26 年 4 月から 平成 31 年 3 月まで
富田 瑛智	システム情報系・助教 グローバル教育院エンパワーメント情報学プログラム	認知心理学	平成 27 年 4 月から 平成 29 年 3 月まで
廣川 暢一	システム情報系・助教 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	人-機械相互作用	平成 26 年 4 月から
山田 亜紀	システム情報系・助教 グローバル教育院エンパワーメント情報学プログラム	国際教育学・異文化間教育	平成 27 年 4 月から 平成 31 年 3 月まで
井上 和哉	システム情報系・助教 グローバル教育院エンパワーメント情報学プログラム	実験心理学	平成 29 年 4 月から 平成 31 年 3 月まで
山口 友之	システム情報系・助教 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	計測情報工学	平成 31 年 4 月から
松田 壮一郎	人間系・助教 人間総合科学研究科・心理専攻、心理学専攻	応用行動分析学	平成 30 年 4 月から

(d) 専任教員

氏名	所属	専門分野	任用期間
井澤 淳	システム情報系・准教授	身体性脳科学	平成 26 年度～平成 30 年度
大槻 麻衣	システム情報系・助教	複合現実感・3DUI	平成 26 年度～平成 30 年度
廣川 暢一	システム情報系・助教	人-機械相互作用	平成 26 年度～平成 29 年度
濱川 佳弘	グローバル教育院・教授	産学連携・キャリア教育	平成 27 年度～
富田 瑛智	システム情報系・助教	認知心理学	平成 27 年度～平成 28 年度
圓崎 祐貴	システム情報系・助教	バーチャルリアリティ	平成 27 年度～
山田 亜紀	システム情報系・助教	国際教育学・異文化間教育	平成 27 年度～平成 30 年度
井上 和哉	人間系・准教授	実験心理学	平成 29 年度～平成 30 年度
松田 壮一郎	人間系・助教	応用行動分析学	平成 30 年度

(4) プログラム協力教員

(a) 学内授業担当教員

氏名	所属	専門分野	期間
宇津呂 武仁	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	知能情報学・自然言語処理	平成 31 年 4 月から
望山 洋	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	ロボティクス・ハプティクス	
阿部 洋丈	システム情報系・准教授 システム情報工学研究科・コンピュータサイエンス専攻	システムソフトウェア	平成 27 年 4 月から
川村 洋平	システム情報系・准教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	災害情報学	平成 27 年 4 月から 平成 28 年 3 月まで
海老原 格	システム情報系・准教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	情報通信工学	
岡 瑞起	システム情報系・准教授 システム情報工学研究科・コンピュータサイエンス専攻	ウェブサイエンス・人工生命	平成 29 年 4 月から
掛谷 英紀	システム情報系・准教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	3次元画像工学・メディア工学	平成 27 年 4 月から
金森 由博	システム情報系・准教授 システム情報工学研究科・コンピュータサイエンス専攻	コンピュータグラフィックス	平成 28 年 4 月から
川崎 真弘	システム情報系・准教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	認知脳科学・認知心理学	平成 31 年 4 月から
星野 准一	システム情報系・准教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	エンタテインメントコンピューティング	平成 27 年 4 月から
矢野 博明	システム情報系・教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	バーチャルリアリティ	平成 31 年 3 月まで
若槻 尚斗	システム情報系・准教授 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	応用音響工学	平成 27 年 4 月から
大澤 博隆	システム情報系・助教 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	ヒューマンエージェントインタラクション	平成 27 年 4 月から
澁谷 長史	システム情報系・助教 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	機械学習	平成 31 年 4 月から
善甫 啓一	システム情報系・助教 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	アレー信号処理・サービスシステム	
橋本 悠希	システム情報系・助教 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	触覚インタフェース	
PUNTES Sandra M.	システム情報系・助教 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	神経生理学	
前田 祐佳	システム情報系・助教 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	生体計測	
山口 友之	システム情報系・助教 システム情報工学研究科・知能機能システム専攻	計測情報工学	平成 31 年 3 月まで
五十嵐 浩也	芸術系・教授 人間総合科学研究科・芸術専攻	工業デザイン、感性デザイン、デザイン論	平成 29 年 4 月から
大淵 真喜子	ビジネスサイエンス系・教授 ビジネス科学研究科・企業法学専攻	民事訴訟法	
大野 雅人	ビジネスサイエンス系・教授 ビジネス科学研究科・企業法学専攻	租税法	平成 31 年 3 月まで
岡本 裕樹	ビジネスサイエンス系・教授 ビジネス科学研究科・企業法学専攻	民法	
川田 琢之	ビジネスサイエンス系・教授 ビジネス科学研究科・企業法学専攻	労働法、公務員法	

氏名	所属	専門分野	期間
潮海 久雄	ビジネスサイエンス系・教授 ビジネス科学研究科・企業法学専攻	知的財産法	
立本 博文	ビジネスサイエンス系・教授 ビジネス科学研究科・経営システム科学専攻	経営戦略論	
平嶋 竜太	ビジネスサイエンス系・教授 ビジネス科学研究科・企業法学専攻	知的財産法	
本田 光宏	ビジネスサイエンス系・教授 ビジネス科学研究科・企業法学専攻	租税法	
山田 務	ビジネスサイエンス系・教授 ビジネス科学研究科・企業法学専攻	競争法	平成 31 年 3 月まで
木村 真生子	ビジネスサイエンス系・教授 ビジネス科学研究科・企業法学専攻	法律学	
小林 和子	ビジネスサイエンス系・准教授 ビジネス科学研究科・企業法学専攻	民法	
藤澤 尚江	ビジネスサイエンス系・准教授 ビジネス科学研究科・企業法学専攻	国際私法・国際金融法	
MASWANA Jean-Claude	ビジネスサイエンス系・准教授 ビジネス科学研究科・国際経営プロフェッショナル専攻	開発経済・新興市場ビジネス	平成 31 年 3 月まで
渡邊 絹子	ビジネスサイエンス系・准教授 ビジネス科学研究科・企業法学専攻	社会保障法、労働法	
鶴嶋 英夫	医学医療系・准教授 人間総合科学研究科・フロンティア医科学専攻・疾患制御医学専攻	脳神経外科学	平成 27 年 4 月から
羽田 康司	医学医療系・教授 人間総合科学研究科・疾患制御医学専攻	リハビリテーション医学・臨床神経生理学	平成 27 年 4 月から
松本 正幸	医学医療系・教授 人間総合科学研究科・感性認知脳科学専攻	神経科学	平成 30 年 4 月から
遠藤 結城	システム情報系・助教 システム情報工学研究科・コンピュータサイエンス専攻	コンピュータグラフィックス	平成 31 年 3 月まで
辻 泰明	図書館情報メディア系・教授 図書館情報メディア研究科・図書館情報メディア専攻	映像メディア論	平成 31 年 4 月から
山本 哲哉	医学医療系・准教授 人間総合科学研究科・疾患制御医学専攻	脳神経外科学	平成 28 年 4 月から 平成 30 年 3 月まで

(b) 学外授業担当教員

氏名	所属	専門分野	期間
長谷川 泰久	名古屋大学 大学院工学研究科マイクロ・ナノシステム工学専攻・教授 筑波大学・客員教員	ロボット工学	
吉武 博通	首都大学東京 理事・学長特任補佐・大学教育センター教授	経営管理	平成 29 年 4 月から 平成 31 年 3 月まで
水上 昌文	茨城県立医療大学副学長 大学院保健医療科学研究科・保健医療科学専攻・教授 筑波大学・客員教員	脊髄損傷理学療法・リハビリテーション学	
斉藤 秀之	公益社団法人日本理学療法士協会・副会長 筑波大学・客員教員	リハビリテーション医学	
野村 淳二	パナソニック株式会社・顧問 IEC（国際電気標準会議）前会長 筑波大学・客員教員	電気・電子技術及び関連技術	平成 31 年 3 月まで
高江 康彦	日産自動車株式会社 電子技術・システム技術開発本部 AD/ADAS 先行技術開発部 HMI 開発グループ・チームリーダー 筑波大学・客員教員	自動車工学	

氏名	所属	専門分野	期間
影広 達彦	株式会社日立製作所 研究開発グループ デジタルテクノロジーイノベーションセンター・メディア知能処理研究部長 筑波大学・客員教員	画像処理認識技術研究 開発戦略	
塚田 正人	日本電気株式会社 バイオメトリックス研究所・主幹研究員 筑波大学・客員教員	画像工学・色彩工学	
高野 ルリ子	株式会社資生堂 社会価値創造本部アート&ヘリテージ室・マネージャー 筑波大学・客員教員	認知心理学	
平賀 瑠美	筑波技術大学 産業技術学部・教授 筑波大学・客員教員	音楽情報科学	平成 31 年 4 月から

(c) 海外拠点教員

氏名	所属	専門分野	期間
BOER Erwin R.	米 Entropy Control, Inc.・代表取締役社長	ガイダンスコントロール	
VANDERHAEGEN Frederic	仏ヴァレンシエンヌ大学 自動機械・人間系研究室・教授	ヒューマンコンピュータ インタラクション	
ABBINK David	蘭デルフト工科大学 機械系専攻・助教授	ハプティックインタ フェース	
VIJAYAKUMAR Sethu	英エディンバラ大学 情報学研究所・教授・知覚行動動作研究部長	ロボット工学・統計的 機械学習	
VESNA Victoria	米カリフォルニア大学ロサンゼルス校 デザイン・メディアアート・教授・Art Sci Center 所長	デザイン学・メディア アート	
HUMMELS Caroline	蘭アイントホーヘン工科大学 インダストリアルデザイン学・教授	デザイン理論・インダス トリアルデザイン工学	
STOCKER Gerfried	奥 Ars Electronica Linz GmbH, Artistic Director	メディアアート	
SCHWEIGHOFER Nicolas Pierre Claude	米南カリフォルニア大学・准教授	計算論的ニューロリハ ビリテーション	平成 28 年 4 月から
PATRIKALAKIS Nicholas Marinos	米マサチューセッツ工科大学 SMART センター・教授	ロボット工学・コンピュ ータグラフィックス・海洋 工学・船舶・情報工学・ 観測論・制御	平成 29 年 4 月から
SOMMERER Christa	奥リンツ芸術大学・教授	メディアアート	平成 29 年 4 月から

(5) 外部評価委員

令和元年度 エンパワーメント情報学プログラム 外部評価委員名簿

	氏名	役職
委員長	原島 博	東京大学 名誉教授
	岩野 和生	株式会社三菱ケミカルホールディングス チーフ・デジタル・オフィサー
	鈴木 教洋	株式会社日立製作所 研究開発グループ 執行役常務 CTO 兼 研究開発グループ長
	土井 美和子	国立研究開発法人情報通信研究機構 監事
	萩田 紀博	株式会社国際電気通信基礎技術研究所 ATR 知能ロボティクス研究所長

2. 履修生

エンパワーメント情報学プログラム 履修生一覧

第1期生

学生氏名	指導教員	備考	出身地
小木曾 里樹	システム情報系・教授 水谷 孝一		【非公開】
佐藤 綱祐	システム情報系・教授 岩田 洋夫		
高鳥 光	システム情報系・教授 岩田 洋夫		
利根 忠幸	システム情報系・教授 鈴木 健嗣		
西田 惇	システム情報系・教授 鈴木 健嗣		
野郷 孝介	システム情報系・教授 水谷 孝一		
江國 翔太	システム情報系・教授 山海 嘉之	3年次編入学	
村田 耕一	システム情報系・教授 山海 嘉之	3年次編入学	
若生 遼	人間系・教授 綾部 早穂	3年次編入学	
潘 雅冬	システム情報系・教授 鈴木 健嗣	3年次編入学	

第2期生

学生氏名	指導教員	備考	出身地
朝倉 靖成	システム情報系・教授 山海 嘉之		【非公開】
糸井川 椋	システム情報系・教授 水谷 孝一		
大図 岳	システム情報系・教授 岩田 洋夫		
佐藤 晃矢	システム情報系・教授 加藤 和彦		
佐野 祐士	システム情報系・教授 水谷 孝一		
敷根 伸光	人間系・教授 山中 敏正		
平井 由季乃	システム情報系・教授 水谷 孝一		
ISHAC Karlos	システム情報系・教授 鈴木 健嗣		
白石 僚一郎	システム情報系・教授 山海 嘉之	3年次編入学	
丹野 智博	システム情報系・教授 森田 昌彦	3年次編入学	
倉本 尚美	人間系・教授 日高 紀久江	3年次編入学	
ERICH Floris Marc Arden	システム情報系・教授 鈴木 健嗣	3年次編入学	
CHACIN Aisen Carolina	システム情報系・教授 岩田 洋夫	3年次編入学	

学生氏名	指導教員	備考	出身地
PERUSQUÌA HERNÁNDEZ Monica	システム情報系・教授 鈴木 健嗣	3年次編入学	【非公開】
JAZBEC Maša	システム情報系・教授 岩田 洋夫	3年次編入学	

第3期生

学生氏名	指導教員	備考	出身地
高嶋 倫太郎	システム情報系・教授 山海 嘉之		【非公開】
佐々木 海	システム情報系・教授 鈴木 健嗣	2年次移籍	
加納 青李	システム情報系・教授 山海 嘉之	3年次編入学	
BRUMLEY John	システム情報系・教授 岩田 洋夫	3年次編入学	
BOEM Alberto	システム情報系・教授 岩田 洋夫	3年次編入学	
LOBO Joana Polónia Coelho de Azeredo	システム情報系・教授 鈴木 健嗣	3年次編入学	

第4期生

学生氏名	指導教員	備考	出身地
杉本 実夏	システム情報系・教授 岩田 洋夫		【非公開】
杉山 太成	システム情報系・教授 井澤 淳		
小崎 湧太	システム情報系・教授 鈴木 健嗣	3年次編入学	
XIE Chun	計算科学研究センター・教授 北原 格	3年次編入学	
TAN Chun Kwang	システム情報系・教授 鈴木 健嗣	3年次編入学	
DOLLACK Felix	システム情報系・教授 鈴木 健嗣	3年次編入学	

第5期生

学生氏名	指導教員	備考	出身地
今堀 仁誠	システム情報系・教授 山海 嘉之		【非公開】
桑原 隆志	システム情報系・教授 山海 嘉之		
小岩 慎太郎	システム情報系・教授 岩田 洋夫		
酒井 友裕	システム情報系・客員教授 葛岡 英明		
進藤 裕太	システム情報系・教授 鈴木 健嗣		
西村 勇輝	システム情報系・教授 鈴木 健嗣		
平岩 匡	システム情報系・教授 岩田 洋夫		
本間 由樹子	システム情報系・教授 鈴木 健嗣		

学生氏名	指導教員	備考	出身地
CHEN Yang	システム情報系・教授 鈴木 健嗣		【非公開】
REBELO DAL'BELLO Lucas	システム情報系・教授 井澤 淳		
石切山 順一	システム情報系・教授 鈴木 健嗣	3年次編入学	
ROJAS FERRER Cesar Daniel	計算科学研究センター・教授 亀田 能成	3年次編入学	
KIM SunKyoung	システム情報系・教授 鈴木 健嗣	3年次編入学	
Vera Paola Reyes 正田	システム情報系・教授 山中 敏正	3年次編入学	
ZHONG Ying	図書館情報メディア系・教授 森嶋 厚行	3年次編入学	

第6期生

学生氏名	指導教員	備考	出身地
秋元 優希	システム情報系・教授 鈴木 健嗣		【非公開】
市川 倅介	システム情報系・教授 鈴木 健嗣		
檜原 輝	システム情報系・教授 鈴木 健嗣		
澤田 翔太	システム情報系・教授 鈴木 健嗣		
高山 周太郎	計算科学研究センター・教授 亀田 能成		
KENNARD Maxwell West	システム情報系・教授 鈴木 健嗣		
WU Yihao	システム情報系・准教授 井澤 淳		
ZHANG Haihan	計算科学研究センター・教授 北原 格		
坂村 祐希	計算科学研究センター・教授 北原 格	3年次編入学	
YANG Chi-Lan	システム情報系・客員教授 葛岡 英明	3年次編入学	

II. プログラムの成果

1. 学生の学会発表

(1) 口頭発表

平成26年度

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
1	利根 忠幸	台湾	英語	有	Tadayuki Tone, Francesco Visentin, Kenji Suzuki, "Sheet Type Soft Robot with Magnetic Fluid for Object Transportation", 2014 IEEE International Conference on Automation Science and Engineering, Taipei, Taiwan, Aug. 18-22, 2014	2014年8月
2	村田 耕一	アメリカ	英語	有	Koichi Murata, Akira Matsushita, Kousaku Saotome, Hiroaki Kawamoto, Yoshiyuki Sankai, "Development of an MR-compatible Configurable Brush Stimulation Device", The 36th Annual International Conference of the IEEE EMBS, Chicago, USA, Aug. 26-30, 2014	2014年8月

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
3	西田 惇 高鳥 光 佐藤 綱祐	名古屋	日本語	有	西田 惇, 高鳥 光, 佐藤 綱祐, "身体性変換スーツ チャイルドフード", 第19回日本バーチャルリアリティ学会大会, 名古屋大学, Sep. 17-19, 2014	2014年9月
4	小木曾 里樹	留寿都	日本語	無	小木曾 里樹, 水谷 孝一, 善甫 啓一, 若槻 尚斗, "骨導音の伝搬速度および脳脊髄液への入射の簡易頭部モデルを用いる計測", LIFE2014 (生活生命支援医療福祉工学系学会連合大会 2014), ルスツリゾート, Sep. 24-26, 2014	2014年9月
5	小木曾 里樹	千葉	英語	有	Satoki Ogiso, Koichi Mizutani, Keiichi Zempo, and Naoto Wakatsuki, "Analysis of sound propagation in human head for bone-conduction headphones using finite element method," The 3rd IEEE Global Conference on Consumer Electronics, Chiba, Japan, Oct 7-10, 2014	2014年10月
6	江國 翔太	東京	英語	有	Shota Ekuni, Yoshiyuki Sankai, "Non-Invasive Measurement Method of Blood Hematocrit for Management of Extracorporeal Circulation", 2014 IEEE/SICE International Symposium on System Integration, Tokyo, Japan, Dec. 13-15 2014	2014年12月

平成 27 年度 (口頭発表)

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
7	西田 惇 高鳥 光 佐藤 綱祐	フランス	英語	有	Jun Nishida, Hikaru Takatori, Kosuke Sato and Kenji Suzuki, "CHILDHOOD: Wearable Suit for Augmented Child Experience", Virtual Reality International Conference, Laval, France, Apr. 8-12, 2015	2015年4月
8	佐藤 晃矢	函館	日本語	無	佐藤 晃矢, 岡 瑞起, 橋本 康弘, 加藤 和彦, "Yule-Simon 過程によるタグ共起ダイナミクスのモデル化と分析," 2015年度人工知能学会全国大会, 公立はこだて未来大学, May 30 - Jun. 2, 2015	2015年5月
9	佐藤 晃矢	函館	日本語	無	橋本 康弘, 佐藤 晃矢, 岡 瑞起, "Zipf's Law and Heaps' Law in Social Tagging," 2015年度人工知能学会全国大会, 公立はこだて未来大学, May 30 - Jun. 2, 2015	2015年5月
10	小木曾 里樹	イタリア	英語	有	Satoki Ogiso, Takuji Kawagishi, Koichi Mizutani, Naoto Wakatsuki, and Keiichi Zempo: "Relation between sound sources layout and error of self-localization method in two-dimension for mobile robot using microphone array," The 22th International Congress on Sound & Vibration (ICSV22), Florence, Italy, Jul. 12-16, 2015	2015年7月
11	西田 惇 高鳥 光 佐藤 綱祐	アメリカ	英語	有	Jun Nishida, Hikaru Takatori, Kosuke Sato and Kenji Suzuki, "CHILDHOOD: Wearable Suit for Augmented Child Experience", SIGGRAPH 2015 Emerging Technologies, Los Angeles, USA, Aug. 9-13, 2015	2015年8月
12	利根 忠幸	スウェーデン	英語	有	Tone Tadayuki and Kenji Suzuki: "Deforming Control for Object Transportation with Ferrofluid-Based Sheet-Type Soft Robot," 2015 IEEE International Conference on Automation Science and Engineering, Gothenberg, Sweden, Aug. 24-28, 2015	2015年8月
13	潘 雅冬	神戸	英語	有	Yadong Pan, Masakazu Hirokawa, and Kenji Suzuki: "Measuring K-degree Facial Interaction between Robot and Children with Autism Spectrum Disorders", The 24th IEEE International Symposium on Robot and Human Interactive Communication, Kobe, Japan, Aug. 31 - Sep. 4, 2015	2015年9月
14	佐野 祐士	福岡	日本語	無	佐野 祐士, 水谷 孝一, 善甫 啓一, 若槻 尚斗, 小笠原 英子: "サーモグラフィを用いる着衣下における体表面温度推定", LIFE2015 (生活生命支援医療福祉工学系学会連合大会 2015), 九州工業大学, Sep. 7-9, 2015	2015年9月
15	西田 惇	東京	日本語	無	西田 惇, 鈴木 健嗣: "生体電位計測に基づく筋刺激を用いた装着型運動覚共有デバイス," 第20回日本バーチャルリアリティ学会大会, 芝浦工業大学, Sep. 9-11, 2015	2015年9月
16	西田 惇	東京	日本語	無	吉本 俊輔, 稲見 昌彦, 安藤 英由樹, 橋本 悠希, 松尾 佳菜子, 西田 惇, "IVRC 国際学生対抗バーチャルリアリティコンテスト", 第20回日本バーチャルリアリティ学会大会, 芝浦工業大学, Sep. 9 - 11, 2015	2015年9月

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
17	西田 惇 高鳥 光 佐藤 綱祐	東京	日本語	無	西田 惇, 高鳥 光, 佐藤 綱祐: "装着型カメラと外骨格機構による小児の身体性再現とその応用," 第74回次世代センサセミナーシリーズ イメージ・センシングシリーズ No.2, 中央大学, Oct.6, 2015	2015年10月
18	小木曾 里樹	東京	日本語	有	川岸 卓司, 小木曾 里樹, 水谷 孝一, 善甫 啓一, 若槻 尚斗: "立体構成マイクロフォンアレイを用いる UAV 飛行音の位置推定," 第40回土木情報学シンポジウム, 土木学会, Oct. 9, 2015	2015年10月
19	若生 遼	大阪	英語	有	Ryo Wako and Saho Ayabe-Kanamura: "Position of the Ego-center in the Perception of Peri-Personal Space Using Haptics," The 4rd IEEE Global Conference on Consumer Electronics, Osaka, Japan, Oct 27-30, 2015	2015年10月
20	敷根 伸光	オーストラリア	英語	有	Nobumitsu Shikine, Toshimasa Yamanaka, and Junichi Hoshino: "The Pedagogical Agent in Learning Mathematics for Undergraduate Students," IASDR 2015, Brisbane, Australia, Nov. 2-5, 2015	2015年11月
21	西田 惇 高鳥 光 佐藤 綱祐	神戸	英語	有	Akihiko Shirai, Jun Nishida, Takahiro Sato, Kosuke Sato, Hikaru Takatori and Susumu Tachi: "Innovation in the age of virtual reality through organizing international student competition," SIGGRAPH ASIA 2015 Symposium on Education, Kobe, Japan, Nov. 2-5, 2015	2015年11月
22	JAZBEC Maša	中国	英語	有	Jazbec Maša, "Art as expanded thought of its infinitive potential," Consciousness Reframed 2015, Shanghai, China, Nov. 20-22, 2015	2015年11月
23	佐藤 綱祐	つくば	日本語	有	上林 功, 佐藤 綱祐, 小野田 圭祐: "インホイールモーターによる小型モーターデバイスを使った新スポーツの開発について," 第1回超人スポーツ学術研究会, 筑波大学, Dec. 10, 2015	2015年12月
24	村田 耕一	中国	英語	有	Koichi Murata, Akira Matsushita, Kousaku Saotome, Hiroaki Kawamoto, and Yoshiyuki Sankai: "MR-compatible Stimulation Device Capable of Providing Passive and Active Finger Movements," 2015 IEEE Conference on Robotics and Biomimetics, Zhuhai, China, Dec. 6-9, 2015	2015年12月
25	利根 忠幸	広島	日本語	無	利根 忠幸, 鈴木 健嗣, "磁性流体の界面変形の制御により動作するシート型ソフトロボット," 第28回自律分散システム・シンポジウム, 広島大学, Jan. 21 - 22, 2016	2016年1月
26	糸井川 椋	東京	日本語	無	糸井川 椋, "額部脈派を用いた起立時脈拍変動モニタリングに関する研究," 第25回ライフサポート学会フロンティア講演会, 東京工科大学, Mar. 8-9, 2016	2016年3月
27	佐藤 晃矢	仙台	日本語	無	佐藤 晃矢, 岡 瑞起, 橋本 康弘, 池上 高志, "ソーシャルネットワークサービスのダイナミクスにみる, ゆらぎ, 応答, 進化," 日本物理学会第71回年次大会, 東北学院大学, Mar. 19 - 22, 2016	2016年3月

平成28年度(口頭発表)

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
28	JAZBEC Maša, ERICH Floris	アメリカ	英語	有	Jazbec Maša and Floris Erich, "Investigating Human Identity Using the idMirror Interactive Installation," The 2016 CHI Conference on Human Factors in Computing Systems, San Jose, CA, U.S.A., May 7-12, 2016.	2016年5月
29	西田 惇	アメリカ	英語	有	Jun Nishida and Kenji Suzuki, "Wearable Devices for Augmenting Embodied and Social Experience," ACM SIGCHI Japanese HCI Symposium: Emerging Japanese HCI Research Collection, Santa Jose, U.S.A., May 7-12, 2016.	2016年5月
30	佐藤 晃矢	福岡	日本語	無	佐藤 晃矢, 岡 瑞起, 橋本 康弘, 池上 高志, 加藤 和彦: "新しいタグの出現とソーシャルタギングシステム," 2016年度人工知能学会, 北九州国際会議場, Jun. 6-9, 2016.	2016年6月
31	村田 耕一 江國 翔太 朝倉 靖成	アメリカ	英語	無	Koichi Murata, Shota Ekuni, Yasunari Asakura and Akira Uehara, "Bionic Scope: Wearable System for Visual Extension Triggered by Bioelectrical Signal," ACM SIGGRAPH 2016, Anaheim, U.S.A., Jul. 24-28, 2016.	2016年7月

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
32	倉本 尚美	アメリカ	英語	有	Naomi Kuramoto, Dushyantha Jayatilake, Kikue Hidaka and Kenji Suzuki, "Smartphone-Based Swallowing Monitoring and Feedback Device for Mealtime Assistance in Nursing Homes," 38th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society, Orland, FL, U.S.A., Aug. 16-18, 2016.	2016年8月
33	佐々木 海	アメリカ	英語	有	Kai Sasaki, Yosuke Eguchi and Kenji Suzuki, "A Wheelchair with Lever Propulsion Control for Climbing up and down Stairs," 2016 38th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society, Orland FL, U.S.A., Aug. 17-20, 2016.	2016年8月
34	朝倉 靖成	ハンガリー	英語	有	Yasunari Asakura and Yoshiyuki Sankai, "Development of Non-restraint Blood Pressure Measurement Method Utilizing PWV," The 4th International Conference on Biological and Medical Sciences, Budapest, Hungary, Aug. 19-21, 2016.	2016年8月
35	糸井川 椋	仙台	日本語	無	糸井川 椋, 前田 祐佳, 水谷 孝一, 若槻 尚斗: "高齢者リハビリ時のスクリーニングに向けた起立時脈拍変動モニタリングに関する研究," 生活生命支援医療福祉工学系連合大会 2016, 東北大学青葉山キャンパス, Sep. 4-6, 2016.	2016年9月
36	佐々木 海	仙台	日本語	無	佐々木 海, 鈴木 健嗣: "上体運動により階段昇降を実現する車椅子型移動支援機器の開発," 第32回ライフサポート学会大会・第16回日本生活支援工学会大会, 東北大学青葉山キャンパス, Sep. 4-6, 2016.	2016年9月
37	佐藤 晃矢	金沢	日本語	無	佐藤 晃矢, 岡 瑞起, 橋本 康弘, 池上 高志: "ソーシャルタギングデータを用いた語彙の広がり方に関する研究," 日本物理学会第71回年次大会, 金沢大学角間キャンパス, Sep. 13-16, 2016.	2016年9月
38	白石 僚一郎	つくば	英語	有	Ryoichiro Shiraishi, Hiroaki Kawamoto and Yoshiyuki Sankai, "Training System Using Ground Reaction Force of the Affected Leg," Society of Instrument and Control Engineers Annual Conference 2016, Tsukuba, Japan, Sep. 20-23, 2016.	2016年9月
39	加納 青李	つくば	英語	有	Shori Kano and Yoshiyuki Sankai, "Wearable Motion Monitoring System for Evaluating Burden of Nursing Care," The Society of Instrument and Control Engineers Annual Conference 2016, Tsukuba, Japan, Sep. 20-23, 2016.	2016年9月
40	倉本 尚美	新潟	日本語	有	倉本 尚美, Dushyantha Jayatilake, 日高 紀久江, 鈴木健嗣: "頸部装着型嚥下モニターによる嚥下音計測に基づく嚥下時間と飲み込みやすさの関係性," 第22回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会, 新潟コンベンションセンター, Sep. 23-24, 2016.	2016年9月
41	敷根 伸光	オーストリア	英語	有	Nobumitsu Shikine, Yuki Hayashi, Takeshi Akiba and Junichi Hoshino, "Game System of Coordination Skills Training for Elderly People," The15th International Conference on Entertainment Computing 2016, Vienna, Austria, Sep. 28-30, 2016.	2016年9月
42	小木曾 里樹	スペイン	英語	有	Satoki Ogiso, Takuji Kawagishi, Koichi Mizutani, Naoto Wakatsuki and Keiichi Zempo, "Effect of Parameters of Phase0modulated Sequence Signal on Direction-of-Arrival and Localization error," 7th International Conference on Indoor Positioning and Indoor Navigation, Madrid, Spain, Oct. 4-7, 2016.	2016年10月
43	佐野 祐士	京都	英語	有	Yuji Sano, Koichi Mizutani, Keiichi Zempo and Naoto Wakatsuki, "Lung Volume Estimation for Thoracic Respiration Via Chest Size Deviation Measurement," 2016 IEEE 5th Global Conference on Consumer Electronics, Kyoto, Japan, Oct. 11-14, 2016.	2016年10月
44	糸井川 椋	京都	英語	有	Ryo Itoigawa, Yuka Maeda, Koichi Mizutani and Naoto Wakatsuki, "Evaluation of Measurement Site for Monitoring Orthostatic Pulse Rate Change," 2016 IEEE 5th Global Conference on Consumer Electronics, Kyoto, Japan, Oct. 11-14, 2016.	2016年10月
45	丹野 智博	京都	英語	有	Kazumasa Horie, Atsuo Suemitsu, Tomohiro Tanno and Masahiko Morita, "Direct Estimation of Wrist Joint Angular Velocities from Surface EMGs by Using an SDNN Function Approximator," The 23 International Conference on Neural Information Processing, Kyoto, Japan, Oct. 16-21, 2016.	2016年10月

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
46	佐藤 綱祐	札幌	日本語	無	佐藤 綱祐, 矢野 博明, 岩田 洋夫: "バレーボールにおけるアタックトレーニングシステムの開発," 第2回超人スポーツ学術研究会, 北海道大学, Dec. 18, 2016.	2016年12月
47	佐藤 綱祐	札幌	日本語	無	上林 功, 佐藤 綱祐, 小野田 圭祐, 片桐 祥太: "新スポーツ開発を通じたメイカーズコミュニティの形成について~超人スポーツ「CarryOtto< キャリオット >」~, " 第2回超人スポーツ学術研究会, 北海道大学, Dec. 18, 2016.	2016年12月
48	西田 惇	つくば	日本語	招待	西田 惇, 鈴木 健嗣: "他者の身体・認知特性の理解を支援するウェアラブルデバイス," つくば医工連携フォーラム 2017, 国立研究開発法人物質・材料研究機構, Jan. 20, 2017.	2017年1月
49	佐藤 晃矢	沖縄	日本語	無	岡 瑞起, 西川 仁将, 佐藤 晃矢, 橋本 康弘, 池上 高志: "ソーシャルネットワークにおける新規語彙の生成と選択のメカニズム," 第171回ヒューマンコンピュータインタラクション研究会, 大濱信泉記念館, Jan. 23-24, 2017.	2017年1月
50	加納 青李 高嶋 倫太郎 朝倉 靖成 白石 僚一郎	アメリカ	英語	有	Shori Kano, Rintaro Takashima, Yasunari Asakura and Ryoichiro Shiraishi, "5th Limb: Development of Augmented Expression System Using Extra Limb," The 8th Augmented Human International Conference, Silicon Valley, CA, U.S.A., Mar. 16-18, 2017.	2017年3月
51	PERUSQUIA HERNANDEZ Monica	アメリカ	英語	有	Monica Perusquia-Hernández, Takahisa Enomoto, Tiago Martins, Mai Otsuki, Hiroo Iwata and Kenji Suzuki, "Embodied Interface for levitation and navigation in a 3D large space," The 8th Augmented Human International Conference, Silicon Valley, CA, U.S.A., Mar. 16-18, 2017.	2017年3月
52	西田 惇	名古屋	日本語	招待	西田 惇: "人々の身体的・社会的インタラクションをエンパワーする拡張生体技術," 情報処理学会第79回全国大会, 名古屋大学, Mar. 16-18, 2017.	2017年3月

平成 29 年度 (口頭発表)

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
53	BRUMLEY John	アメリカ	英語	無	John Brumley, "Look Out: A non-visual perspective on location-based mixed reality games", Glitchcon 2017, Minneapolis, MN, USA, May 5-7, 2017	2017年4月
54	西田 惇	アメリカ	英語	有	Jun Nishida and Kenji Suzuki, "bioSync: A Paired Wearable Device for Blending Kinesthetic Experience", ACM SIGCHI 2017 Papers, USA, May 6-11, 2017	2017年5月
55	佐藤 綱祐	シンガポール	英語	有	Kosuke Sato, Keita Watanabe, Shuichi Mizuno, Masayoshi Manabe, Hiroaki Yano and Hiroo Iwata, "Development of a Block Machine for Volleyball Attack Training", IEEE International Conference on Robotics and Automation (ICRA) 2017, Singapore, May 29-Jun. 3, 2017	2017年5月
56	佐藤 晃矢	名古屋	日本語	無	佐藤 晃矢, 岡 瑞起, 橋本 康弘, 池上 高志, 加藤 和彦, "SNSにおけるユーザ参加期間とタグ生成・利用の関係", 日本人工知能学会 31 回全国大会, ウィンクあいち, May 23-26, 2017	2017年5月
57	佐藤 晃矢	名古屋	日本語	無	橋本 康弘, 佐藤 晃矢, 岡 瑞起, 池上 高志, "ソーシャルタギングシステムにおける語彙の個性", 日本人工知能学会 31 回全国大会, ウィンクあいち, May 23-26, 2017	2017年5月
58	利根 忠幸	中国	英語	有	Tadayuki Tone and Kenji Suzuki, "A ferrofluid-based robotic sheet for liquid manipulation by using vibration control", IEEE CASE 2017, Xian, China, Aug. 20-23, 2017	2017年8月
59	西田 惇	アメリカ	英語	有	Jun Nishida, Shunichi Kasahara and Kenji Suzuki, "Wired Muscle: Generating Faster Kinesthetic Reaction by Interpersonally Connecting Muscles" SIGGRAPH 2017 Emerging Technologies, USA, 2017	2017年8月
60	佐藤 綱祐	徳島	日本語	無	佐藤 綱祐, 渡辺 啓太, 水野 秀一, 眞鍋 政義, 矢野 博明, 岩田 洋夫, "バレーボールにおけるブロックマシンの選手への効果", 第22回日本バーチャルリアリティ学会大会, Sep.27-29, 2017	2017年9月
61	小木曾 里樹	つくば	日本語	無	小木曾 里樹, 水谷 孝一, 善甫 啓一, 若槻 尚斗, 前田 祐佳, "接触圧力及び毛髪量が骨導トランスデューサによる励振へ与える影響", 日本音響学会, 音楽音響研究会講演論文集, Vol. 36, No. 3, pp.7-12, つくば, Sep. 2, 2017	2017年9月

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
62	高鳥 光	つくば	英語	有	Hikaru Takatori, Hiroaki Yano, Hiroo Iwata, "Large Space" and "CHILDHOOD" Developed in Empowerment Informatics Program", TGSW 2017 Art & Design Session Proceedings, Ibaraki, Japan, Sep. 25-27, 2017	2017年9月
63	佐々木 海	川越	日本語	無	佐々木 海, 鈴木 健嗣, "階段昇降する移動機器のための能動型回転脚機構", "第35回日本ロボット学会学術講演会 2017, Sep. 12, 2017	2017年9月
64	西田 惇	福岡	日本語	有	伴 碧, 高橋 英之, 細田 耕, 鳴海 拓志, 西田 惇, 福島 宏器, "日常体験を記述せずに科学する方法論の新展開—心理学と最先端テクノロジーとの対話—", 第81回日本心理学会, シンポジウム, 福岡, 2017	2017年9月
65	敷根 伸光	つくば	英語	有	Nobumitsu Shikine, Toshimasa Yamanaka and Junichi Hoshino, "A Game System for Learning Mathematics with Pacing Considering Individual Motivation and Feeling", ICEC 2017, pp.169-176, Tsukuba, Sep., 2017	2017年9月
66	小崎 湧太	カナダ	英語	有	Yuta Kozaki and Kenji Suzuki, "A Facial Wearable Robot for Supporting Eye Opening and Closure Movement", IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems, Canada, Sep., 2017	2017年9月
67	JAZBEC Maša	スロベニア	英語	No	Maša Jazbec, "ART-SCIENCE-TECHNOLOGY AND SOCIETY TO EMPOWER", International new media culture festival Speculum Artium, Slovenia, Sep., 2017	2017年9月
68	倉本 尚美	千葉	日本語	無	倉本 尚美, 鈴木 健嗣, 渡辺 忍, 日高 紀久江, "特別支援学校における食事指導の実態調査", 第22回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会, 千葉, Sep. 15-16, 2017	2017年9月
69	JAZBEC Maša	カナダ	英語	Yes	Maša Jazbec, Shuichi Nishio, Hiroshi Ishiguro, Hideaki Kuzuoka, Masataka Okubo and Christian Peñaloza, "Body-swapping experiment with an android robot Investigation of the relationship between agency and a sense of ownership toward a different body", IEEE SMC, Banff, Canada, Oct. 6-10, 2017	2017年10月
70	DOLLACK Felix	オーストラリア	英語	有	Felix Benedict Dollack, Christina Imbery and Joerg Bitzer, "On the analysis of acoustic distance perception in a head mounted display", International Conference on Artificial Reality and Telexistence and Eurographics Symposium on Virtual Environments, Adelaide, Australia, Nov. 22, 2017	2017年11月
71	小木曾 里樹	インドネシア	英語	有	Satoki Ogiso, Koichi Mizutani, Naoto Wakatsuki and Tadashi Ebihara, "Evaluation of Time-Difference-of-Arrival Error of Acoustic Beacons Caused by Velocity of Microphone Array", Regional Conference on Acoustics and Vibrations 2017, pp.1-6, Bali, Indonesia, Nov. 28, 2017	2017年11月
72	丹野 智博	中国	英語	有	Tomohiro Tanno, Kazumasa Horie, Jun Izawa and Masahiko Morita, "Robustness of Selective Desensitization Perceptron Against Irrelevant and Partially Relevant Features in Pattern Classification", ICONIP 2017, Guangzhou, China, Nov. 14-18, 2017	2017年11月
73	XIE Chun	金沢	日本語	無	謝 淳, 亀田 能成, 鈴木 健嗣, 北原 格, "大規模 Projector-Camera システムに適したキャリブレーション手法", 電子情報通信学会 HCG シンポジウム 2017 論文集, Dec., 2017	2017年12月
74	高嶋 倫太郎	中国	英語	有	Rintaro Takashima, Hiroaki Kawamoto, Yoshiyuki Sankai, "An Ultra-Multijointed Assistive Robot Finger", Proc. of the 2017 IEEE International Conference on Robotics and Biomimetics, Macau SAR China, pp.538-543, Dec. 5-8, 2017	2017年12月
75	ERICH Floris Marc Arden	フランス	英語	有	Floris Erich, "DevOps is Simply Interaction Between Development and Operations", International Workshop on Software Engineering Aspects of Continuous Development and New Paradigms of Software Production and Deployment (DEVOPS 2018), France, Mar., 2018	2018年3月
76	BOEM Alberto	ドイツ	英語	無	Alberto Boem, "Encounter-type Haptic Interfaces for Virtual Reality Musical Instruments". IEEE VR 2018, Doctoral Consortium, Germany, Mar., 2018	2018年3月

平成 30 年度（口頭発表）

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
77	ROJAS FERRER Cesar Daniel	台湾	英語	有	C. D. Rojas Ferrer, H. Shishido, I. Kitahara, and Y. Kameda: "Realization of a Full-body Immersive VR System for READ-THE- GAME Skill Development", The 2nd Asia-Pacific Workshop on Mixed and Augmented Reality (APMAR) 2018, Taipei, Taiwan, Apr. 13-17, 2018	2018 年 4 月
78	佐藤 晃矢	鹿児島	日本語	無	佐藤 晃矢, 岡 瑞起, 加藤 和彦: "イベント時系列を利用したソーシャル・ネットワークサービスにおける新規ユーザーの離脱予測" JSAI 2018, Kagoshima, Jun. 4-8, 2018	2018 年 6 月
79	TAN Chun Kwang	福岡	英語	無	Chun Kwang Tan: "Effects of HAL for lumbar support on muscle usages towards fatigue during repetitive stoop lifting movements", 55th Annual Meeting of the Japanese Association of Rehabilitation Medicine, Fukuoka, Japan, Jun. 28 - Jul. 1, 2018	2018 年 6 月
80	小崎 湧太	アメリカ	英語	無	Yuta Kozaki, Naoki Matsushiro, Kenji Suzuki: "Design of Soft Robotic Actuation for Supporting Eyelid Closure Movement", Engineering in Medicine and Biology Society, Hawaii, USA, Jul. 17-21, 2018	2018 年 7 月
81	西田 惇	ドイツ	英語	無	Jun Nishida: "HYPERPERSPECTIVE: Changing Perspective by Wearable I/O Devices to Understand, Communicate, and Cooperate with People", Dagstuhl Seminar 18322, Germany, Aug. 6-12, 2018	2018 年 8 月
82	利根 忠幸	ドイツ	英語	有	Tadayuki Tone, Kenji Suzuki: "An automated liquid manipulation by using a ferrofluid-based robotic sheet", IEEE CASE 2018, Munich, Germany, Aug. 20-24, 2018	2018 年 8 月
83	朝倉 靖成	徳島	日本語	無	上原 皓, 朝倉 靖成, 河本 浩明, 丸島 愛樹, 松村 英明: "操作意志に基づく拡大・縮小操作可能な装着型資格支援システム", 第 18 回日本 VR 医学会学術大会, 徳島大学 常三島 けやきホール, Sep. 1, 2018	2018 年 9 月
84	佐々木 海	愛知	日本語	無	佐々木 海, 鈴木 健嗣: "階段昇降する車椅子型移動機器のための能動型回転脚", 第 36 回日本ロボット学会学術講演会, 中部大学春日井キャンパス, Sep. 7, 2018	2018 年 9 月
85	佐々木 海	愛知	日本語	無	佐々木 海, ディエゴ フェリペ パエズ グラナドス, 杉本 実夏, 杉山 大成, 鈴木 健嗣: "起立着座動作を支援する小児用の受動型外骨格機構", 第 36 回日本ロボット学会学術講演会, 中部大学春日井キャンパス, Sep. 7, 2018	2018 年 9 月
86	西村 勇輝	愛媛	日本語	無	西村 勇輝, 山口 友之: "急斜面除草ロボットによる除草効果の評価", 農業環境工学関連 5 学会 2018 年合同大会, 愛媛大学樟味キャンパス, Sep. 10-14, 2018	2018 年 9 月
87	BRUMLEY John	ラトビア	英語	有	Chan, H. & Brumley J.: "Crafting images for Electoral Campaign with Artificial Intelligence". Open Fields 2018. Riga, Latvia. Sep. 13-15, 2018	2018 年 9 月
88	糸井川 椋	愛知	日本語	有	糸井川 椋: "Monitoring Orthostatic Instantaneous Pulse Rate Change using Photoplethysmography", 生体医工学シンポジウム 2018, Sep. 14-15, 2018	2018 年 9 月
89	佐藤 綱祐	宮城	日本語	無	佐藤 綱祐, 渡辺 啓太, 矢野 博明, 岩田 洋夫: "単眼バレーボール画像を用いたアタック位置予測", 第 23 回日本バーチャルリアリティ学会大会, Sep. 19-21, 2018	2018 年 9 月
90	小木曾 里樹	フランス	英語	有	Satoki Ogiso, Koichi Mizutani, Naoto Wakatsuki and Tadashi Ebihara: "Robust Localization of Mobile Robot in Reverberant Rooms Using Acoustic Beacons with Iterative Bayesian Filtering", Proceeding of the 9th International Conference on Indoor Positioning and Indoor Navigation, Sep. 26, 2018	2018 年 9 月
91	佐々木 海	スペイン	英語	有	Kai Sasaki, Diego Felipe Paez Granados, Minatsu Sugimoto, Taisei Sugiyama, and Kenji Suzuki: "Child-sized Passive Exoskeleton for Supporting Voluntary Sitting and Standing Motions", IEEE/RSJ IROS2018, Madrid, Spain, Sep. 30-Oct. 7, 2018	2018 年 10 月
92	小木曾 里樹	奈良	英語	有	Satoki Ogiso, Koichi Mizutani, Naoto Wakatsuki, Keiichi Zempo and Yuka Maeda: "Sensorless Contact Force Evaluation of Bone-conducted Sound Transducer by Electrical Impedance in Limited Frequency Range," Proceedings of the 7th IEEE Global Conference on Consumer Electronics, Oct. 11, 2018	2018 年 10 月

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
93	小木曾 里樹	京都	英語	有	Satoki Ogiso, Koichi Mizutani, Naoto Wakatsuki, Keiichi Zempo and Yuka Maeda: "Modeling of bone-conducted sound transducer on human skin by vibrating system with two degrees of freedom," Proceedings of the 39th Symposium on UltraSonic Electronics, Oct. 30, 2018	2018年10月
94	BRUMLEY John	メキシコ	英語	有	John Brumley: "Developments in Spatially Immersive Sound" Third Annual Taboo-Transgression-Transcence in Art & Science 2018, Mexico City, Mexico, Nov. 11-13, 2018	2018年11月
95	佐藤 晃矢	東京	英語	有	Koya Sato: "Design and Implementation of the Augmented Volleyball Court", ISS18 companion proceedings, Tokyo Japan, Nov. 25-28, 2018	2018年11月
96	本間 由樹子	中国	英語	有	Yukiko Honma and Kenji Suzuki: "A Robotic Brush with Surface Tracing Motion Applied to the Face", ICSR2018, Qingdao, China, Nov. 28-30, 2018	2018年11月
97	ISHAC Karlos	オーストラリア	英語	無	Karlos Ishac and Kenji Suzuki: "LifeChair: A Smart Cushion for Active Posture Correction", Startcon 2018, Sydney, Australia, Nov. 30-Dec. 1, 2018	2018年11月
98	KIM SunKyoung	中国	英語	有	SunKyoung Kim, Masakazu Hirokawa, Soichiro Matsuda, Atsushi Funahashi, and Kenji Suzuki: "Smiles of Children with ASD May Facilitate Helping Behaviors to the Robot", ICSR 2018, Qingdao, China, Nov., 2018	2018年11月
99	ZHONG Ying	アメリカ	英語	有	Ying Zhong, Masaki Matsubara, and Atsuyuki Morishima: "Identification of Important Images for Understanding Web Pages", IEEE HMDData 2018, Seattle, USA, Dec. 10-14, 2018	2018年12月
100	XIE Chun	フランス	英語	有	Chun Xie, Hidehiko Shishido, Mika Oki, Yoshinari Kameda, Kenji Suzuki, and Itaru Kitahara: "A Calibration Method of Floor Projection System for Learning Aids at School Gym", IEEE IPAS2018, Nice, France, Dec. 12-14, 2018	2018年12月
101	今堀 仁誠	フランス	英語	有	Masanobu Imahori, Hiroaki Kawamoto, and Yoshiyuki Sankai: "Basic Study on Cybernic Interface for Neuromuscular Intractable Rare Diseases Patients Operating an Electric Wheelchair", IEEE SII 2019, Paris, France, Jan. 14-16, 2019	2019年1月
102	桑原 隆志	フランス	英語	有	Takashi Kuwahara, Hiroaki Kawamoto, and Yoshiyuki Sankai: "IMU Sensor Module for the Measurement of High-speed Motion in the Analysis of Human Skills", IEEE SII 2019, Paris, France, Jan. 14-16, 2019	2019年1月
103	小木曾 里樹	岐阜	日本語	無	小木曾 里樹, 水谷 孝一, 善甫 啓一, 若槻 尚斗: "骨導振動子の背職圧力による装着者外耳道における音圧の変化", 日本音響学会音楽音響研究会, 岐阜, Jan. 26, 2019	2019年1月
104	小木曾 里樹	岐阜	日本語	無	小木曾 里樹: "立体音響の基礎 2018", 日本音響学会音楽音響研究会, 岐阜, Jan. 26, 2019	2019年1月
105	佐藤 晃矢	フランス	英語	有	Koya Sato, Yuji Sano, Mai Otsuki, Mizuki Oka and Kazuhiko Kato: "Augmented Recreational Volleyball Court: Supporting the Beginners' Landing Position Prediction Skill by Providing Peripheral Visual Feedback", Augmented Human 2019, Reims, France, Mar. 11-12, 2019	2019年3月
106	佐藤 晃矢	東京	英語	有	Koya Sato, Mizuki Oka, Yasuhiro Hashimoto, Takashi Ikegami and Kazuhiko Kato: "How the Nature of Web Services Drive Vocabulary Creation in Social Tagging", Proc. Of the 2nd International Conference on Information Science and System, Tokyo, Japan, Mar. 16-19, 2019	2019年3月
107	TAN Chun Kwang	神奈川	英語	無	Chun Kwang TAN, Hideki KADONE, Hiroki WATANABE, Yasushi HADA, Masashi YAMAZAKI, Yoshiyuki SANKAI, Aki MARUSHIMA, Kenji SUZUKI: "Lateral Symmetry of Synergies in Lower Limbs of Acute Post-stroke Patients After HAL Therapy (急性期脳卒中患者における HAL 治療前後の下肢筋シナジー側対称性に関する研究)", 44th Annual Meeting of the Japanese Stroke Association 2019, Yokohama, Japan, Mar. 21-23, 2019	2019年3月
108	平岩 匡	大阪	英語	有	Hikaru Takatori, Masashi Hiraiwa, Hiroaki Yano, Hiroo Iwata: "Large-scale Projection-Based Immersive Display: The Design and Implementation of Large Space", IEEE VR 2019, Osaka, Japan, Mar. 23-27, 2019	2019年3月

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
109	西田 惇	大阪	英語	有	Jun Nishida and Kenji Suzuki: "HYPERPECTIVE: Shaping Experiences beyond Perspectives", IEEE VR 2019, Japan, Mar. 23-27, 2019	2019年3月
110	正田 REYES Vera Paola	福島	英語	有	Vera Paola Edosur REYES Paola Reyes: "Exploring the Use of the Phoneme Frequency Scale Method in Determining Word Difficulty Levels and Readability Scores", ACM ICIET 2019, Aizu-wakamatsu, Japan, Mar. 29-31, 2019	2019年3月

令和元年度（口頭発表）

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
111	佐藤 晃矢	中国	英語	有	Koya Sato, Mizuki Oka, and Kazuhiko Kato: "Early Churn User Classification in Social Networking Service Using Attention-based Long Short-Term Memory", The 14th Pacific Asia Workshop on Intelligence and Security Informatics, Macau, China, Apr. 14-17, 2019	2019年4月
112	高山 周太郎	新潟	日本語	無	高山 周太郎, 大澤 博隆: "実世界人狼ゲームのジェスチャーの分析", 2019年人工知能学会全国大会(第33回), 朱鷺メッセ(新潟コンベンションセンター), Jun. 3-7, 2018	2019年6月
113	酒井 友裕	北海道	日本語	無	酒井 友裕, 葛岡 英明, 山下 直美: "ストレス値の共有が認知症患者の家族介護者の精神的負荷に及ぼす影響を調査するシステムの提案", 第184回情報処理学会ヒューマンコンピュータインタラクション研究会, 北海道大学百年記念会館, July. 22, 2019	2019年7月
114	敷根 伸光	北海道	日本語	無	敷根 伸光, 山中 敏正, 星野 准一: "インタラクティブな教育デザインを支援するシステム NOVELICA", 第184回ヒューマンコンピュータインタラクション研究会, 北海道大学百年記念会館, Jul. 22-23, 2019	2019年7月
115	ZHONG Ying	東京	日本語	無	鍾 穎, 松原 正樹, 小林 真, 森嶋 厚行: "聴覚情報のみによる理解しやすいマイクロタスクデザイン", 情報処理学会第10回アクセシビリティ研究会, 早稲田大学, Aug. 23-24, 2019	2019年8月
116	杉山 太成	東京	英語	無	Taisei Sugiyama, Nicolas Schweighofer, Jun Izawa "Optimizing learning rate by meta-leading to maximize reward in visuomotor learning", 第13回 Motor Control 研究会, 東京大学弥生講堂, Aug. 23, 2019	2019年8月
117	REBELO DAL'BELLO Lucas	東京	英語	無	Lucas R. Dal'Bello and Jun Izawa: "History dependency of error-backpropagation capability leads to maladaptation in a redundant motor task", 第13回 Motor Control 研究会, 東京大学弥生講堂, Aug. 23-25, 2019	2019年8月
118	佐藤 晃矢	オーストリア	英語	有	Koya Sato, Mizuki Oka, Kazuhiko Kato: "Early Turnover Prediction of New Restaurant Employees from Their Attendance Records and Attributes", DEXA 2019, Aug. 26-29, 2019	2019年8月
119	高嶋 倫太郎	徳島	日本語	有	高嶋 倫太郎, 河本 浩明, 山海 嘉之: "手指動作支援のための超多関節外骨格に関する研究", 生体医工学シンポジウム 2019, 徳島, Sep. 6-7, 2019	2019年9月
120	西村 勇輝	広島	英語	有	Yuki Nishimura and Tomoyuki Yamaguchi: "Development of Grass Cutting Mibile Robot for Steep Slope with Multi-Copter-Based Attitude Stabilization" SICE 2019, Hiroshima, Japan, Sep. 10-13, 2019	2019年9月
121	平岩 匡	東京	日本語	無	平岩 匡, 岩田 洋夫: "可搬全立体角没入ディスプレイ Mobile Large Space の設計手法と実装", 第24回バーチャルリアリティ学会大会, 東京大学本郷キャンパス, Sep. 11, 2019	2019年9月
122	佐野 祐士	東京	英語	有	Yuji Sano, Koya Sato, Ryoichiro Shiraishi, Mai Otsuki, Koichi Mizutani: "Visuo-Haptic Interface to Augment Player's Perception in Multiplayer Ball Game", ICAT-EGVE 2019, Tokyo, Japan, Sep. 11-13, 2019	2019年9月
123	杉本 実夏	福岡	日本語	無	杉本 実夏, 岩田 洋夫, 五十嵐 浩也: "歩行促進のための足首装着型発電デバイス", 情報処理学会エンタテインメントコンピューティング 2019, 九州大学大橋キャンパス, Sep. 20-22, 2019	2019年9月

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
124	坂村 祐希	中国	英語	有	Yuki Sakamura, Hidehiko Shishido, Yoshinari Kameda and Itaru Kitahara: "A Virtual On-board System of an Autonomous Vehicle for Smooth Trading of Driving Authority", The ISMAR 2019 Doctoral Consortium, Beijing, China, Oct. 14-18, 2019	2019年10月
125	KENNARD Maxwell West	中国	英語	有	Modar Hassan, Maxwell Kennard, Keisuke Yagi, Hideki Kadone, Hiromi Mochiyama, and Kenji Suzuki: "MRLift: a Semi-active Lower Back Support Exoskeleton based on MRFluid and Force Retention Technology", IEEE IROS 2019, Macau, China, Nov. 4-8, 2019	2019年11月
126	YANG Chi-Lan	アメリカ	英語	有	YANG Chi-Lan, Chien-Wen (Tina) Yuan, and Hao-Chuan Wang: "When Knowledge Network is Social Network: Understanding Collaborative Knowledge Transfer in Workplace." Proc. ACM Hum.-Comput. Interact. 3, CSCW, Article 164. Austin, Texas, USA, Nov. 9-13, 2019	2019年11月
127	REBELO DAL'BELLO Lucas	東京	英語	無	Lucas R. Dal'Bello and Jun Izawa: "Maladaptation in a redundant motor task is caused by history dependency of error-backpropagation capability", The Joint Symposium on Fusion of Biomedical and Physical/Informational Sciences in Neurobiology, Tokyo, Nov. 26, 2019	2019年11月
128	CHEN Yang	愛知	英語	無	Yang Chen, Diego Paez-Granados and Kenji Suzuki: "Torso Control System with A Sensory Safety Bar for a Standing Mobility Device", IEEE MHS 2019, Nagoya, Japan, Dec. 1-4, 2019	2019年12月
129	杉山 太成	東京	英語	無	Taisei Sugiyama, Nicolas Schweighofer, and Jun Izawa: "Optimizing learning rate by meta-learning to maximize reward in visuomotor learning", The Joint Symposium on Fusion of Biomedical and Physical/Informational Sciences in Neurobiology, Tokyo, Nov. 26, 2019	2019年12月
130	酒井 友裕	群馬	英語	有	Tomohiro Sakai, Hideaki Kuzuoka and Naomi Yamashita: "Proposal of a System to Investigate the Effect of Sharing Stress Values among Family Caregivers of Dementia Patients", ICMEMIS2019, Gunma, Japan, Dec. 4-6, 2019	2019年12月
131	椋原 輝	福岡	日本語	無	椋原輝, 山口友之: "共食の場における主観的「おいしさ」の光表現デバイスの効果", 第3回共創学会年次大会, 九州大学大橋キャンパス, Dec. 14-15, 2019	2019年12月
132	正田 REYES Vera Paola	兵庫	英語	有	Vera Paola REYES Shoda: "Personalities and Patterns of Twitch Chat in Let's Play Live Streams", ACM AICC 2019, Kobe, Japan, Dec. 21-23, 2019	2019年12月
133	椋原 輝	アメリカ	英語	有	Akira Kashihara, Tomoyuki Yamaguchi: "A Development of Color Lighting Device to Indicate Subjective Palatability", 2020 IEEE/SICE International Symposium on System Integration, Hawaii USA, Jan.12-15, 2020	2020年1月
134	西村 勇輝	アメリカ	英語	有	Yuki Nishimura, Makoto Sakamoto, Tomoyuki Yamaguchi: "Development of Multi-copter System on Concrete Surfaces with Outer Frame and Wind Speed Sensors", IEEE/SICE SII2020, Hawaii, USA, Jan. 12-15, 2020	2020年1月
135	WU Yihao	東京	日本語	無	Yihao Wu, Masahiko Morita, Jun Izawa: "The model selectivity in human reinforcement learning" 武亦豪, 森田 昌彦, 井澤 淳: "ヒトの行動学習におけるモデル選択機構" 第32回自律分散システム・シンポジウム, 芝浦工業大学, Jan. 25-Jan.26, 2020	2020年1月
136	椋原 輝	東京	日本語	無	椋原輝, 山口友之: "動画像を用いた主観的「おいしさ」の定量計測の検討", 令和2年電気学会全国大会, 東京電機大学 東京千住キャンパス, Mar. 11-13, 2020	2020年3月

(2) ポスター・デモ発表

平成 26 年度

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
1	小木曾 里樹	富山	日本語	無	川岸 卓司, 小木曾 里樹, 水谷 孝一, 若槻 尚斗, "少数マイクロフォンによる音源方向推定を用いる移動ロボットの自己位置推定法", ロボティクス・メカトロニクス講演会 2014 in Toyama, 富山市総合体育館, May 25-29, 2014	2014年5月

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
2	利根 忠幸	富山	日本語	無	利根 忠幸, 鈴木 健嗣, "磁性流体を利用したシート型ソフトロボットによる物体輸送", ロボティクス・メカトロニクス講演会 2014 in Toyama, 富山市総合体育館, May 25-29, 2014	2014年5月
3	西田 惇	富山	日本語	無	西田 惇, 鈴木 健嗣, "脳神経外科における装着型手術手技支援機器の開発", ロボティクス・メカトロニクス講演会 2014 in Toyama, 富山市総合体育館, May 25-29, 2014	2014年5月
4	小木曾 里樹	札幌	日本語	無	小木曾 里樹, 川岸 卓司, 水谷 孝一, 善甫 啓一, 若槻 尚斗, "少素子マイクロホンアレイを用いる移動ロボットの2次元自己位置推定法", 日本音響学会 2014 年秋季研究発表会, 北海学園大学, Sep. 3-5, 2014	2014年9月
5	潘 雅冬	福岡	日本語	無	廣川 暢一, 潘 雅冬, 舟橋 厚, 伊東 保志, 鈴木 健嗣, "ロボット介在活動における自閉症スペクトラム障がい児の社会的行動計測", 第 32 回日本ロボット学会学術講演会, 九州産業大学, Sep. 4-6	2014年9月
6	若生 遼	京都	英語	有	若生 遼, 綾部 早穂, "Formation of haptic peri-personal spatial representation," 日本心理学会第 78 回大会, 同志社大学, Sep. 10-12, 2014	2014年9月
7	佐藤 綱祐	つくば	英語	有	Kosuke Sato, Yuki Hashimoto, Hiroaki Yano, Hiroo Iwata, "Development of Ball Game Defense Robot Based on Physical Properties and Motion of Human", Asia Haptics, Tsukuba, Japan, Nov. 18-20, 2014	2014年11月
8	高鳥 光	つくば	英語	有	Hikaru Takatori, Hiroaki Yano, Hiroo Iwata, "Panoramic Movie-rendering Method with Superimposed Computer Graphics for Immersive Walk-through System", Asia Haptics, Tsukuba, Japan, Nov. 18-20, 2014	2014年11月
9	西田 惇	つくば	英語	有	Jun Nishida, Kei Nakai, Akira Matsushita, and Kenji Suzuki, "Haptic Augmentation of Surgical Operation using a Passive Hand Exoskeleton", Asia Haptics, Tsukuba, Japan, Nov. 18-20, 2014	2014年11月
10	小木曾 里樹	東京	英語	無	Satoki Ogiso, "Self-localization of indoor mobile robot using triangular microphone array", The 11th IEEE Transdisciplinary-Oriented Workshop for Emerging Researchers, Tokyo, Japan, Nov. 29, 2014	2014年11月
11	若生 遼	東京	日本語	有	若生 遼, 綾部 早穂, "位置関係の知覚における haptic Egocentre の研究", 日本基礎心理学会第 33 回大会, 首都大学東京, Dec. 6-7, 2014	2014年12月
12	潘 雅冬	東京	日本語	無	廣川 暢一, 潘 雅冬, 舟橋 厚, 鈴木 健嗣, "情動を考慮したロボット介在活動における対面状況と表情表出の計測", クラウドネットワークロボット研究会, 東京大学, Dec. 12, 2014	2014年12月
13	小木曾 里樹	つくば	日本語	無	小木曾 里樹, 川岸 卓司, 水谷 孝一, 善甫 啓一, 若槻 尚斗, "マイクロホンアレイを用いる移動ロボットの2次元位置推定法", SAT テクノロジー・ショーケース 2015, つくば国際会議場, Jan. 21, 2015	2015年1月
14	西田 惇 高鳥 光 佐藤 綱祐	つくば	日本語	無	西田 惇, 高鳥 光, 佐藤 綱祐, "身体性変換スーツ「CHILDHOOD」の開発", SAT テクノロジー・ショーケース 2015, つくば国際会議場, Jan. 21, 2015	2015年1月
15	佐藤 綱祐	つくば	英語	有	Kosuke Sato, Masahiro Ueda, Yuki Hashimoto, Hiroaki Yano and Hiroo Iwata, "Pass Cutting Robot for Basketball Drill", 10th AEARU Workshop on Computer Science and Web Technology, Tsukuba, Japan, Feb. 25-27, 2015	2015年2月
16	高鳥 光	つくば	英語	有	Hikaru Takatori, Hiroaki Yano and Hiroo Iwata, "Prototype of Evacuation Simulator using Torus Treadmill and Spherical Immersive Display", 10th AEARU Workshop on Computer Science and Web Technology, Tsukuba, Japan, Feb. 25-27, 2015	2015年2月
17	西田 惇	シンガポール	英語	有	Jun Nishida, Kanako Takahashi and Kenji Suzuki, "A Wearable Stimulation Device for Sharing and Augmenting Kinesthetic Feedback", Augmented Human, Singapore, Mar. 9-11, 2015	2015年3月
18	若生 遼	オランダ	英語	有	Ryo Wako, Saho Ayabe-Kanamura, "Systematic Deviations in the Reproduction of Object in the Environment Using Haptics - Focusing on the Effects of Arm Movement", International Convention of Psychological Science, Amsterdam, Netherlands, Mar. 12-14, 2015	2015年3月

平成 27 年度 (ポスター・デモ発表)

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
19	西田 惇 高鳥 光 佐藤 綱祐	フランス	英語	有	Jun Nishida, Hikaru Takatori, Kosuke Sato and Kenji Suzuki, "CHILDHOOD: Wearable Suit for Augmented Child Experience", Laval Virtual ReVolution, Laval, France, Apr. 8-12, 2015	2015 年 4 月
20	西田 惇	京都	日本語	無	西田 惇, 鈴木 健嗣: "脳神経外科における切開位置図示を支援する透過画像投影機器", ロボティクス・メカトロニクス講演会 2015 in Kyoto, 京都市勧業館, May 17-19, 2015	2015 年 5 月
21	利根 忠幸	京都	日本語	無	利根 忠幸, 鈴木 健嗣: "磁性流体を利用したシート型ソフトロボットの形状制御と物体輸送", ロボティクス・メカトロニクス講演会 2015 in Kyoto, 京都市勧業館, May 17-19, 2015	2015 年 5 月
22	小木曾 里樹	京都	日本語	無	小木曾 里樹, 川岸 卓司, 水谷 孝一, 善甫 啓一, 若槻 尚斗: "パルス圧縮音源を用いる 2 次元移動ロボットの自己位置推定", ロボティクス・メカトロニクス講演会 2015 in Kyoto, 京都市勧業館, May 17-19, 2015	2015 年 5 月
23	小木曾 里樹	京都	日本語	無	川岸 卓司, 小木曾 里樹, 水谷 孝一, 善甫 啓一, 若槻 尚斗: "少素子マイクロフォンアレーを有する音源追尾ロボットの複数音源環境下における音源分離特性", ロボティクス・メカトロニクス講演会 2015 in Kyoto, 京都市勧業館, May 17-19, 2015	2015 年 5 月
24	西田 惇 高鳥 光 佐藤 綱祐	アメリカ	英語	有	Jun Nishida, Hikaru Takatori, Kosuke Sato and Kenji Suzuki, "CHILDHOOD: Wearable Suit for Augmented Child Experience", SIGGRAPH 2015 Posters, Los Angeles, USA, Aug. 9-13, 2015	2015 年 8 月
25	西田 惇	東京	日本語	無	西田 惇, 鈴木 健嗣: "生体電位計測に基づく筋刺激を用いた装着型運動覚共有デバイス", 第 20 回日本バーチャルリアリティ学会大会, 芝浦工業大学, Sep. 9-11, 2015	2015 年 9 月
26	白石 僚一郎	岡山	日本語	有	白石 僚一郎, 山海 嘉之, "片麻痺患者の立ち上がり動作支援に関する研究", 生体医工学会シンポジウム 2015, 岡山国際交流センター, Sep. 25-26, 2015	2015 年 9 月
27	小木曾 里樹	大阪	英語	有	Satoki Ogiso, Koichi Mizutani, Keiichi Zempo and Naoto Wakatsuki: "Measurement of the Differential Transfer Function Between Bone-Conduction and Air-Conduction for Sound Localization," The 4rd IEEE Global Conference on Consumer Electronics, Osaka, Japan, Oct. 27-30, 2015	2015 年 10 月
28	小木曾 里樹	大阪	英語	有	Keiichi Zempo, Satoki Ogiso, Koichi Mizutani and Naoto Wakatsuki: "Measurement of the Distance Difference of Acoustic Beacons Using Direct Conversion Receiver," The 4rd IEEE Global Conference on Consumer Electronics, Osaka, Japan, Oct. 27-30, 2015	2015 年 10 月
29	江國 翔太 村田 耕一	神戸	英語	有	Shota Ekuni and Koichi Murata, "Multimodal VR Sytem Providing Insect Crawling Sensation," VRCAI 2015, Kobe, Japan, Oct. 30 - Nov. 1, 2015	2015 年 10 月
30	小木曾 里樹	東京	英語	有	Keiichi Zempo, Satoki Ogiso, Koichi Mizutani, Naoto Wakatsuki: "Design of Acoustic Beacon Signal for Distance Measurement in Indoor Location," The 6th International Conference on Advanced Mechatronics (ICAM2015), Tokyo, Japan, Dec. 5-8, 2015	2015 年 12 月
31	小木曾 里樹	東京	英語	有	"Satoki Ogiso, Takuji Kawagishi, Koichi Mizutani, Keiichi Zempo, Naoto Wakatsuki, ""Effect of sound separation using pulse-compression on accuracy of localization with acoustic beacons,"" The 6th International Conference on Advanced Mechatronics (ICAM2015), Tokyo, Japan, Dec. 5-8, 2015"	2015 年 12 月
32	小木曾 里樹	つくば	日本語	有	川岸 卓司, 小木曾 里樹, 水谷 孝一, 善甫 啓一, 若槻 尚斗, "マイクロホンアレーによるドローン飛行音の位置推定," SAT テクノロジーショーケース 2016, つくば国際会議場, Feb. 4, 2016	2016 年 2 月
33	CHACIN Aisen Carolina 大図 岳	オランダ	英語	有	Chacin Aisen Carolina, Takeshi Oozu, Hiroo Iwata, "Submersible Haptic Search Glove," TEI 2016, Eindhoven, Netherlands, Feb. 14 - 17, 2016	2016 年 2 月

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
34	白石 僚一郎	スイス	英語	有	Ryoichiro Shiraishi, Takehiro Fujita, Kento Inuzuka, Rintaro Takashima and Yoshiyuki Sankai: "Augmentation of Human Protection Functions Using Wearable and Sensing System," the 7th Augmented Human International Conference, Geneva, Switzerland, Feb. 25-26, 2016	2016年2月
35	西田 惇	東京	日本語	有	西田 惇, 鈴木 健嗣, "bioSync: 運動覚同調インタラクションの提案と運動覚共有デバイスの開発," インタラクション2016, 科学技術館, Mar. 2-4, 2016	2016年3月
36	倉本 尚美	千葉	英語	有	Naomi Kuramoto, "Differences in Mealtime Assistance between Nurses and Certified Caregivers in Elderly Care Facilities," 19th EAFONS, Chiba, Japan, Mar. 14 - 15, 2016	2016年3月
37	西田 惇	アメリカ	英語	有	Jun Nishida and Kenji Suzuki, "bioSync: Wearable Haptic I/O Device for Synchronous Kinesthetic Interaction among people," IEEE VR 2016, Greenville, USA, Mar. 17-25, 2016	2016年3月

平成 28 年度（ポスター・デモ発表）

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
38	西田 惇	アメリカ	英語	有	Jun Nishida and Kenji Suzuki, "bioSync: Synchronous Kinesthetic Experience among People," The 2016 CHI Conference on Human Factors in Computing Systems, San Jose, CA, U.S.A., May 7-12, 2016.	2016年5月
39	小木曾 里樹	横浜	日本語	無	小木曾 里樹, 川岸 卓司, 水谷 孝一, 善甫 啓一, 若槻 尚斗: "M 系列符号を用いる音響ビーコンの音源方向推定及び自己位置推定への影響," 日本機械学会, ロボティクス・メカトロニクス講演会, パシフィコ横浜, Jun. 8-11, 2016.	2016年6月
40	佐藤 晃矢	フランス	英語	有	Mizuki Oka, Koya Sato, Yasuhiro Hashimoto and Takashi Ikegami, "Emergence of Individuality on Social Tagging Dynamics," Complex Networks: from theory to interdisciplinary application, Marseille, France, Jul. 11-13, 2016.	2016年7月
41	大関 岳	アメリカ	英語	有	Takeshi Ozu, Aki Yamada, Yuki Enzaki, and Hiroo Iwata, "Escaping Chair: Furniture-Shaped Device Art," ACM SIGGRAPH 2016, Anaheim, CA, U.S.A., Jul. 24-28, 2016.	2016年7月
42	江國 翔太 村田 耕一 朝倉 靖成	アメリカ	英語	有	Shota Ekui, Koichi Murata, Yasunari Asakura and Akira Uehara, "Bionic Scope: Wearable System for Visual Extension Triggered by Bioelectrical Signal," ACM SIGGRAPH 2016, Anaheim, CA, USA, Jul. 24-28, 2016.	2016年7月
43	白石 僚一郎	アメリカ	英語	有	Ryoichiro Shiraishi, Hiroaki Kawamoto and Yoshiyuki Sankai, "Development of Sit-to-Stand and Stand-to-Sit Training System for Hemiplegic Patients," 2016 38th Annual International Conference of the IEEE EMBS, Orland, FL, U.S.A., Aug. 16-21, 2016.	2016年8月
44	小木曾 里樹	富山	日本語	無	川岸 卓司, 小木曾 里樹, 水谷 孝一, 善甫 啓一, 若槻 尚斗: "ドローンプロペラによる下方風速と等価音源位置の関係," 日本音響学会, 2016 年秋季研究発表会, 富山大学, Sep. 14-16, 2016.	2016年9月
45	PERUSQUIA HERNANDEZ Monica	東京	英語	有	Monica Perusquía-Hernández, Tiago Martins, Takahisa Enomoto, Mai Otsuki, HirooIwata and Kenji Suzuki, "Multimodal Embodied Interface for Levitation and Navigation in 3D Space," The ACM Symposium on Spatial User Interaction, Tokyo, Japan, Oct. 15-16, 2016.	2016年10月
46	西田 惇	東京	英語	有	Jun Nishida, "bioSync: Blending Kinesthetic Experience among People," 29th ACM User Interface Software and Technology Symposium, Tokyo, Japan, Oct. 16-19, 2016.	2016年10月
47	ERICH Floris Marc Arden	オランダ	英語	有	Floris Erich, "End-user Software Engineering of Cognitive Robot Applications Using Procedural Parameters and Complex event Processing," The ACM SIGPLAN conference on Systems, Programming, Languages and Applications: Software for Humanity 2016, Amsterdam, Netheland, Oct. 30-Nov. 4, 2016.	2016年10月

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
48	小木曾 里樹	韓国	英語	有	Satoki Ogiso, Koichi Mizutani, Keiichi Zempo, Naoto Wakatsuki and Yuka Maeda, "Effect of intermediate material at contact surface of bone-conducted sound transducer on propagation characteristic," The 37th Symposium on UltraSonic Electronics, Daeyon University, Busan, Korea, Oct. 25-27, 2016.	2016年10月
49	小木曾 里樹	つくば	日本語	無	小木曾 里樹, 水谷孝一, 善甫 啓一, 若槻 尚斗, 前田 祐佳: "無教室内への影響," 日本音響学会, 筑波大学, Oct. 29-30, 2016.	2016年10月
50	佐野 祐士 佐藤 晃矢 白石 僚一郎	カナダ	英語	有	Yuji Sano, Koya Sato, Ryoichiro Shiraishi and Mai Otsuki, "Sports Support System: Augmented Ball Game for Filling Gap between Player Skill Levels," 2016 ACM on Interactive Surfaces and Spaces, Niagara Falls, ON, Canada, Nov. 6-9, 2016.	2016年11月
51	佐藤 晃矢	アメリカ	英語	有	Koya Sato and Jun Izawa, "An Influence of motor costs in human reinforcement learning," Annual Meeting Society of Neuroscience 2016, San Diego, U.S.A., Nov. 12-16, 2016.	2016年11月
52	小木曾 里樹	アメリカ	英語	有	Satoki Ogiso, Koichi Mizutani, Keiichi Zempo, Naoto Wakatsuki and Yuka Maeda, "Effect of characteristics compensation between air-conduction and bone-conduction headphones on sound localization in an anechoic chamber," The 5th ASA ASJ Joint Meeting, Hawaii, U.S.A., Nov. 28-Dec. 2, 2016.	2016年11月
53	白石 僚一郎 佐藤 晃矢 佐野 祐士	千葉	英語	有	Ryoichiro Shiraishi, Koya Sato, Yuji Sano and Mai Otsuki, "Haptic Directional Instruction System for Sports," Asia Haptics 2016, Kashiwanoha, Japan, Nov. 29-Dec. 1, 2016.	2016年11月
54	ISHAC Karlos	千葉	英語	有	Karlos Ishac, "A Smart Cushion System with Vibrotactile Feedback for Active Posture Correction," Asia Haptics 2016, Kashiwanoha, Japan, Nov.29-Dec. 1, 2016.	2016年11月
55	ERICH Floris Marc Arden	アメリカ	英語	有	Floris Marc Arden Erich and Kenji Suzuki, "Laval Virtual ReVolutionCognitive Robot Programming using Procedural Parameters and Complex Event Processing," 2016 IEEE International Conference on Simulation, Modeling, and Programming for Autonomous Robots, San Francisco, CA, U.S.A., Dec 13-16, 2016.	2016年12月
56	小木曾 里樹	つくば	日本語	無	小木曾 里樹, 川岸 卓司, 水谷 孝一, 善甫 啓一, 若槻尚斗: "音響ビーコンとマイクアレイによる移動ロボットの位置推定," SAT テクノロジー・ショーケース 2017, つくば国際会議場, Jan. 31, 2017.	2017年1月
57	佐藤 綱祐	東京	日本語	有	佐藤 綱祐, 上林 功, 小野田 圭祐, 片桐 祥太, 矢野 博明, 岩田 洋夫: "CarryOtto: 人と機械が一体化した移動デバイスの開発," インタラクション 2017, 明治大学, Mar. 2-4, 2017.	2017年3月
58	JAZBEC Maša	オーストリア	英語	有	Maša Jazbec, Shuichi Nishio, Hiroshi Ishiguro, Masataka Okubo and Christian Penalzoza, "Body-swapping experiment with an android - Investigation of the relationship between agency and a sense of ownership toward a different body," The 2017 ACM/IEEE International Conference on Human-Robot Interaction, Vienna, Austria, Mar. 6-9, 2017.	2017年3月
59	大岡 岳	横浜	英語	有	Takeshi Ozu, Aki Yamada, Yuki Enzaki and Hiroo Iwata, "Escaping Chair: Furniture-Shaped Device Art," The 10th ACM International Conference on Tangible, Embedded and Embodied Interactions (TEI 2017), Yokohama, Japan, Mar. 20-23, 2017.	2017年3月
60	西田 惇	横浜	英語	有	Robb Mitchell, Jun Nishida, Enrique Encinas, Shunichi Kasahara, "We-Coupling! Experiential Evaluation and Extensions of Co-Embodiment," The 10th ACM International Conference on Tangible, Embedded and Embodied Interactions (TEI 2017), Yokohama, Japan, Mar. 20-23, 2017.	2017年3月
61	BOEM Alberto 佐々木 海 加納 青李	横浜	英語	有	Robb Mitchell, Jun Nishida, Enrique Encinas and Shunichi Kasahara, "Vital+Morph: A Shape-Changing Interface for Remote Biometric Monitoring," The 10th ACM International Conference on Tangible, Embedded and Embodied Interactions (TEI 2017), Yokohama, Japan, Mar. 20-23, 2017.	2017年3月

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
62	佐藤 綱祐	フランス	英語	有	Ryoichi Ando, Mai Orikasa, Minato Takeda, Hirohiko Hayakawa, Kosuke Sato, Isao Uebayashi, Kouta Minamizawa and Masahiko Inami, "Superhuman Sports Games in Laval Virtual," 2017 Laval Virtual ReVolution, Laval, France, Mar. 22-26, 2017.	2017年3月

平成 29 年度（ポスター・デモ発表）

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
63	西田 惇	アメリカ	英語	有	Jun Nishida and Kenji Suzuki, "bioSync: A Paired Wearable Device for Blending Kinesthetic Experience", ACM SIGCHI 2017 Papers, USA, May 6-11, 2017	2017年5月
64	佐々木 海	郡山	日本語	無	佐々木 海, 鈴木 健嗣, "上体運動により階段昇降を実現する車椅子型移動機器 (第2報)", ロボティクス・メカトロニクス講演会 2017, 福島, May 12, 2017	2017年5月
65	利根 忠幸	郡山	日本語	無	利根 忠幸, 鈴木 健嗣, "磁性流体を用いたシート型ソフトロボットによる液体マニピュレーション", ロボティクス・メカトロニクス講演会, ビックパレットふくしま, May 11, 2017	2017年5月
66	小崎 湧太	郡山	日本語	無	小崎 湧太, 鈴木 健嗣, "柔軟素材の変形により開眼・閉眼動作を支援する顔面装着型ロボット", ロボティクス・メカトロニクス講演会 2017, ビックパレットふくしま, May 12, 2017	2017年5月
67	西田 惇	アメリカ	英語	有	Jun Nishida, Shunichi Kasahara, and Kenji Suzuki, "Wired Muscle: Generating Faster Kinesthetic Reaction by Interpersonally Connecting Muscles" SIGGRAPH 2017 Emerging Technologies, USA, 2017	2017年8月
68	佐々木 海	カナダ	英語	有	Kai Sasaki, and Kenji Suzuki, "Human-Powered Stair Travelling Mobility Vehicle with Posture Transition System", IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems 2017, Canada, Sep. 24, 2017	2017年9月
69	倉本 尚美	スペイン	英語	有	Naomi Kuramoto, Dushyantha Jayatilake, Kikue Hidaka, and Kenji Suzuki, "Automatic Measurements of Neck Flexion Using Smartphone-Based Swallowing Monitor", 7th European Society of Swallowing Disorder Congress, Barcelona, Spain, Sep. 21-22, 2017	2017年9月
70	小木曾 里樹	仙台	日本語	有	小木曾 里樹, 水谷 孝一, 善甫 啓一, 若槻 尚斗, 前田 祐佳, "Relationship between contact force and electrical impedance of bone-conducted sound transducer on human head", 超音波エレクトロニクスの基礎と応用に関するシンポジウム講演論文集, 3P2-7, 仙台, Oct. 27, 2017	2017年10月
71	BOEM Alberto	つくば	英語	無	Arvin Valderrama, Kotaro Sakamoto and Alberto Boem. Tsukuba Global Science Week 2017, Oct., 2017	2017年10月
72	ERICH Floris Marc Arden	つくば	英語	有	Floris Erich, Masakazu Hirokawa, and Kenji Suzuki, "A Visual Environment for Reactive Robot Programming of Macro-level Behaviors", Social Robotics, 9th International Conference, ICSR 2017, Nov., 2017	2017年11月
73	佐藤 綱祐	仙台	日本語	無	佐藤 綱祐, 上林 功, 片桐 祥太, 矢野 博明, 岩田 洋夫, "小型モータデバイスをを用いた新スポーツの開発と運動特性", 第18回計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会, Dec. 20-22, 2017	2017年12月
74	Xie Chun	金沢	日本語	無	謝 淳, 亀田 能成, 鈴木 健嗣, 北原 格, "大規模 Projector-Camera システムに適したキャリブレーション手法", 電子情報通信学会 HCG シンポジウム 2017 論文集, Dec., 2017	2017年12月
75	BOEM Alberto	東京	英語	無	Arvin Lapiz Valderrama, Sakura Eri Bautista Maezono, Kotaro Sakamoto, and Alberto Boem. "The Visualizing Thoughts Project" Program for Leading Graduate Schools, Leave a Nest Co., Ltd. -The Business Plan Competition. Finalist.	2018年1月
76	佐野 祐士	つくば	日本語	無	佐野 祐士, 大高 佑介, 水谷 孝一, 若槻 尚斗, 海老原 格, 安藤 泰雅 "体積指標に基づくコーヒー豆焙煎過程のモニタリング", 2018年農業施設学会学生・若手研究発表会, 筑波大学, Mar. 24, 2018	2018年2月

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
77	佐藤 綱祐	東京	日本語	無	佐藤 綱祐, 陽奥 幸宏, 杉妻 謙, 坂井 聡, 水野 義博, "ひらがな書字学習における触覚化支援手法", 情報処理学会インタラクティブ 2018, Tokyo, Mar. 5-7, 2018	2018年3月
78	BOEM Alberto	ドイツ	英語	無	Alberto Boem, "Encounter-type Haptic Interfaces for Virtual Reality Musical Instruments", IEEE VR Conference 2018, Doctoral Consortium, Germany, Mar., 2018	2018年3月
79	XIE Chun	ドイツ	英語	有	Chun Xie, Hidehiko Shishido, Yoshinari Kameda, Kenji Suzuki and Itaru Kitahara, "A Calibration Method for Large-Scale Projection Based Floor Display System", Proc. of IEEE Virtual Reality 2018, Reutlingen, Germany, Mar., 2018	2018年3月

平成 30 年度 (ポスター・デモ発表)

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
80	小崎 湧太	福岡	日本語	無	小崎 湧太, 鈴木 健嗣: "開眼・閉眼動作を支援する顔面装着型ロボットの開発 (第2報)", ロボティクス・メカトロニクス講演会 2018, 北九州コンベンションゾーン, Jun. 4, 2018	2018年6月
81	利根 忠幸	福岡	日本語	無	利根 忠幸, 鈴木 健嗣: "磁性流体の界面変形特性を用いた液滴マニピュレーション", 第30回ロボティクス・メカトロニクス講演会 2018 in Kitakyusyu, 北九州観光コンベンションゾーン, Jun. 4, 2018	2018年6月
82	小木曾 里樹	福岡	日本語	無	小木曾 里樹, 水谷 孝一, 若槻 尚斗, 海老原 格: "マイクロホンアレイ素子間の相関を尤度と仮定する屋内音響測位手法", 日本機械学会ロボティクスメカトロニクス講演会 2018, 北九州 Overseas コンベンションゾーン, Jun. 4, 2018	2018年6月
83	本間 由樹子	福岡	日本語	無	本間 由樹子, 鈴木 健嗣: "顔表面のなぞり動作により化粧行為を支援する卓上型ロボット", ROBOMECH2018, 北九州 Overseas コンベンションゾーン, Jun. 5, 2018	2018年6月
84	佐々木 海	福岡	日本語	無	佐々木 海, 鈴木 健嗣: "能動型回転脚機構により階段昇降を実現する車椅子型移動機器", ロボティクス・メカトロニクス講演会 2018, 北九州 Overseas コンベンションゾーン, Jun. 5, 2018	2018年6月
85	LOBO Joana Polónia Coelho de Azeredo	香港	英語	有	Joana LOBO, Kenji SUZUKI: "Designing Social Playware Mediated Communication with Contingent Feedback Devices", ACM SIGCHI Conference on Designing Interactive Systems (DIS) 2018, Hong Kong, Jun. 9-13, 2018	2018年6月
86	西田 惇	ドイツ	英語	無	Jun Nishida: "HYPERPERSPECTIVE: Changing Perspective by Wearable I/O Devices to Understand, Communicate, and Cooperate with People", Dagstuhl Seminar 18322, Germany, Aug. 6-12, 2018	2018年8月
87	BRUMLEY John	オーストラリア	英語	無	Brumley, J., Guattari Hero: Ars Electronica Festival, Linz, Austria, September 6-11, 2018. Brumley, J. Prime Directive. Ars Electronica Festival, Linz, Austria, Sep. 6-11, 2018	2018年9月
88	小崎 湧太	オーストリア	英語	無	Yuta Kozaki: "Facial Wearable Robot for supporting eyelid movement", Ars Electronica 2018, Austria, Sep. 6-10, 2018	2018年9月
89	小崎 湧太	スロベニア	英語	無	Yuta Kozaki: "A Facial Wearable Robot for supporting eyelid movement", Spectrum Artium 2018, Trbovlje, Sep. 13-15, 2018	2018年9月
90	敷根 伸光	ポーランド	英語	有	Nobumitsu Shikine, Toshimasa Yamanaka, Letizia Jaccheri, Javier Gomez and Junichi Hoshino: "NOVELICA: A Visual Novel System to Make People Forget Their Negative Feelings on Mathematics", IFIP-ICCE2018, Poznan, Poland, Sep. 17-20, 2018	2018年9月
91	石切山 順一	東京	日本語	無	石切山 順一, 松代 直樹, 鈴木 健嗣: "ウェアラブルカメラを用いた顔面神経麻痺診断支援システム", 第23回日本顔学会全国大会 (フォーラム顔学 2018), 明治大学中野キャンパス, Sep. 1-2, 2018	2018年9月
92	糸井川 椋	愛知	日本語	無	糸井川 椋: "Monitoring Orthostatic Instantaneous Pulse Rate Change using Photoplethysmography", 生体医工学シンポジウム 2018, Sep. 14-15, 2018	2018年9月

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
93	杉本 実夏	茨城	英語	有	Minatsu SUGIMOTO, Eitaro YAMATSUTA, Hiroki NAGANUMA, Riku ARAKAWA, Yudai SHIRO, Masayuki TERAMOTO: "Design of a smart pacifier to detect dehydration in babies and shaping parents' behavior", Tsukuba Global Science Week, Tsukuba, Sep. 22, 2018	2018年9月
94	西田 惇	ドイツ	英語	有	Jun Nishida and Kenji Suzuki: "Wearable Kinesthetic I/O Device for Sharing Muscle Compliance", ACM UIST 2018 Poster, Germany, Oct. 14-17, 2018	2018年10月
95	杉山 太成	アメリカ	英語	有	Taisei Sugiyama, Nicolas Schweighofer, and Jun Izawa: "The effects of subjective value for meta-learning in visuomotor transformation.", Neuroscience 2018, CA, USA, Nov. 3-7, 2018	2018年11月
96	小岩 慎太郎	韓国	英語	有	Shintaro Koiwa: "A movable humanoid robot for presenting walking sensation of a giant", AsiaHaptics 2018, Songdo, Korea, Nov. 14-16, 2018	2018年11月
97	BRUMLEY John	メキシコ	英語	有	John Brumley: "Developments in Spatially Immersive Sound" Third Annual Taboo-Transgression-Transcence in Art & Science 2018, Mexico City, Mexico, Nov. 11-13, 2018	2018年11月
98	西田 惇	東京	日本語	有	西田 惇, 鈴木 健嗣: "bioSync: 筋活動共有に基づく人々の共感を支援する身体同調技術", DC EXPO 2019, Nov. 14-16, 2019	2018年11月
99	杉本 実夏	韓国	英語	有	Minatsu Sugimoto, Hiroo Iwata, and Hiroya Igarashi: "Improvement of Walking Motivation by Vibratory Display Powered by Ankle Generation Device", Asia Haptics, Songdo, Korea, Nov. 14-16, 2018	2018年11月
100	佐藤 晃矢	東京	英語	有	Koya Sato: "Design and Implementation of the Augmented Volleyball Court", ISS18 companion proceedings, Tokyo Japan, Nov. 25-28, 2019	2018年11月
101	ISHAC Karlos	オーストラリア	英語	無	Karlos Ishac and Kenji Suzuki: "LifeChair: A Smart Cushion for Active Posture Correction", Startcon 2018, Sydney, Australia, Nov. 30-Dec. 1, 2018	2018年11月
102	佐藤 綱祐	東京	英語	有	Kosuke Sato, Keita Watanabe, Hiroaki Yano, and Hiroo Iwata: "Motion Recognition for Automatic Control of a Block Machine", ACM Virtual Reality Software and Technology, Tokyo, Japan, Nov. 28-Dec. 1, 2018	2018年11月
103	糸井川 椋	福岡	日本語	無	糸井川 椋, 小幡 哲史, 棚瀬 廉人: "ギター演奏時における人間の撥弦動作および音情報計測", 音響学会音楽音響研資, 37(9), MA2018-92, pp. 99-104, 2019	2019年2月
104	KIM SunKyoung	韓国	英語	無	Min-Gyu Kim, Nahyun Lee, SunKyoung Kim, Sang-Seok Yun: "User Perception on IoT-based Social Robot Applications in Hospital Settings", ACM/IEEE HRI 2019, Daegu, Korea, Mar. 11, 2019	2019年3月
105	XIE Chun	大阪	英語	有	Chun Xie, Chun Kwang Tan, Taisei Sugiyama: "The effect of hanger reflex on virtual reality redirected walking", IEEEVR 2019, Osaka, Japan, Mar. 22, 2019	2019年3月
106	佐野 祐士	大阪	英語	有	Yuji Sano, Koya Sato, Ryoichiro Shiraishi, Mai Otsuki: "Player Perception Augmentation for Beginners Using Visual and Haptic Feedback in Ball Game", IEEE VR 2019, Osaka, Mar. 23-27, 2019	2019年3月
107	BOEM Alberto	大阪	英語	有	Alberto Boem, Yuuki Enzaki, Hiroaki Yano, Hiroo Iwata: "Human Perception of a Haptic Shape-changing Interface with Variable Rigidity and Size". IEEE VR 2019, Osaka, Japan, Mar. 23-27, 2018	2019年3月
108	ROJAS FERRER Cesar Daniel	大阪	英語	有	Cesar Daniel Rojas Ferrer, Hidehiko Shishido, Itaru Kitahara and Yoshinari Kameda: "Visual exploratory activity under microgravity conditions in VR: An exploratory study during a parabolic flight", 2019 IEEE Conference on Virtual Reality and 3D User Interfaces (VR), Osaka, Japan, Mar. 23-27, 2019	2019年3月

令和元年度（ポスター・デモ発表）

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
109	西村 勇輝	広島	日本語	無	Yuki Nishimura and Tomoyuki Yamaguchi, "Attitude Control Method of Multi-Copter" Type Mobile Robot on Steep Slope", Robomech2019, Hiroshima, Japan, Jun. 5-8, 2019	2019年6月
110	椋原 輝	広島	日本語	無	Akira Kashihara and Tomoyuki Yamaguchi, "Verification of Subjective Palatability Sensing Using Facial Biological Information", Robomech2019, Hiroshima, Japan, Jun. 5-8, 2019	2019年6月
111	本間 由樹子	広島	日本語	無	本間 由樹子, 鈴木 健嗣, "顔表面のなぞり動作による化粧行為を支援する卓上型ロボット(第2報)", ロボティクス・メカトロニクス講演会 2019 in Hiroshima, 広島国際会議場, Jun. 7, 2019	2019年6月
112	佐々木 海	広島	日本語	無	佐々木 海, パエズディエゴ, 杉本 実夏, 杉山 太成, 鈴木 健嗣: "起立着座動作と排泄行為を支援する小児用の受動型外骨格", ロボティクス・メカトロニクス講演会 2019, 広島国際会議場, Jun. 7, 2019	2019年6月
113	TAN Chun Kwang	兵庫	英語	無	CK Tan, H Kadone, K Miura, T Abe, M Koda, Y Hada, M Yamazaki, Y Sankai, K Suzuki: "Muscle synergies and lumbar load towards fatigue during repetitive stoop lifting with a lumbar support exoskeleton", ISPRM 2019, Kobe, Japan, Jun. 8-13, 2019	2019年6月
114	TAN Chun Kwang	兵庫	英語	無	CK Tan, H Kadone, H Watanabe, A Marushima, Y Hada, M Yamazaki, Y Sankai, K Suzuki: "Lateral Symmetry of Sinergies in Lower Limb Muscles of Acute Post-stroke Patients After Robotic Intervention", ISPRM 2019, Kobe, Japan, Jun. 8-13, 2019	2019年6月
115	DOLLACK Felix	英国	英語	有	Felix Benedict Dollack, Monica Perusquía-Hernández, Hideki Kadone and Kenji Suzuki: "Effect of voluntary gaze movement on gait steering control", ISPGR 2019, Edinburgh, UK, Jun. 29 - Jul. 5, 2019	2019年6月
116	DOLLACK Felix	英国	英語	有	Felix Benedict Dollack Dollack, Hideki Kadone, Monica Perusquía-Hernández and Kenji Suzuki: "Head anticipation during auditory instructed locomotion", ISPGR 2019, Edinburgh, UK, Jun. 29 - Jul. 5, 2019	2019年6月
117	TAN Chun Kwang	英国	英語	無	CK Tan, H Kadone, H Watanabe, A Marushima, Y Hada, M Yamazaki, Y Sankai, K Suzuki: "Robotic intervention improves lateral gait symmetry in acute post-stroke patients", ISPGR 2019, Edinburgh, England, Jun. 30-Jul. 4, 2019	2019年6月
118	TAN Chun Kwang	英国	英語	無	CK Tan, H Kadone, K Miura, T Abe, M Koda, Y Hada, M Yamazaki, Y Sankai, K Suzuki: "Muscle coordination changes with assistance from lumbar support exoskeleton", ISPGR 2019, Edinburgh, England, Jun. 30-Jul. 4, 2019	2019年6月
119	TAN Chun Kwang	英国	英語	無	CK Tan, H Kadone, H Watanabe, A Marushima, Y Hada, M Yamazaki, Y Sankai, K Suzuki: "Differences in lateral symmetry of muscle synergies between acute post-strokepatients undergoing robot-assisted therapy and conventional therapy", ISPGR 2019, Edinburgh, England, Jun. 30-Jul. 4, 2019	2019年6月
120	桑原 隆志	アメリカ	英語	有	Rintaro Takashima, Takashi Kuwahara and Masanobu Imahori : "A novel wearable mobility device adapting to posture of wearer and environments with steps", HCI International 2019, Orlando, USA, Jul. 26-31, 2019	2019年7月
121	高嶋 倫太郎	アメリカ	英語	有	Rintaro Takashima, Takashi Kuwahara and Masanobu Imahori : "A novel wearable mobility device adapting to posture of wearer and environments with steps", HCI International 2019, Orlando, USA, Jul. 26-31, 2019	2019年7月
122	杉山 太成	東京	英語	無	Taisei Sugiyama, Nicolas Schweighofer, Jun Izawa "Optimizing learning rate by meta-leading to maximize reward in visuomotor learning", 第13回 Motor Control 研究会, 東京大学弥生講堂, Aug. 23, 2019	2019年8月
123	REBELO DAL'BELLO Lucas	東京	英語	無	Lucas R. Dal'Bello and Jun Izawa: "History dependency of error-backpropagation capability leads to maladaptation in a redundant motor task", 第13回 Motor Control 研究会, 東京大学弥生講堂, Aug. 23-25, 2019	2019年8月

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
124	高嶋 倫太郎	徳島	日本語	有	高嶋 倫太郎, 河本 浩明, 山海 嘉之: "手指動作支援のための超多関節外骨格に関する研究", 生体医工学シンポジウム 2019, 徳島, Sep. 6-7, 2019	2019年9月
125	進藤 裕太	徳島	日本語	無	進藤 裕太, 鈴木 健嗣: "頸部装着型機器により取得する音響信号を利用した咳嗽計測", 第17回生体医工学シンポジウム, 徳島大学, Sep. 6-7, 2019	2019年9月
126	平岩 匡	東京	日本語	無	平岩 匡, 岩田 洋夫: "可搬全立体角没入ディスプレイ Mobile Large Space の設計手法と実装", 第24回バーチャルリアリティ学会大会, 東京大学本郷キャンパス, Sep. 11, 2019	2019年9月
127	糸井川 椋	ドイツ	英語	有	Ryo Itoiagawa: "Proposal of a human-instrument interaction model and its basic examination using electromyogram", ISMA2019, Detmold, Germany, Sep. 13-17, 2019	2019年9月
128	本間 由樹子	北海道	日本語	無	本間 由樹子, 鈴木 健嗣: "顔表面へ化粧品を塗布する卓上型ロボットの開発", 第24回日本顔学会大会, 北海道情報大学, Sep. 14, 2019	2019年9月
129	石切山 順一	北海道	日本語	無	石切山 順一, 鈴木 健嗣: "視覚障害者の化粧行為を支援するモバイルインタフェース", 第24回日本顔学会大会 (フォーラム顔学 2019), 北海道情報大学, Sep. 14-15, 2019	2019年9月
130	XIE Chun	中国	英語	有	Chun Xie, Hidehiko Shishido, Yoshinari Kameda, Itaru Kitahara: "A Projector Calibration Method Using a Mobile Camera for Projection Mapping System", ISMAR 2019, Beijing, China, Oct. 14-18, 2019	2019年10月
131	ZHONG Ying	アメリカ	英語	有	Ying Zhong, Masaki Matsubara, Makoto Kobayashi and Atsuyuki Morishima: "Understandable Microtasks With No Visual Representation", Hcomp 2019, Skamania Lodge, WA, USA, Oct. 28-30, 2019	2019年10月
132	YANG Chi-Lan	アメリカ	英語	有	Chi-Lan Yang, Chien-Wen (Tina) Yuan, and Hao-Chuan Wang: "When Knowledge Network is Social Network: Understanding Collaborative Knowledge Transfer in Workplace." Proc. ACM Hum.-Comput. Interact. 3, CSCW, Article 164. Austin, Texas, USA, Nov. 9-13, 2019	2019年11月
133	YANG Chi-Lan	アメリカ	英語	有	Chi-Lan Yang, Hao-Chuan Wang: "Understanding How Social Prompts Influence Expert's Sharing of How-to Knowledge", CSCW'19 Companion, Austin, Texas, USA, Nov. 9-13, 2019	2019年11月
134	DOLLACK Felix	愛知	英語	無	Felix Benedict Dollack, Monica Perusquia-Hernandez, Hideki Kadone and Kenji Suzuki: "Auditory Locomotion Guidance System For Spatial Localization", IEEE MHS 2019, Nagoya, Japan, Dec. 1-4, 2019	2019年12月
135	REBELO DAL'BELLO Lucas	東京	英語	無	Lucas R. Dal'Bello and Jun Izawa: "Maladaptation in a redundant motor task is caused by history dependency of error-backpropagation capability", The Joint Symposium on Fusion of Biomedical and Physical/Informational Sciences in Neurobiology, Tokyo, Nov. 26, 2019	2019年11月
136	杉山 太成	東京	英語	無	Taisei Sugiyama, Nicolas Schweighofer, and Jun Izawa: "Optimizing learning rate by meta-learning to maximize reward in visuomotor learning", The Joint Symposium on Fusion of Biomedical and Physical/Informational Sciences in Neurobiology, Tokyo, Nov. 26, 2019	2019年12月
137	WU Yihao	東京	英語	無	Yihao Wu, Masahiko Morita, Jun Izawa: "Reward prediction errors, not sensory prediction errors, plays a major role for model switching in human reinforcement learning.", Next Generation Brain Project Winter Symposium 2019, Hitotsubashi University, Dec. 18, 2019	2019年12月
138	杉山 太成	東京	英語	無	Taisei Sugiyama, Nicolas Schweighofer, and Jun Izawa: "Optimizing learning rate by meta-learning to maximize reward in visuomotor learning", 「次世代脳プロジェクト冬のシンポジウム」, Dec. 18-21, Tokyo	2019年12月
139	YANG Chi-Lan	京都	英語	無	Chi-Lan Yang, Hideaki Kuzuoka. Using respective external prompts for instructors and learners to mediate remote instruction-giving. CSCW Winter School. Dec. 13-14, 2019, Kyoto, Japan.	2019年12月

	氏名	場所	言語	査読	タイトル	時期
140	TAN Chun Kwang	アメリカ	英語		TAN Chun Kwang, KADONE, Hideki, WATANABE Hiroki, MARUSHIMA Aiki, HADA, Yasushi, YAMAZAKI Masashi, SANKAI Yoshiyuki, MATSUMURA Akira, SUZUKI Kenji: "Gait symmetry differences between acute post-stroke patients in robot-assisted therapy and conventional therapy", ISPRM 2020, Orlando, Florida, USA, 2020	2020年3月

(3) 論文発表

平成 26 年度

	氏名	言語	査読	タイトル	時期	備考
1	利根 忠幸	英語	有	Tadayuki Tone, Francesco Visentin, and Kenji Suzuki, "Sheet type soft robot with magnetic fluid for object transportation", Proceeding of 2014 IEEE International Conference on Automation Science and Engineering, pp.852-857, 2014	2014年8月	〔口頭発表〕の1で発表
2	村田 耕一	英語	有	Koichi Murata, Akira Matsushita, Kousaku Saotome, Hiroaki Kawamoto, Yoshiyuki Sankai, "Development of an MR-compatible Configurable Brush Stimulation Device", Proceeding of the 36th Annual International Conference of the IEEE EMBS, pp.2101-2106, 2014	2014年8月	〔口頭発表〕の2で発表
3	小木曾 里樹	英語	有	Satoki Ogiso, Koichi Mizutani, Keiichi Zempo, and Naoto Wakatsuki, "Analysis of sound propagation in human head for bone-conduction headphones using finite element method," Proceeding of the 3rd IEEE Global Conference on Consumer Electronics, pp.573-576, 2014	2014年10月	〔口頭発表〕の5で発表
4	江國 翔太	英語	有	Shota Ekuni, Yoshiyuki Sankai, "Non-Invasive Measurement Method of Blood Hematocrit for Management of Extracorporeal Circulation", Proceeding of 2014 IEEE/SICE International Symposium on System Integration, pp.76-81, 2014	2014年12月	〔口頭発表〕の6で発表

平成 27 年度 (論文発表)

	氏名	言語	査読	タイトル	時期	備考
5	西田 惇 高鳥 光 佐藤 綱祐	英語	有	Jun Nishida, Hikaru Takatori, Kosuke Sato and Kenji Suzuki, "CHILDHOOD: Wearable Suit for Augmented Child Experience", Virtual Reality International Conference, Laval, France, Apr. 8-12, 2015	2015年4月	〔口頭発表〕の7で発表
6	江國 翔太	日本語	有	江國 翔太, 山海 嘉之: "キャリブレーションを必要としない光学的手法による非侵襲・連続的ヘマトクリット計測," 電気学会論文誌.C, 135, 4, pp.387-395, 2015	2015年4月	
7	佐藤 晃矢	日本語	有	佐藤 晃矢, 岡 瑞起, 橋本 康弘, 加藤 和彦: "Yule-Simon 過程によるタグ共起ダイナミクスのモデル化と分析," 人工知能学会論文誌, 30 巻 5号, pp.667-674, 2015	2015年4月	
8	佐藤 綱祐	英語	有	Kosuke Sato, Yuki Hashimoto, Hiroaki Yano and Hiroo Iwata, "Development of Ball Game Defense Robot Based on Physical Properties and Motion of Human," Haptic Interaction, Vol. 277, Lecture Notes in Electrical Engineering, pp.261-265, 2015	2015年6月	
9	高鳥 光	英語	有	Hikaru Takatori, Hiroaki Yano, Hiroo Iwata, "Panoramic Movie-Rendering Method with Superimposed Computer Graphics for Immersive Walk-Through System," Haptic Interaction, Vol. 277, Lecture Notes in Electrical Engineering, pp.277-284, 2015	2015年6月	
10	西田 惇	英語	有	Jun Nishida, Kei Nakai, Akira Matsushita, and Kenji Suzuki: "Haptic Augmentation of Surgical Operation using a Passive Hand Exoskeleton", Haptic Interaction, Vol. 277, Lecture Notes in Electrical Engineering, pp.237-243, 2015	2015年6月	
11	JAZBEC Maša	英語	有	Jazbec Maša: "Apologists of the new civilization," Art and Science Magazine FOLIO, pp.42-44, 2015	2015年6月	
12	JAZBEC Maša	スロベニア語	有	Jazbec Maša: "Exoskeleton HAL," Engineering Magazine IRT 3000, pp.186-187, 57/2015, 2015	2015年6月	

	氏名	言語	査読	タイトル	時期	備考
13	小木曾 里樹	英語	有	Satoki Ogiso, Takuji Kawagishi, Koichi Mizutani, Naoto Wakatsuki, and Keiichi Zempo: "Relation between sound sources layout and error of self-localization method in two-dimension for mobile robot using microphone array," Proceedings of the 22th International Congress on Sound & Vibration (ICSV22), T01.RS01-0626(R), 2015	2015年7月	〔口頭発表〕 の10で発表
14	JAZBEC Maša	スロベニア語	有	Jazbec Maša: "Robot Mask," Engineering Magazine IRT 3000, 58/2015, p.176, 2015	2015年8月	
15	潘 雅冬	英語	有	Yadong Pan, Haruka Okada, Toshiaki Uchiyama, and Kenji Suzuki: "On the Reaction to Robot's Speech in a Hotel Public Space", International Journal of Social Robotics, 08/2015, DOI:10.1007/s12369-015-0320-0, 2015	2015年8月	
16	丹野 智博	英語	有	Tomohito Tanno, Kazumasa Horie, Takaaki Kobayashi, and Masahiko Morita: "Effect of Pattern Coding on Pattern Classification Neural Networks," International Journal of Machine Learning and Computing, Vol.5, No.4, pp.339-343, 2015	2015年8月	
17	利根 忠幸	英語	有	Tadayuki Tone and Kenji Suzuki: "Deforming Control for Object Transportation with Ferrofluid-Based Sheet Type Soft Robot", Proceeding of 2015 IEEE International Conference on Automation Science and Engineering, pp.1171-1176, 2015	2015年8月	〔口頭発表〕 の12で発表
18	潘 雅冬	英語	有	Yadong Pan, Masakazu Hirokawa, and Kenji Suzuki: "Measuring K-degree Facial Interaction between Robot and Children with Autism Spectrum Disorders", Proceedings of the 24th IEEE International Symposium on Robot and Human Interactive Communication, pp.48-53, 2015	2015年9月	〔口頭発表〕 の13で発表
19	小木曾 里樹	英語	有	Satoki Ogiso, Takuji Kawagishi, Koichi Mizutani, Naoto Wakatsuki, and Keiichi Zempo: "Self-localization method for mobile robot using acoustic beacons," ROBOMECH Journal, (2015)2:12, DOI:10.1186/s40648-015-0034-y, 2015	2015年9月	
20	若生 遼	英語	有	Ryo Wako: "Position of the Egocenter in the Perception of Peri-Personal Space Using Haptics," Proceeding of the 4rd IEEE Global Conference on Consumer Electronics, pp.470-472, 2015	2015年10月	〔口頭発表〕 の19で発表
21	小木曾 里樹	英語	有	Satoki Ogiso, Koichi Mizutani, Keiichi Zempo, and Naoto Wakatsuki: "Measurement of the Differential Transfer Function between Bone-Conduction and Air-Conduction for Sound Localization," Proceeding of the 4rd IEEE Global Conference on Consumer Electronics (IEEE GCCE2015), pp.135-138, 2015	2015年10月	〔ポスター・ デモ発表〕 の27で発表
22	小木曾 里樹	英語	有	Keiichi Zempo, Satoki Ogiso, Koichi Mizutani and Naoto Wakatsuki: "Measurement of the Distance Difference of Acoustic Beacons Using Direct Conversion Receiver," Proceeding of the 4rd IEEE Global Conference on Consumer Electronics (IEEE GCCE2015), pp.139-142, 2015	2015年10月	〔ポスター・ デモ発表〕 の28で発表
23	敷根 伸光	英語	有	Nobumitsu Shikine, Toshimasa Yamanaka, and Junichi Hoshino: "The Pedagogical Agent in Learning Mathematics for Undergraduate Students," Proceeding of IASDR 2015, pp.2902-2912, 2015	2015年11月	〔口頭発表〕 の20で発表
24	西田 惇 高鳥 光 佐藤 綱祐	英語	有	Akihiko Shirai, Jun Nishida, Takahiro Sato, Kosuke Sato, Hikaru Takatori and Susumu Tachi, "Innovation in the age of virtual reality through organizing international student competition", SIGGRAPH ASIA 2015 Symposium on Education, Kobe, Nov. 2-5, 2015	2015年11月	〔口頭発表〕 の21で発表
25	JAZBEC Maša	スロベニア語	有	Jazbec Maša: "Childhood Experience," Engineering Magazine IRT 3000, 60/2015, p.176, 2015	2015年12月	
26	村田 耕一	英語	有	Koichi Murata, Akira Matsushita, Kousaku Saotome, Hiroaki Kawamoto, and Yoshiyuki Sankai: "MR-compatible Stimulation Device Capable of Providing Passive and Active Finger Movements," 2015 IEEE Conference on Robotics and Biomimetics, pp.1163-1168, 2015	2015年12月	〔口頭発表〕 の24で発表

	氏名	言語	査読	タイトル	時期	備考
27	CHACIN Aisen Carolina, 大岡 岳	英語	有	Chacin Aisen Carolina, Takeshi Oozu, Hiroo Iwata, "Submersible Haptic Search Glove," TEI 2016, Eindhoven, Netherlands, Feb. 14 - 17, 2016	2016年2月	[ポスター・デモ発表]の33で発表
28	敷根 伸光	日本語	有	林 勇希, 敷根 伸光, 秋場 猛, 星野 准一: "高齢者の協調動作をトレーニングするためのゲームシステム," 情報処理学会論文誌ジャーナル, pp.xx-xx, 2016	2016年3月	

平成 28 年度 (論文発表)

	氏名	言語	査読	タイトル	時期	備考
29	佐藤 晃矢	英語	無	Koya Sato, Mizuki Oka, Yasuhiro Hashimoto, Takashi Ikegami and Kazuhiko Kato, "How the Nature of Web Services Drives Vocabulary Creation in Social Tagging," arXiv:1604.07993. April 2016.	2016年4月	
30	西田 惇	英語	有	Jun Nishida, "bioSync: Synchronous Kinesthetic Experience among People," in <i>the 2016 CHI Conference on Human Factors in Computing Systems</i> , 2016, 3742-3745. Santa Jose, CA, U.S.A.: ACM.	2016年5月	[ポスター・デモ発表]の38で発表
31	JAZBEC Maša, ERICH Floris	英語	有	Jazbec Maša and Floris Erich, "Investigating Human Identity Using the idMirror Interactive Installation," in <i>the 2016 CHI Conference Extended Abstracts on Human Factors in Computing, 2016</i> , 3851-3854. San Jose, CA, U.S.A.:CHI.	2016年5月	[口頭発表]の28で発表
32	白石 僚一郎	日本語	有	白石 僚一郎, 山海 嘉之 (2016) 「車いす使用者のための立ち上がり動作支援システムの開発」『日本機械学会論文誌 C 編』 Vol. 82, No. 837, pp. 15-00540, 日本機械学会.	2016年5月	
33	丹野 智博	日本語	有	堀江 和正, 末光 厚夫, 丹野 智博, 森田 昌彦 (2016) 「選択的不感化ニューラルネットによる表面筋電位からの手首関節角速度推定」『電子情報通信学会論文誌 D』 Vol. J99-D, No.6, pp.617-629, 電子情報通信学会.	2016年6月	
34	大岡 岳	英語	有	Takeshi Ozu, Aki Yamada, Yuki Enzaki and Hiroo Iwata, "Escaping Chair: Furniture-Shaped Device Art," in <i>ACM SIGGRAPH 2016, 2016</i> , Posters Article No. 8. Anaheim CA, U.S.A.: ACM.	2016年7月	[ポスター・デモ発表]の41で発表
35	江國 翔太 村田 耕一 朝倉 靖成	英語	有	Shota Ekui, Koichi Murata, Yasunari Asakura and Akira Uehara, "Wearable System for Visual Extension Triggered by Bioelectrical Signal," in <i>ACM SIGGRAPH 2016, 2016</i> , Posters Article No. 41, Anaheim, CA, U.S.A.: ACM.	2016年7月	[口頭発表]の31・[ポスター・デモ発表]の42で発表
36	若生 遼	英語	有	Ryo Wako and Saho-Ayabe-Kanamura, "Characteristics of Haptic Personal Sparta; Representaion of Object Relations," <i>PLOS ONE</i> DOI:10.1371/journal.pone.0160095, July 27, 2016.	2016年7月	
37	白石 僚一郎	英語	有	Ryoichiro Shiraishi, Hiroaki Kawamoto and Yoshiyuki Sankai, "Development of Sit-to-Stand and Stand-to-Sit Training System for Hemiplegic Patients," in <i>2016 38th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society</i> , 2016, 4567-4572. Orland, FL, U.S.A.: IEEE.	2016年8月	[ポスター・デモ発表]の43で発表
38	倉本 尚美	英語	有	Naomi Kuramoto, Dushyantha Jayatilake, Kikue Hidaka and Kenji Suzuki, "Smartphone-Based Swallowing Monitoring and Feedback Device for Mealtime Assistance in Nursing Homes," in <i>38th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society</i> , 2016, 5781-5784. Florida, U.S.A.:IEEE.	2016年8月	[口頭発表]の32で発表
39	佐々木 海	英語	有	Kai Sasaki, Yosuke Eguchi and Kenji Suzuki, "A wheelchair with lever propulsion control for climbing up and down stairs," in <i>2016 38th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society, 2016</i> , DOI: 10.1109/EMBC.2016.7591447. Orland, FL, U.S.A.: IEEE.	2016年8月	[口頭発表]の33で発表
40	潘 雅冬	英語	有	Masakazu Hirokawa, Atsushi Funahashi, Yadong Pan, Yasushi Itoh and Kenji Suzuki, "Design of a Robotic Agent that Measures Smile and Facing Behavior of Children with Autistic Spectrum Disorder," in <i>25th IEEE International Symposium on Robot and Human Interactive Communication, 2016</i> , 843-848. New York, U.S.A.: IEEE.	2016年8月	

	氏名	言語	査読	タイトル	時期	備考
41	白石 僚一郎	英語	有	Ryoichiro Shiraishi, Hiroaki Kawamoto and Yoshiyuki Sankai, "Training System Using Ground Reaction Force of the Affected Leg," in <i>Society of Instrument and Control Engineers Annual Conference 2016, 2016</i> , 1502-1507. Tsukuba, Japan: IEEE.	2016年9月	[口頭発表]の38で発表
42	敷根 伸光	英語	有	Nobumitsu Shikine, Yuki Hayashi, Takeshi Akiba, Mami Tanasaki and Junichi Hoshino, "Game System of Coordination Skills Training for Elderly People," in <i>the 15th International Conference on Entertainment Computing, 2016</i> , 24-37. Vienna, Austria: ICEC.	2016年9月	[口頭発表]の41で発表
43	小木曾 里樹	英語	有	Satoki Ogiso, Takuji Kawagishi, Koichi Mizutani, Naoto Wakatsuki and Keiichi Zempo, "Effect of Parameters of Phase-Modulated Sequence Signal on Direction-of-Arrival and Localization error," in <i>7th International Conference on Indoor Positioning and Indoor Navigation, 2016</i> , 141-RP (6 pages). Madrid, Spain: IPIN.	2016年10月	[口頭発表]の42で発表
44	佐野 祐士	英語	有	Yuji Sano, Koichi Mizutani, Keiichi Zempo and Naoto Wakatsuki, "Lung Volume Estimation for Thoracic Respiration Via Chest Size Deviation Measurement," in <i>206 IEEE 5th Global Conference on Consumer Electronics, 2016</i> , 529-533. Kyoto, Japan: IEEE.	2016年10月	[口頭発表]の43で発表
45	糸井川 椋	英語	有	Ryo Itoigawa, Yuka Maeda, Koichi Mizutani and Naoto Wakatsuki, "Evaluation of Measurement Site for Monitoring Orthostatic Pulse Rate Change," in <i>2016 IEEE 5th Global Conference on Consumer Electronics, 2016</i> , 533-536. Kyoto, Japan: IEEE.	2016年10月	[口頭発表]の44で発表
46	PERUSQUIA HERNANDEZ Monica	英語	有	Monica Perusquía-Hernández, Takahisa Enomoto, Tiago Martins, Mai Otsuki, Hiroo Iwata and Kenji Suzuki, "Multimodal Embodied Interface for Levitation and Navigation in 3D Space," in <i>2016 Symposium on Spatial User Interaction, 2016</i> , 215. Tokyo, Japan: ACM.	2016年10月	[ポスター・デモ発表]の45で発表
47	丹野 智博	英語	有	Kazumasa Horie, Atsuo Suemitsu, Tomohiro Tanno and Masahiko Morita, "Direct Estimation of Wrist Joint Angular Velocities from Surface EMGs by Using an SDNN Function Approximator," In <i>the 23rd International Conference on Neural Information Processing, 2016</i> , 28-35. Kyoto, Japan: APNNS.	2016年10月	[口頭発表]の45で発表
48	ERICH Floris Marc Arden	英語	有	Floris Erich, "End-user Software Engineering of Cognitive Robot Applications Using Procedural Parameters and Complex event Processing," in <i>2016 ACM SIGPLAN International Conference on Systems, Programming, Languages and Applications: Software for Humanity, 2016</i> , 47-48. Amsterdam, Netherlands: ACM.	2016年10月	[ポスター・デモ発表]の47で発表
49	高鳥 光	日本語	有	高鳥 光 (2016)「大規模没入ディスプレイ Large Space の開発」『日本バーチャルリアリティ学会論文誌』Vol. 21, No. 3, pp. 493-502, 日本バーチャルリアリティ学会.	2016年10月	
50	佐野 祐士 佐藤 晃矢 白石 僚一郎	英語	有	Yuji Sano, Koya Sato, Ryoichiro Shiraishi and Mai Otsuki, "Sports Support System: Augmented Ball Game for Filling Gap between Player Skill Levels," in <i>the 2016 ACM on Interactive Surfaces and Spaces</i> , 361-366. Niagara Falls, ON, Canada: ACM.	2016年11月	[ポスター・デモ発表]の50で発表
51	JAZBEC Maša	英語	有	Jazbec Maša, "Art as Expanded thought of its Infinitive Potential," <i>Technoetic Arts</i> , December 2016, Vol.14, Issue 3, 205-211(7).	2016年12月	
52	朝倉 靖成	英語	有	Yasunari Asakura and Yoshiyuki Sankai, "Development of Non-restraint Blood Pressure Measurement Method Utilizing PWV," <i>International Journal of Pharma Medicine and Biological Sciences</i> , Vol. 6, No.1 (2017) : 1-6.	2017年1月	
53	BRUMLEY John	英語	有	Charles E. Taylor, John T. Brumley, Richard W Hedley and Martin L. Cody, "Sensitivity of California Thrashers (<i>Toxostoma redivivum</i>) to Song Syntax," <i>Bioacoustics</i> , January 2017, 1-12.	2017年1月	

	氏名	言語	査読	タイトル	時期	備考
54	JAZBEC Masa	英語	有	Maša Jazbec, Shuichi Nishio, Hiroshi Ishiguro, Masataka Okubo, Christian Penalzoa, "Body-swapping experiment with an android - Investigation of the relationship between agency and a sense of ownership toward a different body," in <i>ACM/IEEE International Conference on Human-Robot Interaction, 2017</i> , 143-144. Vienna, Austria: ACM.	2017年3月	[ポスター・デモ発表]の58で発表
55	PERUSQUIA HERNANDEZ Monica	英語	有	Monica Perusquía-Hernández, Takahisa Enomoto, Tiago Martins, Mai Otsuki, Hiroo Iwata and Kenji Suzuki, "Embodied Interface for Levitation and Navigation in a 3D Large Space," in <i>8th Augmented Human International Conference, 2017</i> , Silicon Valley, CA, U.S.A: AH.	2017年3月	[口頭発表]の51で発表
56	BOEM Alberto 佐々木 海 加納 青李	英語	有	Alberto Boem, Kai Sasaki and Shori Kano, "Vital+Morph: A Shape-Changing Interface for Remote Biometric Monitoring," in <i>10th ACM International Conference on Tangible, Embedded and Embodied Interactions, 2017</i> , Yokohama, Japan:ACM.	2017年3月	[ポスター・デモ発表]の61で発表
57	西田 惇	日本語	有	Robb Mitchell, Jun Nishida, Enrique Encinas and Shunichi Kasahara, "We-Coupling! Experiential Evaluation and Extensions of Co-Embodiment," in <i>the 10th International Conference on Tangible, Embedded, and Embodied Interaction, 2017</i> , 775-780. Yokohama, Japan: ACM.	2017年3月	[ポスター・デモ発表]の60で発表
58	佐藤 綱祐 西田 惇 高鳥 光	日本語	有	佐藤 綱祐, 西田 惇, 高鳥 光, 鈴木 健嗣 (2017) 「CHILDHOOD: 小児の体験を再現する装着型身体性変換スーツ」『日本バーチャルリアリティ学会論文誌』 Vol.22, No.1, pp. 71-80, 2017, 日本バーチャルリアリティ学会.	2017年3月	
59	潘 雅冬 利根 忠幸	日本語	有	蜂須 拓, 潘 雅冬, 利根 忠幸, Baptiste Bourreau, 鈴木 健嗣 (2017) 「赤外線通信による物理的対面の計測に基づき対面行動を拡張するウェアラブルデバイス」『日本バーチャルリアリティ学会論文誌』 Vol. 22, No. 1, 日本バーチャルリアリティ学会.	2017年3月	
60	西田 惇	日本語	有	西田 惇, 鈴木 健嗣 (2017) 「bioSync: 人々の運動覚体験を融合するウェアラブルデバイス」『VR学会論文誌』 Vol.22, No.1, pp.51, 日本バーチャルリアリティ学会.	2017年3月	

平成 29 年度 (論文発表)

	氏名	言語	査読	タイトル	時期	備考
61	JAZBEC Maša, ERICH Floris Marc Arden	英語	有	Maša Jazbec, Floris Erich, and Hiroo Iwata, "A glance of cultural differences in the case of interactive device art installation idMirror", <i>AI & SOCIETY</i> ,	2017年5月	
62	西田 惇	英語	有	Jun Nishida and Kenji Suzuki, "bioSync: A Paired Wearable Device for Blending Kinesthetic Experience", <i>ACM SIGCHI Papers, USA, May 6-11, 2017</i>	2017年5月	[口頭発表]の54で発表
63	ERICH Floris Marc Arden	英語	有	Floris Erich, Chintan Amrit and Maya Daneva "A qualitative study of DevOps usage in practice", <i>Journal of Software: Evolution and Process</i> , 29(6), pp.1-20, 2017	2017年5月	
64	小木曾 里樹	英語	有	Satoki Ogiso, Koichi Mizutani, Naoto Wakatsuki, Keiichi Zempo and Yuka Maeda, "Estimation of contact force and amount of hair between skin and bone-conducted sound transducer using electrical impedance", <i>Japanese Journal of Applied Physics</i> , Vol. 5, No. 7S1, Jul., 2017	2017年7月	
65	BOEM Alberto	英語	有	Alberto Boem and Hiroo Iwata. "It's like holding a human heart": the design of Vital + Morph, a shape-changing interface for remote monitoring. <i>AI & Society Journal</i> , Springer, 2017. DOI: http://doi.org/10.1007/s00146-017-0752-1 Print ISSN: 0951-5666 Online ISSN: 1435-5655	2017年7月	
66	利根 忠幸	英語	有	Tone, T. and Suzuki, K., "A ferrofluid-based robotic sheet for liquid manipulation by using vibration control", In: <i>Proc. of IEEE International Conference on Automation Science and Engineering (CASE) 2017</i> , pp. 776-781, 2017	2017年8月	[口頭発表]の58で発表
67	西田 惇	英語	有	Jun Nishida, Shunichi Kasahara, and Kenji Suzuki, "Wired Muscle: Generating Faster Kinesthetic Reaction by Inter-personally Connecting Muscles" <i>SIGGRAPH 2017 Emerging Technologies, USA, 2017</i>	2017年8月	[口頭発表]の59で発表

	氏名	言語	査読	タイトル	時期	備考
68	西田 惇	日本語	有	伴 碧, 高橋 英之, 細田 耕, 鳴海 拓志, 西田 惇, 福島 宏器, "日常体験を記述せずに科学する方法論の新展開—心理学と最先端テクノロジーとの対話—", 第 81 回日本心理学会, Sep., 2017	2017 年 9 月	[口頭発表] の 64 で発表
69	小崎 湧太	英語	有	Yuta Kozaki, Kenji Suzuki, "A Facial Wearable Robot for Supporting Eye Opening and Closure Movement", IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems, Canada, Sep., 2017	2017 年 9 月	[口頭発表] の 66 で発表
70	PERUSQUÍA HERNÁNDEZ Monica	英語	有	Perusquía-Hernández, M., Hirokawa, M., Suzuki, K., "Spontaneous and posed smile recognition based on spatial and temporal patterns of facial EMG", Proceedings of the 7th Affective Computing and Intelligent Interaction Conference, pp. 537-541, 4 pages. 2017	2017 年 9 月	
71	佐藤 綱祐	英語	有	Kosuke Sato, Keita Watanabe, Shuichi Mizuno, Masayoshi Manabe, Hiroaki Yano and Hiroo Iwata, "Development and Assessment of a Block Machine for Volleyball Attack Training", Advanced Robotics, Vol.31, No.21, 2017	2017 年 10 月	
72	CHACIN Aisen Carolina	英語	有	Chacin Aisen C., Hiroo Iwata and Victoria Vesna, "Assistive Device Art: aiding audio spatial location through the Echolocation Headphones", AI & SOCIETY, pp.1-15, Oct., 2017	2017 年 10 月	
73	佐藤 綱祐	日本語	有	佐藤 綱祐, 植田 真弘, 渡辺 啓太, 水野 秀一, 眞鍋 政義, 矢野 博明, 岩田 洋夫, "バレーボールにおけるブロックマシンの開発と運用", 日本バーチャルリアリティ学会論文誌, Vol.22, No.4, pp.467-476, 2017	2017 年 12 月	
74	佐野 祐士 佐藤 晃矢	日本語	有	佐野 祐士, 佐藤 晃矢, 白石 僚一郎, 大槻 麻衣, "球技における視触覚刺激提示がプレイスキルに及ぼす影響" 日本バーチャルリアリティ学会論文誌, 22(4), 493-502, 2017	2017 年 12 月	
75	佐々木 海	英語	有	Kai Sasaki and Kenji Suzuki, "An Active Rotary-legs Mechanism for Stair-climbing Mobility Vehicle", IEEE Robotics and Automation Letters, 2018	2018 年 2 月	
76	BOEM Alberto	英語	無	Alberto Boem, "Encounter-type Haptic Interfaces for Virtual Reality Musical Instruments", IEEE VR 2018, Doctoral Consortium, 2018	2018 年 3 月	[口頭発表] の 76、[ポスター・デモ発表] の 78 で発表
77	XIE Chun	英語	有	Chun Xie, Hidehiko Shishido, Yoshinari Kameda, Kenji Suzuki and Itaru Kitahara, "A Calibration Method for Large-Scale Projection Based Floor Display System", Proc. of IEEE Virtual Reality 2018, Reutlingen, Germany, Mar., 2018	2018 年 3 月	[ポスター・デモ発表] の 79 で発表

平成 30 年度 (論文発表)

	氏名	言語	査読	タイトル	時期	備考
78	TAN Chun Kwang	英語	有	Chun Kwang Tan, Hideki Kadone, Hiroki Watanabe, Aiki Marushima, Masashi Yamazaki, Yoshiyuki Sankai and Kenji Suzuki : "Lateral Symmetry of Synergies in Lower Limb Muscles of Acute Post-stroke Patients After Robotic Intervention", Front. Neurosci. 12:276. doi: 10.3389/fnins.2018.00276	2018 年 4 月	
79	小木曾 里樹	英語	有	Satoki Ogiso, Koichi Mizutani, Naoto Wakatsuki, Keiichi Zempo and Yuka Maeda: "Verification of contact force estimation method for the bone-conducted sound transducer with human subjects," Japanese Journal of Applied Physics, Vol. 57, No. 7S1, 07LC11 (6-pages), 2018.	2018 年 6 月	
80	佐々木 海	英語	有	Kai Sasaki, and Kenji Suzuki: "Active Rotary-Legs Mechanism for Stair-Climbing Mobility Vehicle", IEEE Robotics and Automation Letters, Vol. 3, No. 3, pp. 2237-2244, Jul., 2018	2018 年 7 月	
81	利根 忠幸	英語	有	Tadayuki Tone and Kenji Suzuki: "Surface deformation control of a ferrofluid-based robotic sheet for object handling", IEEE Transactions on Automation Science and Engineering. (Accepted)	2018 年 8 月	

	氏名	言語	査読	タイトル	時期	備考
82	西田 惇	日本語	有	西田 惇, 松田 壮一郎, 大木 美加, 高鳥 光, 佐藤 綱祐, 鈴木 健嗣: "身体性変換スーツによる小児体験における知覚・運動特性の評価", 日本バーチャルリアリティ学会論文誌, Vol.23, No.3, Sep., 2018 (in press)	2018年9月	
83	利根 忠幸	英語	有	Tadayuki Tone and Kenji Suzuki: "An automated liquid manipulation by using a ferrofluid-based robotic sheet", IEEE Robotics and Automation Letters, Vol. 3, Issue. 4, pp. 2814-2821, Oct., 2018	2018年10月	
84	KIM SunKyoung	英語	有	SunKyoung Kim, Go Woon Kim and Dahyun Kang: "Users' Perception Based on Engagement Strategies of a Social Robot in a Conversation", Design Convergence Study, Vol. 72, No. 17, pp. 1-15, Oct., 2018	2018年10月	
85	倉本 尚美	英語	有	Uramoto N, Suzuki K, Watanabe S, Hidaka K. Mealtime Assistance and Caregivers' Frequency of Checking the Residents in Nursing Homes: A Questionnaire Survey. Jpn J Compr rehabil Sci, 9: 34-42	2018年10月	
86	BOEM Alberto	英語	有	Alberto Boem, Hiroo Iwata. 2018. "It' s like holding a human heart": the design of Vital + Morph, a shape-changing interface for remote monitoring. AI & Society, Volume 33, Issue 4, pp. 599-619, Springer	2018年11月	
87	糸井川 椋	英語	有	Ryo Itoigawa, Yuka Maeda, Koichi mizutani and Naoto Wakatsuki: "Comparison of Measurement Sites in Instantaneous Orthostatic Pulse Rate Measurement", Advanced Biomedical Engineering, Vol. 8, pp. 14-22, 2019	2019年1月	
88	高鳥 光	英語	有	Hikaru Takatori, Masashi Hiraiwa, Hiroaki Yano, Hiroo Iwata: "Large-scale Projection-Based Immersive Display: The Design and Implementation of Large Space", IEEE VR 2019, Conference Paper 8 pages	2019年2月	
89	Xie Chun	日本語	有	謝 淳, 橋 一誠, 大木 美加, プローバティスト, 北原 格, 鈴木 健嗣: "視覚教示による学習支援のための大規模床面投影システム", 電子情報通信学会論文誌, J102-A(2): 68-79, 2019	2019年2月	

令和元年度(論文発表)

	氏名	言語	査読	タイトル	時期	備考
90	TAN Chun Kwang	英語	有	Tan CK, Kadone H, Miura K, Abe T, Koda M, Yamazaki M, Sankai Y and Suzuki K (2019) Muscle Synergies During Repetitive Stoop Lifting With a Bioelectrically Controlled Lumbar Support Exoskeleton. Front. Hum. Neurosci.13:142. doi: 10.3389/fnhum.2019.00142 [IF 2.870 (2018 IF)]	2019年4月	
91	佐藤 晃矢	英語	有	Koya Sato, Mizuki Oka, and Kazuhiko Kato: "Early Churn User Classification in Social Networking Service Using Attention-based Long Short-Term Memory", The 14th Pacific Asia Workshop on Intelligence and Security Informatics, Macau, China, Apr. 14-17, 2019	2019年4月	[口頭発表]の111で発表
92	大関 岳	日本語	有	大関 岳, 山田 亜紀, 岩田 洋夫: "ニゲルイス: センサ付き家具を利用したデバイスアート", 日本バーチャルリアリティ学会誌, 2019年24巻2号, p.187-194	2019年6月	
93	DOLLACK Felix	英語	有	Felix Benedict Dollack, Monica Perusquía-Hernandéz, Hideki Kadone, Kenji Suzuki, "Gaze and head anticipation during locomotion with auditory instruction in the presence and absence of visual input", Frontiers in Human Neuroscience, August, 2019. [Impact factor: 2.87].	2019年8月	
94	佐野 祐士	英語	有	Yuji Sano, Koya Sato, Ryoichiro Shiraishi, Mai Otsuki, Koichi Mizutani: "Visuo-Haptic Interface to Augment Player's Perception in Multiplayer Ball Game", ICAT-EGVE 2019, Tokyo, Japan, Sep. 11-13, 2019	2019年9月	[口頭発表]の122で発表
95	YANG Chi-Lan	英語	有	YANG Chi-Lan, Chien-Wen (Tina) Yuan, and Hao-Chuan Wang: "When Knowledge Network is Social Network: Understanding Collaborative Knowledge Transfer in Workplace." Proc. ACM Hum.-Comput. Interact. 3, CSCW, Article 164. Austin, Texas, USA, Nov. 9-13, 2019	2019年11月	[口頭発表]の126で発表

	氏名	言語	査読	タイトル	時期	備考
96	敷根 伸光	日本語	有	敷根 伸光, 山中 敏正, 星野 准一, 「ビデオ学習におけるセグメンテーション効果のための巻き戻しインタフェースの要因分析」, 日本デザイン学会研究論文集『デザイン学研究』第66巻第2号 pp. 09-18	2019年12月	
97	高嶋 倫太郎	日本語	有	高嶋 倫太郎, 河本 浩明, 山海 嘉之, "手指動作を支援する超多関節外骨格機構の研究," 日本生体医工学, Vol. 58, No. 1	2020年1月	
98	佐々木 海	英語	有	Kai Sasaki, Yosuke Eguchi, and Kenji Suzuki: "Stair-Climbing Wheelchair with Lever Propulsion Control of Rotary Legs", Advanced Robotics	2020年	

2. 学生の外部からの評価

(1) 国内外のコンテスト

番号	受賞日	氏名	イベント名	受賞対象論文・作品	受賞名
1	平成26年9月12日	小木曾 里樹, (川岸卓司, 青木 拓也, 古川 聖也)	IBM Bluemix Challenge	Sleeff (スリーフ)	優秀賞
2	平成26年9月21日	(廣瀬 句哉), 利根 忠幸, (大内 竜太郎)	第2回 Tech Plan グランプリ	eForce	ABBALab 賞
3	平成26年10月25日	西田 惇, 佐藤 綱祐, 高嶋 光	国際学生対抗バーチャルリアリティコンテスト (IVRC2014)	CHILDHOOD	総合優勝賞(1位), "Laval Virtual" 派遣賞, クリステイ・デジタル・システムズ社賞
4	平成26年11月23日	村田 耕一	テクノアイデアコンテスト "テクノ愛2014"	遠隔アニマルセラピーシステム	奨励賞
5	平成26年12月14日	(廣瀬 句哉), 利根 忠幸, (大内 竜太郎)	GUGEN2014	eForce	トランジスタ技術賞
6	平成27年4月8日	西田 惇, 佐藤 綱祐, 高嶋 光	LAVAL VIRTUAL 2015	CHILDHOOD	LEARNING, SCIENCES & HUMANITIES 賞
7	平成27年4月11日	西田 惇, 佐藤 綱祐, 高嶋 光	Imagine Cup 2015 日本予選大会	CHILDHOOD	ワールドシチズンシップ部門賞
8	平成27年7月26日	佐藤 綱祐	超人スポーツハッカソン	CarryOtto	優秀賞
9	平成27年8月3日	西田 惇, 佐藤 綱祐, 高嶋 光	第9回 KIDS DESIGN AWARD	CHILDHOOD	キッズデザイン賞, TEPIA 特別賞
10	平成27年9月12日	小木曾 里樹 (川岸卓司, 青木 拓也)	第1回ワイヤレスパワーアイデアコンテスト	Hotting Plates	フィリップス賞
11	平成27年10月25日	白石 僚一郎, (藤田 健広, 犬塚 健斗, 高嶋 倫太郎)	攻殻機動隊 REALIZE PROJECT 攻殻ハッカソン 東京大会	身体防御スーツ (Cyber Protection Suit)	最優秀賞
12	平成27年10月25日	村田 耕一, 江國 翔太, 朝倉 靖成, (上原 皓)	攻殻機動隊 REALIZE PROJECT 攻殻ハッカソン 東京大会	Bionic Scope	優秀賞
13	平成27年11月28日	小木曾 里樹	第7回キャリアアップ・スキルアップに関するエッセイコンテスト	キャリアプランと自身の価値観	2nd Prize (優秀賞 YPs 部門)
14	平成28年2月11日	白石 僚一郎, 高嶋 倫太郎, (藤田 健広, 犬塚 健斗)	攻殻機動隊 REALIZE PROJECT The AWARD	身体防御スーツ (Cyber Protection Suit)	最優秀 攻殻ハッカソン賞
15	平成28年3月5日	佐藤 綱祐	第1回ビジネス構想コンペティション-学生と企業人との協創-	小型インホイールモータを用いた新スポーツの開発と一般社会への普及 ~超人スポーツ Carry Otto ~	優秀賞

番号	受賞日	氏名	イベント名	受賞対象論文・作品	受賞名
16	平成 28 年 3 月 23 日	西田 惇	Laval Virtual 2016: 18th International Conference and Exhibition of Virtual Technologies and Uses	bioSync bioSync: Synchronize Kinesthetic Experience among People	Laval Virtual Awards 2016: Environment & Health 部門 最優秀賞
17	平成 28 年 4 月 23 日	村田 耕一, 江國 翔太, 朝倉 靖成, (上原 皓)	IMAGINE CUP 2016 日本予選大会	Bionic Scope	イノベーション部門賞
18	平成 28 年 4 月 23 日	西田 惇	Microsoft Innovation Award 2016	bioSync	最優秀賞, 日本航空アントレプレナー賞
19	平成 28 年 7 月 2 日	西田 惇, (西村 渉)	Art & Technology Tohoku 2016	bioSync bioSync: 身体接続技術に基づく新しい身体間体験	優秀賞
20	平成 28 年 7 月 14 日	(河原 圭祐), 西田 惇, (蜂須 拓)	Kids Design Award 2016	Hearable Devices: 聴覚障害児の社会的相互作用を支援するスマートデバイス	キッズデザイン賞
21	平成 28 年 10 月 18 日	西田 惇	ACM UIST 2016: 29th ACM User Interface Software and Technology Symposium Student Innovation Contest	bioSync: Blending Kinesthetic Experience among People	Student Innovation Competition Honorable Mentions
22	平成 28 年 12 月 17 日	西田 惇, (西村 渉)	株式会社ピーバンドットコム主催の GUGEN2016 展示会・授賞式	bioSync: 身体接続技術に基づく新しい身体間インタラクション	大賞
23	平成 28 年 12 月 17 日	小木曾 里樹 (青木 拓也, 松雪 俊, 川岸 卓司)	GUGEN2016	Pack-Logger	Quadcept 賞を受賞
24	平成 29 年 1 月 19 日	小木曾 里樹 (青木 拓也, 松雪 俊, 川岸 卓司)	2016 年度知的環境アプリケーションアイデアコンテスト	Pack-Logger	最優秀賞
25	平成 29 年 3 月 4 日	佐藤 綱祐	一般社団法人 情報処理学会シンポジウムインタラクション 2016	CarryOtto: 人と機械が一体化した移動デバイスの開発	インタラクティブ発表賞 (プログラム委員推薦)
26	平成 29 年 3 月 7 日	CHACIN Aisen Carolina	「YouFab Global Creative Awards 2016」	IrukaTact: Submersible Haptic Glove	STUDENT AWARD
27	平成 29 年 7 月 9 日	小木曾 里樹, 佐野 祐士	第 2 回 IEEE ハックチャレンジ in Tokyo	CHIRIMEN ダッシュ	2nd IEEE Hack Challenge in Tokyo WINNER
28	平成 29 年 10 月 22 日	杉本 実夏	Stanford's health hackathon "health++ 2017"	スマートおしゃぶり "your pacifier"	・ 3rd Place grand Prize, ・ Persistent-Neodesign \$1k
29	平成 29 年 10 月 27 日	西田 惇	総務省 戦略的情報通信研究開発推進事業 (SCOPE) 平成 29 年度 独創的な人向け特別枠「異能vation」プログラム	作品名: bioSync 題目: 装着型デバイスによる身体認知機能の最大化に基づく人々のエンパワーメント	採択
30	平成 30 年 1 月 30 日	小崎 湧太	Edge Next「発展編」海外研修	Soft Exo Muscle	Best Presentation Award
31	平成 30 年 3 月 4 日	倉本 尚美	ジャパン・ビジネスモデル・コンペティション (JBMC)	人工知能で嚙下を測る「GOKURI」	優勝
32	平成 30 年 4 月 11 日	(Diego Felipe Paez Granados), 佐々木 海, (門根 秀樹, 清水 如代, 鈴木 健嗣)	Mobility Unlimited Challenge	Towards Life with Standing Mobility Unlimited	Discovery Award
33	平成 30 年 8 月 28 日	西田 惇	Innovative Technologies 2018	bioSync: 筋活動共有に基づく人々の共感を支援する身体同調技術	Innovative Technologies 2018 採択

番号	受賞日	氏名	イベント名	受賞対象論文・作品	受賞名
34	平成 30 年 9 月 5 日	敷根 伸光	「Unity& 宴ノベルゲーム開発入門」出版記念オンラインゲームジャム	『1+1=2 でいいのか？ (あかほん！ SS)』	工学社賞, MadnessLabo 賞, オーディエンス賞
35	平成 30 年 12 月 4 日	本間 由樹子, 平岩 匡, 西村 勇輝	博士課程教育リーディングプログラムフォーラム 2018 (ポスター発表部門)	～拡がれスポーツの輪！ Open ARena～	優秀賞
36	平成 30 年 12 月 4 日	ROJAS FERRER Cesar Daniel, 正田 REYES Vera Paola, KIM SunKyoung	博士課程教育リーディングプログラムフォーラム 2018	HOLOTHERAPY: "Empowering telemedicine with AR and Holographic Telepresence"	優秀賞
37	平成 30 年 12 月 7 日	(山蔦 栄太郎), 杉本 実夏, (荒川 陸, 長沼 大樹, 後 雄大, 寺本 将行)	ジェームズダイソンアワード 2018	Your Pacifier	国内最優秀賞
38	平成 30 年 12 月 13 日	謝 淳, (坂村 祐希, 今井 美里, 武田 隆雅)	第 22 回 PRMU アルゴリズムコンテスト	認識モデルのクローン (レベル 1, 2)	優秀賞
39	平成 31 年 3 月 1 日	(GRINDER-MAN), 高鳥 光, (菅原 一樹, 幸, EMP, artrecorder, 熊山准, 株式会社ストロベリーメディアアーツ, 岩田 洋夫)	第 22 回文化庁メディア芸術祭	HERO HEROINE	審査委員会推薦作品
40	令和元年 8 月 23 日	佐々木海, 杉山太成, 杉本 実夏	第 13 回キッズデザイン賞	Qolo-Child	キッズデザイン賞

(2) 学術賞

学外での研究発表による受賞件数 (国内)

番号	受賞日	氏名	イベント名	受賞対象論文・作品	受賞名
1	平成 27 年 1 月 21 日 (水)	小木曾 里樹	SAT テクノロジー・ショーケース 2015	マイクロホンアレイを用いる移動ロボットの 2 次元自己位置推定法	ベスト・アイデア賞
2	平成 27 年 9 月 25 日 (金)	白石 僚一郎	生体医工学シンポジウム 2015 in 岡山	片麻痺患者のための立ち上がり運動支援システムの開発	ベストリサーチアワード
3	平成 27 年 10 月 30 日 (金)	小木曾 里樹	The 4th IEEE Global Conference on Consumer Electronics (IEEE GCCE 2015)	Satoki Ogiso, Koichi Mizutani, Keiichi Zempo and Naoto Wakatsuki: Measurement of the Differential Transfer Function Between Bone-Conduction and Air-Conduction for Sound Localization	Outstanding Demo! Award
4	平成 27 年 10 月 30 日 (金)	小木曾 里樹	The 4th IEEE Global Conference on Consumer Electronics (IEEE GCCE 2015)	Keiichi Zempo, Satoki Ogiso, Koichi Mizutani and Naoto Wakatsuki: Measurement of the Distance Difference of Acoustic Beacons Using Direct Conversion Receiver	Excellent Demo! Award
5	平成 28 年 2 月 4 日 (木)	小木曾 里樹	SAT テクノロジー・ショーケース 2016	川岸 卓司, 小木曾里樹, 水谷 孝一, 善甫 啓一, 若槻 尚斗, "マイクロホンアレイによるドローン飛行音の位置推定"	ベスト・アイデア賞
6	平成 28 年 3 月 4 日 (金)	西田 惇	一般社団法人 情報処理学会シンポジウム インタラクション 2016	bioSync: 運動覚同調インタラクションの提案と装着型運動覚入出力デバイスの開発	インタラクティブ発表賞 (プログラム委員推薦)
7	平成 29 年 9 月 27 日 (水)	(Arvin Lapiz Valderrama, Kotaro Sakamoto), Alberto Boem	Tsukuba Global Science Week 2017	Internet of Things: interdisciplinary applications and social perspectives	Best Poster, Best Presentation Award
8	平成 30 年 3 月 7 日 (水)	佐藤 綱祐	情報処理学会 インタラクション 2018	ひらがな書字学習における触覚化支援手法	インタラクティブ発表賞 (プログラム委員推薦)

番号	受賞日	氏名	イベント名	受賞対象論文・作品	受賞名
9	平成 30 年 3 月 3 日 (土)	(Arvin Lapiz Valderrama, Sakura Maezono, Kotaro Sakamoto), Alberto Boem, (Takato Honda, Hikaru Takatori, Takuma Yagi)	7th Hyper Interdisciplinary Conference 2018	TelepaSee: a mind scanner	Best Poster Award
10	平成 30 年 6 月 5 日 (火)	小崎 湧太	ロボティクス・メカトロニクス講演会 2018	柔軟素材の変形により開眼・閉眼動作を支援する顔面装着型ロボット	日本機械学会若手優秀講演フェロー賞
11	平成 30 年 9 月 20 日 (木)	佐藤 綱祐, 西田 惇, 高鳥 光, (鈴木 健嗣)	第 23 回バーチャルリアリティ学会大会	CHILDHOOD: 小児の体験を再現する装着型身体性変換スーツ	論文賞
12	平成 30 年 9 月 22 日 (土)	杉本 実夏, (Eitaro YAMATSUTA, Hiroki NAGANUMA, Riku ARAKAWA, Yudai USHIRO, Masayuki TERAMOTO)	"Tsukuba Global Science Week2018 (Art & Design Session)"	Design of a smart pacifier to detect dehydration in babies and shaping parents' behavior	Excellent Poster Award
13	平成 30 年 12 月 1 日 (土)	佐藤 綱祐, (渡辺 啓太, 矢野 博明, 岩田 洋夫)	Virtual Reality Software and Technology 2018	Motion Recognition for Automatic Control of a Block Machine	SQUARE ENIX Award
14	平成 31 年 2 月 17 日 (日)	糸井川 椋	日本音響学会 音楽音響研究会	ギター演奏時における人間の撥弦動作および音情報計測	日本音響学会音楽音響研究会奨励賞
15	令和元年 8 月 15 日 (木)	西田 惇	情報処理学会 研究会推薦博士論文速報	Shaping Egocentric Experiences with Wearable Cybernic Interfaces	情報処理学会 研究会推薦博士論文に選出
16	令和元年 8 月 25 日 (日)	杉山 太成	第 13 回 Motor Control 研究会	Optimizing learning rate by meta-leading to maximize reward in visuomotor learning	若手奨励賞
17	令和元年 9 月 6 日 (金)	高嶋 倫太郎	生体医工学シンポジウム 2019	手指動作支援のための超多関節外骨格に関する研究	生体医工学シンポジウム 2019 ポスターアワード
18	令和元年 9 月 12 日 (木)	EMP5 年次, 西田 惇 (投稿時) EMP 助教, 松田 壮一郎 シス情研究員, 大木 美加 EMP5 年次, 高鳥 光 (投稿時) EMP5 年次, 佐藤 綱祐 (投稿時) シス情教授, 鈴木 健嗣	第 21 回日本 VR 学会論文賞	身体性変換スーツによる小児体験における知覚・運動特性の評価	第 21 回日本 VR 学会論文賞
19	令和元年 12 月 22 日 (日)	正田 REYES Vera Paola	Artificial Intelligence and Cloud Computing (AICC) International Conference		ベストプレゼンテーション賞

学外での研究発表による受賞件数 (国外)

番号	受賞日	氏名	イベント名	受賞対象論文・作品	受賞名
20	平成 27 年 12 月 8 日 (火)	村田 耕一	IEEE International conference on Robotics and Biomimetics (IEEE-ROBIO) 2015	[Magnetic Resonance Compatible Stimulation Device Capable of Providing Passive and Active Finger Movements	T.J. Tarn Best Paper in Robotics Award
21	平成 28 年 2 月 26 日 (金)	白石 僚一郎, (藤田 健広, 犬塚 健斗, 高嶋 倫太郎)	Seventh Augmented Human International Conference (AH 2016)	Augmentation of Human Protection Function Using Wearable and Sensing System.	Best Demo Award

番号	受賞日	氏名	イベント名	受賞対象論文・作品	受賞名
22	平成28年3月23日(水)	西田 惇	IEEE Virtual Reality 2016	"bioSync bioSync: Wearable Haptic I/O Device for Synchronous Kinesthetic Interaction"	Honorable Mention for Best Research Demo
23	平成28年11月3日(木)	西田 惇	Microsoft Research Asia PhD Fellowship Program 2016	Augmenting Social and Embodied Experiences among People by Wearable Devices	Fellowship Award
24	平成29年6月1日(水)	佐藤 綱祐	IEEE ICRA 2017	Development of a Block Machine for Volleyball Attack Training	(1) IEEE ICRA 2017 Best Paper Award on Human - Robot Interaction (2) IEEE Robotics and Automation Society Japan Joint Chapter Young Award 2017
25	平成29年9月19日(火)	敷根 伸光	ICEC2017	A Game System for Learning Mathematics with Pacing Considering Individual Motivation and Feeling	Best Paper Honorable Mention Award
26	平成30年9月27日(土)	小木曾 里樹, (水谷 孝一, 若槻 尚斗, 海老原 格)	Ninth International Conference on Indoor Positioning and Indoor Navigation	Robust Localization of Mobile Robot in Reverberant Rooms Using Acoustic Beacons with Iterative Bayesian Filtering	Best Presentation Award
27	平成30年11月14日(水)~16日(金)	小岩 慎太郎	AsiaHaptics 2018	"A movable humanoid robot for presenting walking sensation of a giant"	Best Video Demo Finalist
28	平成31年3月15日(金)	西田 惇, (松田 壮一郎, 大木 美加,) 高鳥 光, 佐藤 綱祐, (鈴木 健嗣)	ACM SIGCHI 2019	Egocentric Smaller-person Experience through a Change in Visual Perspective	Best Paper Honourable Mention Award
29	令和元年8月2日(金)	5年次 西田 惇 (投稿時, 兼ソニーコンピュータサイエンス研究所 リサーチアシスタント) 笠原 俊一 (ソニーコンピュータサイエンス研究所), Pedro Lopes (シカゴ大学)	ACM SIGGRAPH 2019	Demonstrating Preemptive Reaction: Accelerating Human Reaction using Electrical Muscle Stimulation Without Compromising Agency	ACM SIGGRAPH Emerging Technologies Laval Virtual Grand Award

(3) 招待展示・招待講演・その他

番号	日付	氏名	イベント名	対象作品
1	平成27年9月3日-7日	CHACIN Aisen Carolina, 大関 岳	Ars Electronica Festival 2015	IrukaTact
2	平成27年9月3日-7日	JAZBEC Masa, Floris Erich	Ars Electronica Festival 2015	idMirror
3	平成27年9月3日-7日	CHACIN Aisen Carolina	Ars Electronica Festival 2015	
4	平成27年9月11日-24日	大関 岳	Cultural Institution Delavski dom Trbovlje at Nova Galerija	Human Background
5	平成27年10月6日	西田 惇, 佐藤 綱祐, 高鳥 光	次世代センサ協議会	CHILDHOOD
6	平成27年10月7日-9日	CHACIN Aisen Carolina	mfu KIBLIX 2015	Liquid Culture
7	平成27年10月15日-17日	CHACIN Aisen Carolina, 大関 岳	SPECULUM ARTIUM 2015	IrukaTact
8	平成27年10月15日-17日	西田 惇, 佐藤 綱祐, 高鳥 光	SPECULUM ARTIUM 2015	CHILDHOOD
9	平成27年10月15日-17日	JAZBEC Masa	SPECULUM ARTIUM 2015	
10	平成27年10月15日-17日	西田 惇, 佐藤 綱祐, 高鳥 光	スロベニア大統領謁見	CHILDHOOD
11	平成27年10月22日	CHACIN Aisen Carolina	MIKK : Mladinski Informativni in Kulturni Klub Murska Sobota	
12	平成27年10月22日-25日	佐藤 綱祐	Digital Content Expo 2015	CarryOtto

番号	日付	氏名	イベント名	対象作品
13	平成 27 年 11 月 3 日- 平成 28 年 8 月 14 日	CHACIN Aisen Carolina	Culture Interface: Numerique et Science Fiction	Scent Rhythm
14	平成 27 年 11 月 13 日-15 日	西田 惇, 佐藤 綱祐, 高鳥 光	セーフティグッズフェア 2015	CHILDHOOD
15	平成 27 年 11 月 28 日	小木曾 里樹, 佐野 祐二	The 12th IEEE TOWERS	
16	平成 27 年 11 月 28 日-12 月 6 日	CHACIN Aisen Carolina	つくばメディアアートフェスティバル 2015	Echolocation Headphones
17	平成 27 年 11 月 28 日-12 月 6 日	CHACIN Aisen Carolina, 大 図 岳	つくばメディアアートフェスティバル 2015	IrukaTact
18	平成 27 年 11 月 28 日-12 月 6 日	大図 岳	つくばメディアアートフェスティバル 2015	ニゲルイス
19	平成 27 年 11 月 28 日-12 月 6 日	JAZBEC Masa, ERICH Floris	つくばメディアアートフェスティバル 2015	idMirror
20	平成 27 年 12 月 7 日	西田 惇	産業技術総合研究所 臨海副都心センター 人間情報研究部門 デジタルヒューマンリサーチグループのセミナー	インタラクションの拡張に基づく気付き・デザイン・リハビリテーションの支援
21	平成 28 年 2 月 26 日	西田 惇, 佐藤 綱祐, 高鳥 光	SENSORS IGNITION 2016	CHILDHOOD
22	平成 28 年 3 月 8 日	西田 惇	平成 29 年度採用分日本学術振興会特別研究員の募集に係る学内説明会	
23	平成 28 年 3 月 15 日	敷根 伸光		認知症予防「まゆっこ」データロガー
24	平成 28 年 4 月 28 日	JAZBEC Masa	Flying Tokyo #18	
25	平成 28 年 5 月 7 日-8 日	JAZBEC Masa, ERICH Floris	ACM CHI 2016	idMirror
26	平成 28 年 5 月 11 日	JAZBEC Masa	UCLA department of Design and Media Arts での講演	
27	平成 28 年 5 月 14 日	西田 惇	Innovation World Festa 2016	bioSync
28	平成 28 年 5 月 20 日	JAZBEC Masa	タイタマサート大学リーダーシッププログラム来訪	
29	平成 28 年 5 月 24 日-25 日	西田 惇	日本マイクロソフト株式会社主催 開発者向けイベント de:code 2016	bioSync
30	平成 28 年 6 月 14 日	西田 惇	株式会社リバネス主催 異分野勉強会	自身の研究テーマとビジョン
31	平成 28 年 6 月 26 日	西田 惇	株式会社サムライインキュベート主催 Samurai Island Expo 16 MS パネルディスカッション	bioSync, 人工知能の現状と未来についてのパネルディスカッション
32	平成 28 年 7 月 8 日-10 日	江國 翔太, 若生 遼, 利根 忠之, 高鳥 光, BOEM Alberto, BRUMLEY John, LOBO Joana, 佐藤 綱祐, 西田 惇, 加納 青李, 小木曾 里樹, 糸井川 暲, 敷根 伸光, 佐藤 晃矢, 佐野 祐士, 高嶋 倫太郎	第 4 回全国博士課程教育リーディングプログラム学生会議	
33	平成 28 年 9 月 8 日-12 日	加納 青李, BRUMLEY John, BOEM Alberto, LOBO Joana, 佐々木 海, 高嶋 倫太郎	ARS ELECTRONICA FESTIVAL 2016 にて招待展示	
34	平成 29 年 1 月 4 日	CHACIN Aisen Carolina	スロベニアのトルボヴリエにて FireFlex:Assistive Device Art Exhibition を実施	
35	平成 29 年 3 月 16 日-18 日	西田 惇	情報処理学会 第 79 回全国大会 企画セッション「将来の情報学リーダーが創造する新しい価値」において招待講演	
36	平成 29 年 5 月 14 日	西田 惇	フジテレビ 夢のプラマヨ研究所 ブラック・トゥ・ザ・フューチャー, フジテレビ	bioSync

番号	日付	氏名	イベント名	対象作品
37	平成 29 年 6 月 3 日	高嶋 倫太郎	つくばイノベーションワールドフェスタ 2017	Cyber Protection Suit
38	平成 29 年 6 月 3 日	朝倉 靖成	つくばイノベーションワールドフェスタ 2017	Bionic Scope
39	平成 29 年 6 月 3 日	佐藤 綱祐	つくばイノベーションワールドフェスタ 2017	CarryOtto
40	平成 29 年 7 月 28日-30 日	BRUMLEY John	Klax Vaults by John Brumley & Roy Werner 展	
41	平成 29 年 8 月 21日-23 日	佐々木 海	福祉機器コンテスト 2017	車椅子型移動支援機器
42	平成 29 年 9 月 7日-11 日	大関 岳	Ars Electronica Festival 2017	ニゲルイス
43	平成 29 年 9 月 7日-11 日	杉本 実夏	Ars Elebtronica Festival 2017	Walkaholic
44	平成 29 年 9 月 7日-11 日	BOEM Alberto, BRUMLEY John, ISHAC Karlos, 西田 惇, 大関 岳, 高嶋 倫太郎, 高鳥 光, 利根 忠幸, CHACIN Aisen Carolina	Ars Electronica Festival 2017	Life in the Space Age: Experiments of Art and Technology in Zero-G
45	平成 29 年 9 月 14日-16 日	杉本 実夏	Speculum Artium 2017	Walkaholic
46	平成 29 年 9 月 14日-16 日	大関 岳	Speculum Artium 2017	ニゲルイス
47	平成 29 年 9 月 14日-16 日	BRUMLEY John	Speculum Artium 2017	KLAX TREZOR:
48	平成 29 年 9 月 14日-16 日	BRUMLEY John	Speculum Artium 2017	BIRD SONG DIAMOND MIMIC
49	平成 29 年 9 月 14日-16 日	Maša Jazbec	Speculum Artium 2017	Interpersonal Interactions
50	平成 29 年 9 月 16日-平成 30 年 3 月 11 日	西田 惇, 高鳥 光, 佐藤 綱祐	『マジカルリアル～VR・AR が作り出す不思議体験』	CHILDHOOD
51	平成 29 年 9 月 20日-22 日	高鳥 光	TGSW 2017	"Large Space" and "CHILDHOOD" Developed in Empowerment Informatics Program
52	平成 30 年 2 月 14 日	敷根 伸光	Norwegian University of Science and Technology (ノルウェー科学技術大学)	NOVELICA A Game to Make People Forget Their Negative Feelings on Mathematic
53	平成 30 年 6 月 15 日	佐藤 綱祐	APPS JAPAN 2018 専門セミナー「ますます高まる”体験すること”の需要と可能性—スポーツやエンタメの市場を広げる本質を再現するためのテクノロジー—」	
54	平成 30 年 7 月 29 日	西田 惇	主催：伊達青年会議所・未来へ挑む実行委員会	bioSync
55	平成 30 年 7 月 28日-8 月 5 日	大関 岳	つくばメディアアートフェスティバル 2018	Angle – Transmission and Reflection
56	平成 30 年 7 月 28日-8 月 5 日	高鳥 光	つくばメディアアートフェスティバル 2018	HERO HEROINE
57	平成 30 年 7 月 28日-8 月 5 日	杉本 実夏	つくばメディアアートフェスティバル 2018	Walkaholic 2
58	平成 30 年 7 月 28日-8 月 5 日	BOEM Alberto, BRUMLEY John, ISHAC Karlos, XIE Chun, DOLLACK Felix, 西田 惇, 大関 岳, 佐野 祐士, 敷根 伸光, 杉本 実夏, 高嶋 倫太郎, 高鳥 光, 利根 忠幸	つくばメディアアートフェスティバル 2018	Life in the Space-Age: Experiments of Art and Technology in Zero-Gravity
59	平成 30 年 8 月 6日-8 月 10 日	西田 惇	Dagstuhl Seminer 18322 on Human-Computer Integration	HYPERSPECTIVE: Changing Perspective by Wearable I/O Devices to Understand Communicate, and Cooperate with People
60	平成 30 年 9 月 8日-平成 31 年 2 月 24 日	BRUMLEY John	Videogames: Design/Play/Disrupt	Guattari Hero

番号	日付	氏名	イベント名	対象作品
61	平成 30 年 11 月 14日-16 日	西田 惇	DC EXPO 2018	筋活動共有に基づく人々の共感を支援する身体同調技術
62	平成 30 年 10 月 24 日	西田 惇	OPEN 異能 (Inno)vation 2018 —Society5.0 に向けて 始める 認める 繋がる—	bioSync
63	平成 31 年 2 月 2日-3 日	BOEM Alberto	Israel & イスラエル	
64	平成 31 年 4 月 11 日	敷根伸光, 大図岳	人工知能をテーマにしたスマートフォン向けビジュアルノベルアプリ『西暦 2236 年の秘書』が TOKYO MX のテレビ番組『話題のアプリええじゃないか!』で紹介されました。『西暦 2236 年の秘書』は AppStore ならびに Google プレイストアで 1 月にリリースされたアプリでタップするだけで物語を楽しむことができる。	http://eejanyaika.tv https://youtu.be/GkDNO0Xp0fw https://www.4gamer.net/games/446/G044650/20190108060/
65	令和元年 9 月 5日-9 日	小崎 湧太, DOLLACK Felix	Ars Electronica Festival 2019	El-Astrocade
66	令和元年 9 月 5日-9 日	大図 岳	Ars Electronica Festival 2019	Society of Stools [16]

(4) 学生表彰 (学長表彰) 等受賞者

学生表彰 (学長表賞) 学生表彰

授与日	対象者 (個人・団体)	被表彰行為
平成 27 年 5 月 21 日	チーム シャンピニオン (西田 惇、高鳥 光、佐藤 綱祐)	国際学生対抗バーチャルリアリティコンテストでの優勝。
平成 28 年 3 月 17 日	小木曾 里樹	EMP 入学後すぐに、筆頭著者として査読付国際会議論文 4 編、雑誌論文 1 編掲載と短期間に多くの成果を上げた。これらの成果は国際会議等に複数回受賞。また、クラウドコンピューティングによる睡眠管理アプリについて IBM から、センサを内蔵したお皿についてフィリップスから表彰。その他、日本学術振興会特別研究員 DC1 へ面接免除での採用が内定するなど。
平成 29 年 3 月 24 日	村田 耕一	ロボティクス分野での国際会議において優秀賞の受賞、Microsoft Imagine Cup 2016 日本予選大会で優勝し世界大会出場。
平成 29 年 5 月 18 日	西田 惇	サイバニクス・生体拡張技術に関する研究『人々の運動覚体験を融合するウェアラブルデバイス: biosync』において、学術性と実用性の両面から、以下の通り国際的に高く評価される研究成果を挙げている。①アジア・太平洋地域のトップ大学から情報科学分野の PhD 学生に対して与えられるフェロウシップを受賞、② Microsoft Innovation Award のイノベーション・アワード最優秀賞及び日本航空アントレプレナー賞を受賞、③人間情報学分野のトップカンファレンスである ACM 国際会議 CHI において学術論文採択。
平成 30 年 3 月 7 日	佐藤 綱祐	バレーボールアタック練習用ブロックマシンを開発し、女子バレー日本代表チームが適用。その研究成果をロボット分野のトップカンファレンスにおいて発表し、2 つの賞を受賞。また、新たなスポーツである” Carry Otto”を創出。その活動に対して助成金を獲得。また、数々の賞を受賞。
平成 31 年 2 月 28 日	小木曾 里樹	筆頭著者として査読付国際会議論文 6 編、査読付雑誌論文 2 編掲載と多くの研究成果を挙げ、コンテストへも積極的に参加。また、EMP 代表として千葉大学・筑波大学共催の学生会議を成功させ、リーディング大学院の学生交流に貢献。この様子と千葉大学・筑波大学の紹介は日経 BP に掲載され、リーディング大学院の社会的活動例として文部科学省の公的資料に紹介。さらに、IEEE 関連団体の副実行委員長として大規模な若手研究者交流会を主催し、IEEE のニューズレターで紹介。その他、日本学術振興会特別研究員 (DC1) に面接免除で採用され科研費交付を受けるなど、高い評価。

グローバル教育院長賞

授与日	対象者（個人・団体）	被表彰行為
平成 29 年 3 月 24 日	村田 耕一	ロボティクス分野での国際会議において優秀賞の受賞、Microsoft Imagine Cup 2016 日本予選大会で優勝し世界大会出場。
平成 30 年 3 月 23 日	PERUSQUIA HERNANDEZ Monica	サイバニクス分野における先進的な研究において、著名な論文誌にその成果を発表し、高い評価を受けた。また、ACM の人間拡張分野におけるトップカンファレンスにおいて成果を発表し、学際的な学術成果が認められた。
平成 31 年 3 月 25 日	利根 忠幸	ロボティクス分野における先進的な研究において、世界的に著名な論文誌にその成果を発表し、極めて高い評価を受けた。また、ロボティクス分野の国際会議に 3 件の論文を発表するなど、グローバルに通用する学術的成果が顕著。
令和 2 年 3 月 25 日	TAN Chun Kwang	サイバニクス分野における先進的な研究において、神経科学分野における世界的に著名な論文誌にその成果を 2 件発表し、高い評価を受けた。

茗溪会賞

授与日	対象者（個人・団体）	被表彰行為
平成 29 年 3 月 24 日	村田 耕一	ロボティクス分野での国際会議において優秀賞の受賞、Microsoft Imagine Cup 2016 日本予選大会で優勝し世界大会出場。
平成 30 年 3 月 23 日	CHACIN Aisen Carolina	芸術と工学の分野横断型の研究において、海外で多くの招待展示を行った。また、CBC News や NY Times などのマスメディアにも取り上げられ、アウトリーチの面で多大な貢献。
平成 31 年 3 月 8 日	小木曾 里樹	リーディングプログラムの学生会議の実行委員を務め、この様子が日経 BP 等に掲載された他、文科省の公的資料で紹介。また IEEE 関連団体の副実行委員長として大規模な若手交流会を主催、IEEE のニューズレターで紹介。この他、情報科学技術フォーラム、米 IBM ワトソン研究所にて社会人向けに EMP と研究成果を紹介するなど、若手研究者交流と成果発信に貢献。
令和 2 年 3 月 25 日	佐野 裕士	国内大手メーカー企業に本プログラムへの理解を深めるプレゼンを行うなど、筑波大学の活動を広く社会へ発信。また、IEEE TOWERS の運営に 5 年間携わり、2019 年は実行委員長として筑波大学エンパワースタジオにおいて参加者 100 名超のワークショップを主催するなど、魅力的な学術的交流の場を提供。その他に、国際食品工業展 (FOOMA JAPAN) のアカデミックプラザで通訳ボランティアを実施する等、学内外での精力的な活動が評価された。

3. 博士（人間情報学）学位授与者

平成 28 年度修了

学生氏名	博士論文題目	ER 研修先	就職先	顔写真
村田 耕一	感覚機能の客観的評価のための MRI 対応感覚刺激システム			【非公開】
若生 遼	The effects of reference frames in the formation of haptic spatial representation of object relations (触運動知覚による物体位置関係の空間表象における参照枠の影響)			
潘 雅冬	Modeling of Face-to-Face Behavior in Scenario-based Interaction among Humans and Robots (場面別のインタラクションにおける人およびロボットとの対面行動モデルに関する研究)			

平成 29 年度修了

学生氏名	博士論文題目	ER 研修先	就職先	顔真
ERICH Floris Marc Arden	Reactive Programming using Procedural Parameters for End-User Development and Operations of Robot Behavior Control (エンドユーザによるロボット行動制御のための手続型変数を用いたリアクティブプログラミング)			【非公開】
CHACIN Aisen Carolina	Visuospatial Assistive Device Art: Expanding Human Echolocation Ability (視空間支援のためのデバイスアート：人間の反響定位能力の拡張)			
PERUSQUÍA HERNÁNDEZ Monica	Dynamics of Positive Affective Responses Identified through Behavioral and Electrophysiological Measures (行動・電気生理的指標を通じて同定される肯定的情動反応の動特性)			
JAZBEC Maša	CRITICAL DEVICE ART SYSTEMS Series of different system settings for interacting and investigating of the active Self (クリティカル・デバイスアート・システムー自己との相互作用と分析を行う作品群)			

平成 30 年度修了

学生氏名	博士論文題目	ER 研修先	就職先	顔写真
小木曾 里樹	聴覚補完のための骨導振動子センサレス接触圧力推定法に関する研究			【非公開】

学生氏名	博士論文題目	ER 研修先	就職先	顔写真
佐藤 網祐	バレーボールのアタックトレーニングを拡張するシステムデザインに関する研究			
高鳥 光	大規模没入ディスプレイの設計手法とその実装に関する研究			
利根 忠幸	Ferrofluid-based deformable robotic sheet with magnetic field control (磁場の制御を用いた磁性流体による変形ロボットシートの研究)			
西田 惇	Shaping Egocentric Experiences with Wearable Cybernic Interfaces (装着型サイバニック・インタフェースによる主体的な自己体験の変容)			
BRUMLEY John	Spatially Immersive Sound in the Bird Song Diamond Project (バードソングダイヤモンドプロジェクトにおける空間没入音場)			
BOEM Alberto	Malleable Media: Towards Shape-changing Interfaces (マリアブル・メディア 形状可変インタフェースの創成)			
LOBO Joana Polónia Coelho de Azeredo	Persuasive Mobile Health Technologies for Medical Communication and Interactive Therapy (医療コミュニケーションとインタラクティブな療育のための人を動かすモバイルヘルス技術)			
倉本 尚美	コミュニティにおける情報共有のための高齢者の嚙下障害特性に関する研究			

【非公開】

令和元年度修了

学生氏名	博士論文題目	ER 研修先	就職先	顔写真
大図 岳	ニゲルイス：座らせない椅子型デバイスによるインタラクションの誘発			

【非公開】

学生氏名	博士論文題目	ER 研修先	就職先	顔写真
佐藤 晃矢	行動ログを用いた人の行為選択のモデル化と予測			
佐野 祐士	温熱快適性向上と視触覚刺激を用いる作業負荷の低減による運動時パフォーマンス向上に関する研究			
敷根 伸光	動画学習のセグメンテーション効果を応用したビジュアルノベルシステムの開発とシーク操作における認知負荷の分析			
ISHAC Karlos	Embodied Interfaces for Sensing and Augmenting Human Posture Coordination (姿勢調節機能を計測し拡張する身体的インタフェースの研究)			
佐々木 海	Stair-Climbing Mobility Device utilizing Mechanical Power Flow between Human and Machine (人-機械間の共力に基づき階段昇降するパーソナルモビリティ)			
小崎 湧太	An eyewear robot for supporting eyelid closure movement for facial palsy patients (顔面麻痺患者の閉瞼動作を支援するウェアロボット)			
XIE Chun	Projector Calibration for Spatial Augmented Reality in Large-Scale Space (大規模空間における投影型拡張現実のためのプロジェクタキャリブレーション法)			
TAN Chun Kwang	Analysis of body coordination with muscle synergies during robot-assisted exercise and therapy (ロボット支援運動および治療中の筋活動相乗作用による身体協調の分析)			
DOLLACK Felix	Behavioral understanding of human spatial perception and navigation in auditory space (聴空間における空間知覚とナビゲーションに関する行動理解)			

【非公開】

筑波大学 グローバル教育院
エンパワーメント情報学プログラム
平成 25 年度～令和元年度 活動報告書

令和 2 年 3 月 発行

〒 305-8573
茨城県つくば市天王台 1-1-1
筑波大学 第三エリア A 棟 2 階 3A218
グローバル教育院 エンパワーメント情報学プログラム事務室